浜松城跡15

Hamamatsu Castle
The 27th and 39th excavation repoit

浜松市教育委員会

2022年1月

Hamamatsu Municipal Board of Education,January,2022

浜松城跡 15

HAMAMATSU CASTLE

The 27th and 39th excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2022

浜松市教育委員会

1　27次調査区（A区）　遠景（奥側に元城町東照宮（引間城推定地）を望む、南から）

2　27次調査区（B区）　遠景（左手に浜松城、右手奥に元城町東照宮（引間城推定地）を望む、南東から）

SD01　完掘状況　（東から）

SD02　完掘状況　（北東から）

1　主要遺物集合

2　漆器集合

例　言

1　本書は、静岡県浜松市中区元城町 114-1 において実地した浜松城跡 27 次・39 次調査の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、店舗建設工事に先立ち実施した。現地の発掘調査作業、整理等作業および報告書刊行は、事業主体である浜松磐田信用金庫からの依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施し、浜松市から委託を受けた株式会社島田組が実務を補佐した。調査にかかわる費用は、浜松磐田信用金庫が負担した。

3　発掘調査の面積と期間は、以下のとおりである。

27 次調査　調査面積　1700 ㎡
　　調査期間　現地調査　令和元年 7 月 22 日～令和 2 年 2 月 29 日
　　整理期間　令和 2 年 3 月 1 日 ～令和 4 年 1 月 31 日
39 次調査　調査面積　110 ㎡
　　調査期間　現地調査　令和 2 年 11 月 24 日～ 12 月 4 日
　　整理期間　令和 2 年 12 月 8 日～令和 4 年 1 月 31 日

4　27 次調査は、和田達也（浜松市市民部文化財課）、川西啓喜（同）が担当し、野津旭（株式会社島田組）が実務を補佐した。また、河本匡人（同）、加藤優弥（同）が作業に加わった。なお、遺物実測・遺物写真撮影と報告書全体の編集作業は 39 次調査分とあわせて株式会社島田組が実務を補佐した。

5　39 次調査は、川西が担当し、西森忠幸（株式会社島田組）が実務を補佐し、平井利尚（同）が作業に加わった。整理作業は萩原美香（株式会社島田組）が実務を補佐し、野津が作業に加わった。

6　本書の執筆は、第 1 章 1・3 を川西、第 1 章 2・4 を野津、第 2 章を高見澤太基（株式会社島田組）、第 3 章を西森、第 4 章を株式会社吉田生物研究所、第 5 章を川西が行った。現地における写真撮影は、27 次調査を野津、39 次調査を西森が担当し、一部を川西が行った。遺物写真撮影は安川賢太（株式会社島田組）、井上亮一（同）が行った。本書の編集は、川西が担当し、野津が実務を補佐し、井上、田中利沙（同）が作業に加わった。

7　調査にかかわる緒記録および出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

8　調査および本書の作成においては、下記の方々および機関のご協力、ご教示を得た。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。
金子健一（公益財団法人瀬戸市文化振興財団）、中嶌茂（公益財団法人土岐市文化振興事業団）

凡　例

1　標高はT.P.（東京湾平均海面）、方位および座標は平面直角座標系、第Ⅷ系（世界測地系）に準拠した。

2　本書で使用する土層や遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』2016年度版に準じて記述した。

3　本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。
教育委員会　→　教委　　（財）浜松市文化振興財団　→　浜文振

4　本書における遺構の略号は以下のとおりである。
堀・溝（SD）、井戸（SE）、土坑（SK）、掘立柱建物（SH）、柱穴列（SA）、小穴（SP）、不定形遺構・性格不明遺構（SX）

5　遺構図・遺物図の網掛けの使用例は以下のとおりである。
土師器・土師質土器 (K=0%)　柱痕 (K=10%)　磁器 (K=20%)
漆器 (K=30%)　陶器 (K=40%)　須恵器 (K=100%)

6　遺構番号は調査次数および遺構種類別ごとに、遺物番号はとおし番号を付している。

7　本文中に使用した土器の型式名や用語および編年観は、以下の文献に基づいて記載した。
須恵器：鈴木敏則 2005「出土須恵器について」『東若林遺跡』（財）浜松市文化振興財団
陶器　：藤澤良祐 2007「総論」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
　　仲野泰裕 2007「総論」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県

浜松城跡 15

目　次

例　言
凡　例

第1章　序　論 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1
2　地理的・歴史的環境 …… 2
3　浜松城跡の調査歴 …… 5
4　調査の方法と経過 …… 10

第2章　27次調査成果 …… 13

1　概　要 …… 13
2　検出遺構と出土遺物 …… 13
3　小　結 …… 96

第3章　39次調査成果 …… 97

1　概　要 …… 97
2　検出遺構と出土遺物 …… 97
3　小　結 …… 108

第4章　分　析 …… 109

第5章　総　括 …… 120

遺物観察表
図　版

図 版 目 次

巻頭図版

1 － 1　27 次調査区（A区）　遠景（南から）
1 － 2　27 次調査区（B区）　遠景（南東から）
2　SD01　完掘状況（東から）
3　SD02　完掘状況（北東から）
4 － 1　主要遺物集合
4 － 2　漆器集合

図 版

PL. 1　1　27 次調査区（A区）　全景（真俯瞰北上）
　　2　27 次調査区（A区）　完掘状況（南東から）
PL. 2　SD01　完掘状況（北西から）
PL. 3　1　SD01　掘削状況（廃絶時 北東から）
　　2　SD01　完掘状況（東から）
PL. 4　1　SD01　断面（西から）
　　2　SD01　作業状況（東から）
PL. 5　SD02　完掘状況（南東から）
PL. 6　1　SD02　掘削状況（廃絶時 北東から）
　　2　SD02　完掘状況（北東から）
PL. 7　1　SD02　断面（南から）
　　2　SD02　作業状況（南から）
　　3　SD02　遺物（104）出土状況（西から）
　　4　SD02　遺物（140）出土状況（西から）
PL. 8　1　SD04　完掘状況（南西から）
　　2　SD04　遺物（186）出土状況（北西から）
　　3　SD04　遺物（225）出土状況（南西から）
　　4　SE01　断割断面（南から）
　　5　SE01　断面上層（南から）
　　6　SE01　井筒出土状況（南から）
PL. 9　1　SK02　礫出土状況（南から）
　　2　SK02　断面（南から）
　　3　SK06　断面（東から）
　　4　SK20　断面（南東から）
　　5　SK21　断面（南から）
PL. 10　1　SH01　完掘状況（南から）
　　2　SP68（SH01）　断面（南から）
　　3　SP76（SH01）　断面（西から）
　　4　SP167（SH01）　礫出土状況（南から）
　　5　SP420（SH01）　断面（北から）
PL. 11　1　SH02　完掘状況（南から）
　　2　SP184（SH02）　断面（北から）
　　3　SP242（SH02）　断面（北から）
　　4　SP497（SH02）　断面（南から）
　　5　SP500（SH02）　断面（南東から）
PL. 12　1　SA02　完掘状況（南から）
　　2　SP234（SA02）　断面（東から）
　　3　SP248（SA02）　断面（東から）
　　4　SP71, SP72　断面（南東から）
　　5　SP94　断面（東から）
　　6　SP150　礫出土状況（南から）
　　7　SP407（SA01）　断面（南から）
PL. 13　1　27 次調査区（B区）　遠景（南西から）
　　2　27 次調査区（B区）　全景（真俯瞰北上）
PL. 14　SD04　完掘状況（南東から）
PL. 15　1　SD04　完掘状況（北から）
　　2　SD04　遺物（283）出土状況（西から）
　　3　SD04　遺物（254）出土状況（西から）
　　4　SD04　断面（南から）
PL. 16　1　SE02　断面上層（南から）
　　2　SE02　断面中層（東から）
PL. 17　1　SE03　断割断面（南から）
　　2　SE03　断面上層（南から）
　　3　SE03　断面中層（南から）
　　4　SE03　井筒出土状況（南から）
　　5　SE03　遺物（364）出土状況（南から）
PL. 18　1　SK22　断面　（南から）
　　2　SK22　完掘状況（東から）
　　3　SK25　断面（南から）
　　4　SK25　完掘状況（南から）
　　5　SK26　断面（南から）
　　6　SK28　遺物（454）・礫出土状況（南から）
　　7　SK33　断面（南西から）
　　8　SK33　完掘状況（西から）
PL. 19　1　SH04　完掘状況（南東から）
　　2　SP638（SH04）　断面（南から）
　　3　SP641（SH04）　礫出土状況（南から）
　　4　SP742（SH04）　断面（南から）
　　5　SP746（SH04）　断面（南から）
PL. 20　1　SA07　完掘状況（東から）
　　2　SP554（SA07）　断面（南から）
　　3　SP560（SA07）　遺物出土状況（東から）
　　4　SP428　断面（南東から）
　　5　SP717　遺物出土状況（南東から）
　　6　SP797（SA04）　礫出土状況（南から）
　　7　SP801　礫出土状況（北から）
PL. 21　39 次調査区　全景（南東から）
PL. 22　1　SD01　遺物出土状況（南西から）
　　2　SD01　完掘状況（南西から）
PL. 23　1　SD03　遺物出土状況（南西から）
　　2　SD03　完掘状況（南西から）
PL. 24　1　小穴群　完掘状況（南東から）
　　2　39 次調査区北壁　断面（南から）
PL. 25　SD01　出土遺物（1）
PL. 26　SD01　出土遺物（2）
PL. 27　SD02　出土遺物（1）
PL. 28　SD02　出土遺物（2）
PL. 29　SD02　出土遺物（3）
PL. 30　SD03, SD04　出土遺物（1）
PL. 31　SD04　出土遺物（2）

PL. 32　SD04　出土遺物（3）
PL. 33　SD04　出土遺物（4）
PL. 34　SD04　出土遺物（5）
PL. 35　SD04　出土遺物（6）
PL. 36　1　SE01　出土遺物
　　2　SE02　出土遺物（1）
PL. 37　SE02　出土遺物（2）
PL. 38　SE02　出土遺物（3）
PL. 39　SE03, SK06, SK09　出土遺物
PL. 40　SP, SX　出土遺物
PL. 41　1　39 次調査　SD01, SD02　出土遺物
　　2　39 次調査　SD03　出土遺物
PL. 42　1　39 次調査　SD03　出土木製品
　　2　39 次調査　SX01　出土遺物（1）
PL. 43　39 次調査　SX01　出土遺物（2）
PL. 44　39 次調査　遺構外出土遺物

挿図目次

Fig. 1　浜松城跡の位置 …… 1
Fig. 2　浜松城跡の周辺地形 …… 2
Fig. 3　浜松城跡復元図 …… 3
Fig. 4　浜松城下町の構成 …… 4
Fig. 5　浜松城跡の発掘調査履歴 …… 5
Fig. 6　確認調査区位置図 …… 7
Fig. 7　確認調査区位置図および土層柱状図 …… 8
Fig. 8　調査溝 2　完掘状況 …… 9
Fig. 9　おもな出土遺物 …… 9
Fig. 10　27 次・39 次調査区配置図 …… 11
Fig. 11　作業風景 …… 12
Fig. 12　27 次調査区全体図 …… 14
Fig. 13　27 次調査区全体図（本報告書掲載）… 15
Fig. 14　SD01 遺構図（1）…… 16
Fig. 15　SD01 遺構図（2）…… 17
Fig. 16　SD01 出土遺物実測図（1）…… 18
Fig. 17　SD01 出土遺物実測図（2）…… 19
Fig. 18　SD01 出土遺物実測図（3）…… 20
Fig. 19　SD01 出土遺物実測図（4）…… 21
Fig. 20　SD02 遺構図（1）…… 23
Fig. 21　SD02 遺構図（2）…… 24
Fig. 22　SD02 遺構図（3）…… 25
Fig. 23　SD02 出土遺物実測図（1）…… 27
Fig. 24　SD02 出土遺物実測図（2）…… 28
Fig. 25　SD02 出土遺物実測図（3）…… 29
Fig. 26　SD02 出土遺物実測図（4）…… 30
Fig. 27　SD02 出土遺物実測図（5）…… 31
Fig. 28　SD03 遺構図 …… 32
Fig. 29　SD03 出土遺物実測図 …… 33
Fig. 30　SD04 遺構図（1）…… 35
Fig. 31　SD04 遺構図（2）…… 36
Fig. 32　SD04 遺構図（3）…… 37
Fig. 33　SD04 出土遺物実測図（1）…… 38
Fig. 34　SD04 出土遺物実測図（2）…… 39
Fig. 35　SD04 出土遺物実測図（3）…… 40
Fig. 36　SD04 出土遺物実測図（4）…… 41
Fig. 37　SD04 出土遺物実測図（5）…… 42
Fig. 38　SD04 出土遺物実測図（6）…… 43
Fig. 39　SD04 出土遺物実測図（7）…… 44
Fig. 40　SD04 出土遺物実測図（8）…… 45
Fig. 41　SD05, SD07, SD08, SD09, SD11 遺構図 …… 47
Fig. 42　SD13, SD14, SD15, SD16 遺構図 …… 49
Fig. 43　SD17, SD18, SD21, SD22, SD23 遺構図 …… 50
Fig. 44　SD19, SD20 遺構図 …… 51
Fig. 45　SD19, SD23 出土遺物実測図 …… 52
Fig. 46　SE01 遺構図 …… 53
Fig. 47　SE01 出土遺物実測図 …… 54
Fig. 48　SE02 遺構図 …… 56
Fig. 49　SE02 出土遺物実測図（1）…… 57
Fig. 50　SE02 出土遺物実測図（2）…… 58
Fig. 51　SE02 出土遺物実測図（3）…… 59
Fig. 52　SE03 遺構図（1）…… 60
Fig. 53　SE03 遺構図（2）…… 61
Fig. 54　SE03 出土遺物実測図 …… 62
Fig. 55　SK02, SK03, SK04, SK05 遺構図 …… 63
Fig. 56　SK06, SK09, SK19, SK20 遺構図 …… 65
Fig. 57　SK06 出土遺物実測図 …… 66
Fig. 58　SK21, SK22, SK25, SK26 遺構図 …… 67
Fig. 59　SK27, SK28, SK31, SK32, SK33 遺構図 …… 69
Fig. 60　SK09, SK21, SK22, SK25,
　　SK28 出土遺物実測図 …… 70
Fig. 61　SH01 遺構図 …… 72
Fig. 62　SH02 遺構図 …… 73
Fig. 63　SH03 遺構図 …… 74
Fig. 64　SH04 遺構図 …… 75
Fig. 65　SA01, SA02 遺構図 …… 77
Fig. 66　SA03, SA06 遺構図 …… 78
Fig. 67　SA04, SA05 遺構図 …… 79
Fig. 68　SA07 遺構図 …… 80
Fig. 69　SH01, SH02, SH04, SA01, SA02, SA03,
　　SA07 出土遺物実測図 …… 81
Fig. 70　SX01, SX02 遺構図 …… 82
Fig. 71　SX01, SX02 遺物実測図 …… 82
Fig. 72　SP21, SP27, SP30 遺構図 …… 84
Fig. 73　SP50, SP62, SP80, SP91, SP94,
　　SP107 遺構図 …… 85
Fig. 74　SP110, SP150, SP151, SP178, SP180,
　　SP201 遺構図 …… 86
Fig. 75　SP217, SP238, SP249, SP300, SP320,
　　SP349 遺構図 …… 87
Fig. 76　SP353, SP364/365, SP387/SP388, SP390,
　　SP391 遺構図 …… 88
Fig. 77　SP410, SP422, SP424, SP428, SP434,
　　SP476 遺構図 …… 90

Fig. 78　SP482, SP483, SP504, SP518, SP553, SP565 遺構図 …… 91
Fig. 79　SP594, SP626, SP634, SP646, SP681, SP717 遺構図 …… 93
Fig. 80　SP745, SP753, SP787, SP801, SP803 遺構図 …… 94
Fig. 81　遺構 SP 出土遺物実測図 …… 95
Fig. 82　39 次調査区全体図 …… 97
Fig. 83　北壁土層断面図 …… 98
Fig. 84　SD01, SD02 遺構図 …… 99
Fig. 85　SD01, SD02 出土遺物実測図 …… 99
Fig. 86　SD03 遺構図 …… 100
Fig. 87　SD03 出土遺物実測図 …… 101
Fig. 88　SP04, SP05, SP06, SP24 遺構図 …… 103
Fig. 89　SX01 出土遺物実測図（1）…… 104
Fig. 90　SX01 出土遺物実測図（2）…… 105
Fig. 91　SX01 出土遺物実測図（3）…… 106
Fig. 92　SX01 出土遺物実測図（4）
遺構外出土遺物実測図（1）…… 107
Fig. 93　遺構外出土遺物実測図（2）…… 108
Fig. 94　顕微鏡写真（1）…… 112
Fig. 95　顕微鏡写真（2）…… 113
Fig. 96　顕微鏡写真（3）…… 114
Fig. 97　顕微鏡写真（4）…… 115
Fig. 98　顕微鏡写真（5）…… 116
Fig. 99　顕微鏡写真（6）…… 117
Fig. 100　顕微鏡写真（7）…… 118
Fig. 101　顕微鏡写真（8）…… 119
Fig. 102　遠州浜松城図 …… 120
Fig. 103　青山家御家中配列図 …… 120
Fig. 104　浜松城跡 27・39 次調査区の変遷 …… 121

挿 表 目 次

Tab. 1　浜松城における調査等の履歴 …… 6
Tab. 2　出土漆器同定表 …… 111
Tab. 3　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（1）…… 124
Tab. 4　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（2）…… 125
Tab. 5　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（3）…… 126
Tab. 6　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（4）…… 127
Tab. 7　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（5）…… 128
Tab. 8　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（6）…… 129
Tab. 9　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（7）…… 130
Tab. 10　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（8）…… 131
Tab. 11　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（9）…… 132
Tab. 12　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（10）…… 133
Tab. 13　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（11）…… 134
Tab. 14　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（12）…… 135
Tab. 15　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（13）…… 136

第1章　序　論

1　調査に至る経緯

静岡県浜松市中区元城町に所在する浜松城は、市の中心部に位置する（Fig.1）。城域の外縁部にあたる三の丸等は市街地化が進行しているが、天守曲輪をはじめとした城域の中心部は、築造当初の石垣が残存しており、市指定史跡として保護されている。また、城域の一部は浜松城公園として整備され、市民の憩いの場として活用が図られている。

浜松城跡における発掘調査は、近年利用者ニーズの多様化や施設の老朽化に伴い、再整備の必要性が求められる中で、長期的な整備に向けた検討材料を得るための調査が天守曲輪周辺を中心に行われてきた。一方、三の丸等の外縁部においては市街地化が進んでいるものの、近年公共工事や民間開発に先立つ発掘調査等が行われてきた結果、地下に遺構が残存していることが明らかとなりつつある。

今回の調査対象地は浜松磐田信用金庫の駐車場として利用されていたが、平成27年（2015）に建物の老朽化に伴い、本店・本部棟の新築が計画された。対象地は浜松城の三の丸に位置し、屋敷や土塁等の三の丸に関連する遺構・遺物の存在が想定されたため、確認調査を行うことになった。その結果、戦国時代～江戸時代にかけての遺構・遺物が、対象地全域において良好に残存していることが確認された。こうした結果を受けて開発事業者と遺跡の取扱いについて協議を行った結果、遺跡の保護を図ることができない建物部分を対象として記録保存を目的とした本発掘調査を行うこととなった。

本発掘調査は、浜松磐田信用金庫の依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施し、実務は株式会社島田組が実務を補佐した。現地調査は令和元年（2019）7月22日～令和2年（2020）2月29日と令和2年（2020）11月24日～12月4日にかけて実施した。調査対象面積は約1,810㎡である。

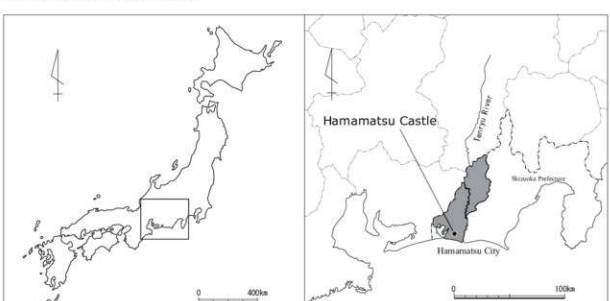


Fig.1　浜松城跡の位置

2　地理的・歴史的環境

（1）地理的環境

浜松城は天竜川下流の西岸、三方ヶ原台地の東縁部にあたる河岸段丘を利用して築城されている。城域は最大で東西 600 m、南北 700 mを測り、最高所に築かれた天守曲輪から東側の平野部に向かって、順に本丸、二の丸、三の丸と曲輪が続く連格式の平山城である。浜松城跡の北側および南側は、谷地形や湿地帯が入り組んでおり、それらをうまく利用して堀や曲輪が配置されている。調査地点は浜松城跡北東部の緩斜面に位置する（Fig. 2）。

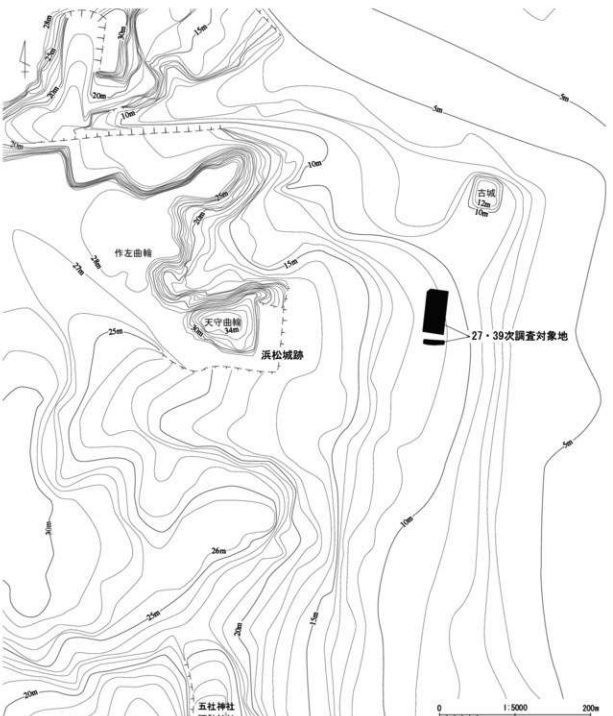


Fig. 2　浜松城跡の周辺地形

（2）歴史的環境

旧石器時代～古代　浜松城跡周辺において、旧石器時代～弥生時代の遺跡の存在は確認されていないが、三方ヶ原台地東縁部はかつて後期古墳や横穴墓が展開していたことが知られており、天守曲輪の北西部には横穴墓である作左山横穴が確認されている。浜松城跡周辺の調査では、作左山横穴から出土した須恵器をはじめ、古墳時代～古代の遺物がわずかだが出土している。

中　世　浜松城の前身である引間城は、現在の元城町東照宮付近一帯の丘陵地とされている。16世紀前葉成立の『宗長手記』によれば、吉良氏被官の巨見新左衛門尉によって築かれたといわれ、15世紀代には整備されたと考えられる。引間城の東側では中世東海道の宿場町として引間宿が栄えていた。16世紀前葉には今川氏の支配下に置かれ、今川氏配下の飯尾氏が引間城主に任じられた。

元亀元年（1570）には、徳川家康が遠江に侵攻して引間城に入場した際、引間城を取り囲む形で、西側の丘陵を利用して城域を拡張し、浜松城と改称したとされる。家康在城期の構造は明確になっていないが、堀や土塁をめぐらせた実戦向きの中世的な城館であったと考えられる。

天正18年（1590）、家康が関東へ移封されると、豊臣氏配下の堀尾吉晴が入城する。この段階で、野面積みの石垣が築かれ、天守をはじめとする瓦葺建物等の整備が行われたと考えられ、城の姿は大きく変貌し、現在みられる浜松城の姿に近づいた（Fig.3）。

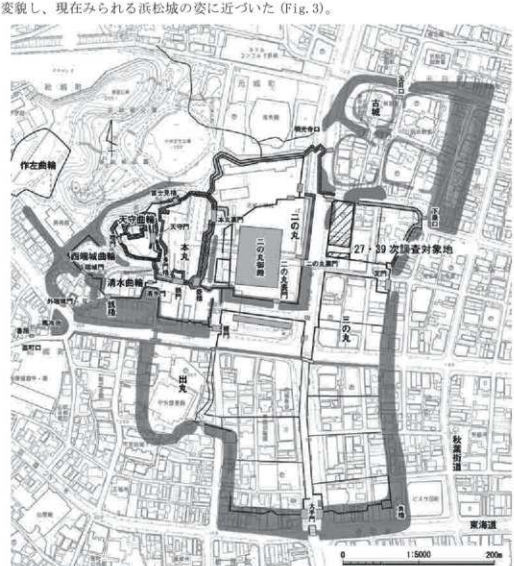


Fig.3　浜松城跡復元図

近　世　関ヶ原の戦いにおいて東軍が勝利すると、浜松城からは豊臣色が払拭され、徳川譜代大名が城主を務めるようになり、近世城郭として整備されていく。17 世紀に描かれた絵図をみると、堀尾氏が創建したとみられる天守は既に失われ、新たに三の丸や城下町の整備が行われたことが確認できる。城下を通る東海道は大手の前で折れ曲がるように変更され、沿道には宿場町を形成し、東海道往来の際には大手門や三の丸櫓が眺望できるようにする等大手門が浜松城を代表する建物となった（Fig. 4）。

また、江戸時代の浜松城は大名にとって幕閣への登竜門として通過する城の一つでもあり、江戸時代を通じての歴代城主は九家二十二代を数える。

近現代　明治 5 年（1872）、廃城令に先立ち、浜松城の建物や土地は民間に払い下げられ、二の丸、三の丸は宅地化が進行した。浜松城城の景観は大きく改変されたものの、天守曲輪と本丸の一部は開発を免れた。昭和 25 年（1950）には天守曲輪を中心に浜松城公園が開設され、昭和 33 年（1958）には堀尾氏時代から残る天守台上に復興天守が建築された。その後、天守曲輪と本丸の一部は昭和 34 年（1959）に浜松市の史跡に指定され、令和 3 年（2021）1 月 28 日には本丸の一部と西端城曲輪が追加指定された。

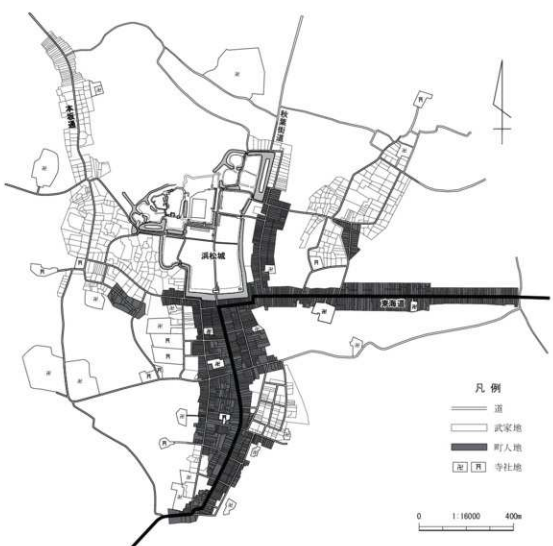


Fig. 4　浜松城下町の構成

3　浜松城跡の調査歴

（1）調査履歴

今回の発掘調査は、浜松城跡発掘調査の 27 次と 39 次にあたる。浜松城跡における発掘調査は、天守曲輪や本丸等のエリアを中心に行われているが、近年三の丸等においても民間開発に伴う発掘調査が行われている。その他に工事立会いや不時発見等を含めるとこれまでに 50 回以上の発掘調査が実施されている（Fig.5）。

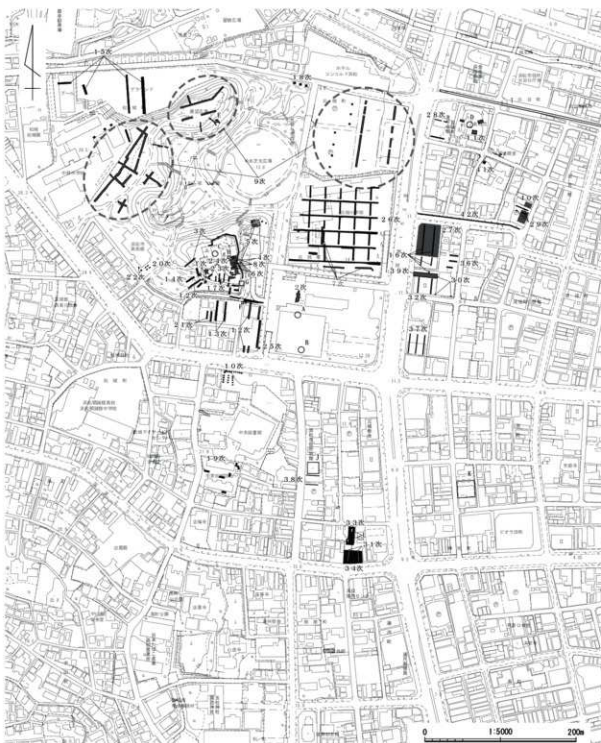


Fig.5　浜松城跡の発掘調査履歴

3　浜松城跡の調査歴

Tab. 1　浜松城における調査等の履歴

発掘調査

名称	年次	調査事由	成果等	文献
1次	1960年	浜松農工高による確認調査		浜松市教委 1996
2次	1979年	市役所地下駐車場整備に伴う工事立会	工事時に石垣が発見され、測量等を実施	浜松市教委 1996
3次	1984年	電線地中化工事に伴う工事立会	天守曲輪周辺の調査で、未知の石垣等を確認	浜松市教委 1984 浜松市教委 1996
4次	2009年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の基礎等を確認	浜文振 2010
5次	2010年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門・富士見櫓の確認調査で、天守門櫓部の基礎構造と考えられる根石列等を確認	浜文振 2011
6次	2011年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守門跡の確認調査で、櫓台石垣の裏込石等を確認	浜文振 2012a
7次	2011年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	二の丸・御誕生場の確認調査で井戸等を確認	浜文振 2012b
8次	2012年	天守門復元工事に伴う確認調査	天守門に付随する瓦積み排水設備の全体像を確認	浜松市教委 2013a
9次	2012年	セントラルパーク構想策定に伴う確認調査	作左曲輪等の確認調査で、柱穴等を確認	浜松市教委 2013b
10次	2014年	市役所駐輪場整備に伴う本発掘調査	溝等を確認	浜松市教委 2015b
11次	2014年	遺構残存状況把握のための確認調査	引間城跡（古城）の確認調査で、土塁を確認、かわらけが多数出土	浜松市教委 2016b
12次	2014年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石垣、天守曲輪南側の空堀跡と西端城曲輪、本丸西側土塁と登り塀を確認	浜松市教委 2015b
13次	2015年	市役所駐車場整備に伴う確認調査	12次調査で確認したものと同一の可能性がある大型溝を確認	浜松市教委 2016a
14次	2015年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	本丸南側石垣、天守曲輪南側の空堀跡と西端城曲輪、本丸西側土塁と登り塀を確認	浜松市教委 2016a
15次	2015年	学校建設に伴う確認調査	浜松城跡の範囲内であるが、城郭に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2016a
16次	2015年	社屋建設に伴う確認調査	三の丸跡に係る遺構は未確認であるが、戦国期以前の遺構と遺物を確認	浜松市教委 2017
17次	2015年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守曲輪南側土塁の依存状態、土塁内側石垣基底部、曲輪内整地面の状況を確認	浜松市教委 2018a
18次	2015年	道路拡幅に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2017
19次	2016年	用地売買に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2017
20次	2015年	美術館施設建設に伴う確認調査	堀とみられる落ち込みを確認	浜松市教委 2018b
21次	2015年	個人住宅建設に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2018b
22次	2015年	美術館施設建設に伴う確認調査	20次調査で確認したものと同一の可能性のある堀跡を確認	浜松市教委 2018b
23次	2018年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	富士見櫓跡周辺で残存状況の良好な石垣を確認。天守曲輪において、高さ2ｍ以上の石塁の埋没状況と瓦集積を確認	浜松市教委 2018a
24次	2018年	浜松城公園整備事業に伴う確認調査	天守曲輪内に、櫓と考えられる基礎と瓦溜まりを確認	浜松市教委 2019
25次	2018年	水道管敷設に伴う工事立会	近世～近代の遺物を確認	浜松市教委 2019
26次	2019年	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	浜松城の本丸御誕生場、二の丸の構造を確認	浜松市教委 2020
27次	2019年	社屋建設に伴う本発掘調査	引間城に関連する堀を確認	本報告
28次	2019年	事務所建設に伴う確認調査	浜松城に係る遺構は確認できず	浜松市教委 2021a
29次	2019年	集合住宅建設に伴う確認調査	下垂口北側の堀を確認（40次調査の確認調査）	浜松市教委 2021a
30次	2019年	社屋建設に伴う確認調査	遺構は確認されなかったが、旧地形の残存を確認	浜松市教委 2021a
31次	2019年	集合住宅建設に伴う確認調査	大手門西側の堀跡を確認（34次調査の確認調査）	浜松市教委 2021b
32次	2019年	社屋建設に伴う確認調査	既存建物によって、遺跡の大半は消滅	浜松市教委 2021a
33次	2020年	集合住宅建設に伴う本発掘調査	近世～近代の土坑・小穴・溝等を確認	浜松市教委 2021b
34次	2020年	集合住宅建設に伴う本発掘調査	大手門西側より、堀両側肩部と部分的な堀底を確認。近世浜松城の堀の規模が判明。家紋瓦が出土した	浜松市教委 2021b
35次	2020年	浜松城公園長期整備構想に関わる確認調査	浜松城の本丸、御誕生場、二の丸の構造を確認（26次調査から継続）	2021年度概要報告予定
36次	2020年	社屋建設に伴う確認調査	三の丸において戦国時代～江戸時代の遺物を確認	2021年度報告予定
37次	2020年	宿泊施設建設に伴う確認調査	三の丸において溝や井戸のほか、多数の小穴を検出	2021年度報告予定
38次	2020年	遺構残存状況把握のための確認調査	三の丸西側の堀を確認	2021年度報告予定
39次	2020年	社屋建設に伴う本発掘調査	引間城に関連する溝を確認	本報告
40次	2020年	集合住宅建設に伴う本発掘調査	下垂口北側の堀を確認	2021年度報告予定
41次	2020年	駐車場造成に伴う工事立会	引間城（古城）に関連する堀を確認	2021年度報告予定
42次	2020年	水道工事に伴う工事立会	引間城南側での立会	2021年度報告予定

工事立会等（主要なもの）

記号	年次	事由	成果等	文献
A	1914年	中堀埋立工事	須恵器出土	静岡県 1930、 浜松市教委 1996
B	1957年	市役所庁舎建設	須恵器出土	浜松市教委 1996
C	1958年	復興天守建設	天守台で井戸跡を確認	浜松市教委 1996
D	1960年	元城町東照宮社殿建設	境内より陶器等が出土	浜松市教委 1996
E	1964年	動物園内施設整備	作左山横穴を確認	向坂 1976、浜松市教委 1996
F	1985年	駐車場擁壁工事	本丸南側石垣を確認	浜松市教委 1996
G	1993年	天守曲輪石垣解体修理	天守台付櫓の改修や天守曲輪南東部の石垣の構造を確認	浜松市教委 1996
H	2012年	天守曲輪ミカン改植	瓦が出土	浜松市教委 2013c
I	2012年	水道工事	引間城（古城）北側の堀を確認	浜松市教委 2014
J	2013年	市役所南別館解体工事	出丸から三の丸にかけての堀を確認	浜松市教委 2015a
K	2014年	集合住宅建設	三の丸東側の堀を確認	浜松市教委 2016c
L	2019年	既存建造物解体工事	小穴を確認し、瓦が出土（33次調査対象地）	浜松市教委 2021b

（2）確認調査の成果

27･39次調査の確認調査は、平成27年（2015）9月20日から21日にかけて実施した（16次調査）（Fig.6）。確認調査は対象地内に5箇所の調査溝を設定して行った。対象地は駐車場として利用されており、アスファルト、砕石より以下の土層堆積状況はおおむね全ての調査溝で近似していた。詳細な基本層序は次のとおりである。上層より1層：黄褐色粘土（現代の盛土）、2層：褐色粘土（焼土・近現代の瓦および陶磁器を含む）、3層：茶褐色／暗褐色粘土（近代の瓦・陶磁器を含む：近代整地層）、4層：褐色／茶褐色粘土（粘土ブロック・近世の瓦を含む：近世整地層）、5層：黒褐色／暗褐色粘土（炭化物・微細なかわらけ片を多く含む：中世末～近世初頭の整地層か）、6層：黄褐色粘土（基盤層）の順である（Fig.7）。

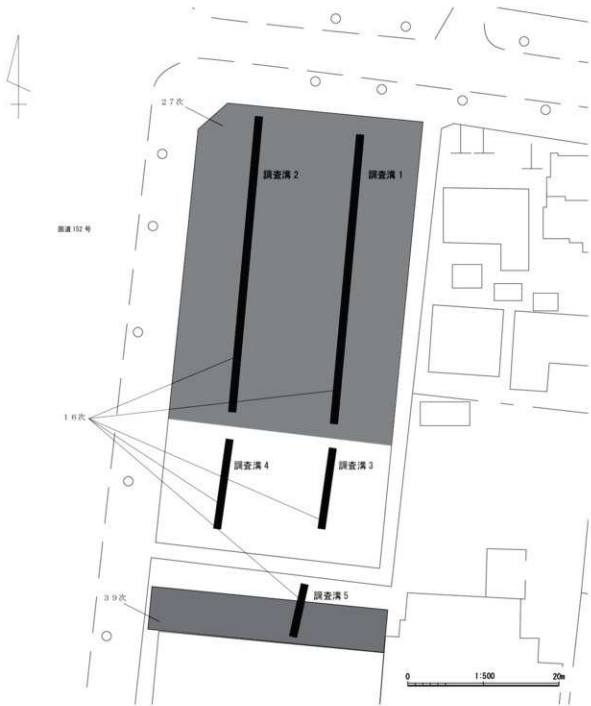
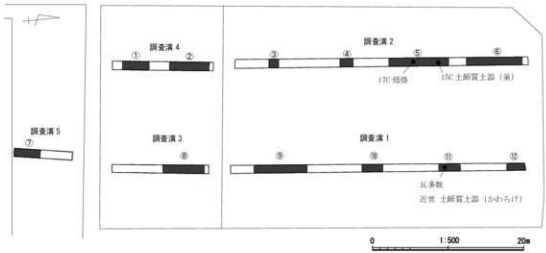
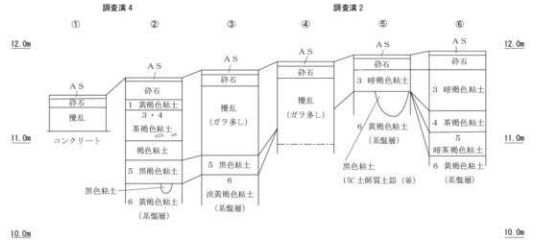


Fig.6　確認調査区位置図





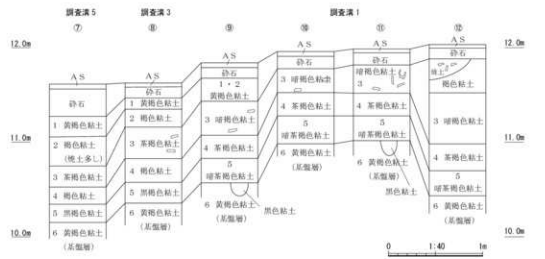


Fig. 7　確認調査区位置図および土層柱状図

遺構は、調査溝１～４において基盤層（６層）を掘りこんだ遺構が確認された。なかでも、調査溝１では、15 世紀後半～ 16 世紀前半頃の羽付釜が出土した土坑や 17 世紀頃の焙烙が出土した土坑が検出された。

出土した遺物は、戦国時代～近代のものが中心であるが、少量ではあるが奈良時代の須恵器片も確認された。とくに、３・４層においては近代の瓦や陶磁器が多く確認された。

確認調査の結果、対象地内は一部攪乱の影響を受けている箇所が見られたものの、おおむね全域に渡って中世末～近代にかけての整地層、土坑等の遺構が検出され、戦国時代～近代にかけての遺物が出土した。こうした結果を受けて、開発行為により遺跡の保護が図れない部分について本発掘調査を行う運びとなった。

Fig.8　調査溝２　完掘状況

Fig.9　おもな出土遺物

参考文献

静岡県　1930『静岡県史』第１巻（旧版）
向坂鋼二　1976「浜松市動物園内作左山横穴墳」『森町考古』10
浜松市教育委員会　1984『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』
浜松市教育委員会　1996『浜松市指定文化財　浜松城跡－考古学的調査の記録－』
㈶浜松市文化振興財団　2010『浜松城跡４次』
㈶浜松市文化振興財団　2011『浜松城跡５次』
㈶浜松市文化振興財団　2012a『浜松城跡６次』
㈶浜松市文化振興財団　2012b『浜松城跡７次』
浜松市教育委員会　2013a『浜松城跡８次』
浜松市教育委員会　2013b『浜松城跡９次』
浜松市教育委員会　2013c『平成 23 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2014『平成 24 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2015a『平成 25 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2015b『浜松城跡 10』
浜松市教育委員会　2016a『浜松城跡 11』
浜松市教育委員会　2016b『浜松における中世城館の調査』
浜松市教育委員会　2016c『平成 26 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2017『平成 27 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2018a『浜松城跡 12』
浜松市教育委員会　2018b『平成 28 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2019『浜松城跡 13』
浜松市教育委員会　2020a『平成 30 年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2020b『浜松城跡 26 次調査の概要』
浜松市教育委員会　2021a『令和元年度　浜松市文化財調査報告』
浜松市教育委員会　2021b『浜松城跡 14』

4　調査の方法と経過

（1）27次調査の方法と経過

調査の方法　調査地は、街中であり排土処理が困難であるため、北側（A区）と南側（B区）に分け、A区の調査終了後埋め戻しを行い、完了後B区の調査を行った。表土掘削はA・B区ともバックホウによる掘削を行った。試掘（16次調査）データより近世および中世末～近世初頭の遺物整地層上面まで掘削を行ったが、近現代の攪乱等により消失している部分が多く、また、整地層上面で遺構は確認できなかったことから、基盤層上面まで重機掘削を行った。その後、基盤層上面で人力による遺構精査を行い、検出した遺構については半裁あるいは土層観察用ベルトを残して掘削し、埋土の堆積状況を図面や写真に記録した後に完掘作業を進めた。遺構測量は、基本的にトータルステーションによる三次元計測と、オルソ画像を用いた写真測量を併用して行った。写真撮影は、6×7判と35㎜のフィルムカメラ（いずれもカラーリバーサル）を使用し、フルサイズセンサーのデジタルカメラを併用した。完掘状況撮影においてはローリングタワー上から4×5判のフィルムカメラも用い、ドローンによる垂直写真・景観写真も撮影した。

グリッド設定（Fig.10）　調査を開始するにあたり、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅶ系を用い、39次調査区まで連続して10m間隔のグリッドを設定した。原点は、グリッド北西隅（X=-142,600、Y=-70,730）とし、南北方向にアルファベット、東西方向に数字を用い、各々を組み合わせて呼称した。

調査の経過　現地調査は令和元年（2019）7月22日から開始した。7月22日から31日にかけて重機によるA区の表土掘削を行い、8月1日から遺構検出を行うが、上記の通り、攪乱により著しく遺構面が消失しており、8月27日から再度バックホウによる基盤層までの掘削を行った。その後、遺構調査を進め、10月17日にA区の全景および遺構完掘状況の写真撮影を行った。11月5日から25日にかけてバックホウによりA区埋め戻しおよびB区表土掘削を行った。その後、遺構検出を行い、遺構調査を進めた。令和2年（2020）2月5日に全面清掃し、2月6日にB区全景および遺構完掘状況の写真撮影を行った。遺構測量や写真撮影は調査の途中で適宜実施し、2月29日までにすべての現地調査を完了した。

現地説明会　令和元年（2019）10月19日に、今回の調査地で見つかった遺構と出土遺物を公開する現地説明会を開催した。当日は荒天にもかかわらず、午前・午後2回合計で500名の見学者を迎え入れ、市民らは新しく発見された北側と西側の堀（SD01・SD02）や大量の遺物を興味深く見入っていた。

整理作業　現地調査終了後の令和2年3月1日から19日にかけて遺物の1次整理作業（遺物洗浄・注記）を現場事務所にて実施した。

調査参加者　石岡幸、影山文子、佐藤政治、鈴木清、須部公夫、辻健治、藤原豊廣、
大庭俊、澤木延文、澤田万里、永津良子

（2）39次調査の方法と経過

調査の方法　27次調査同様、近現代の攪乱等により消失している部分が多く認められた。そのため、基盤層上面までバックホウにより表土掘削を行った後、人力により遺構精査をかけて遺構を確定させ、遺構調査を進める。遺構測量は、基本的にトータルステーションによる三次元計測と、オルソ画像を用いた写真測量を併用して行った。写真撮影は、6×7判と35㎜のフィルムカメラ（い

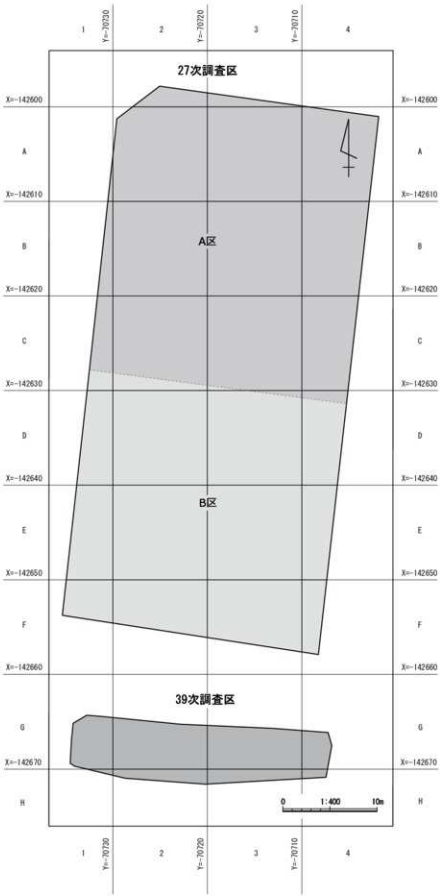


Fig. 10　27次・39次調査区配置図

ずれもカラーリバーサル・白黒）を使用し、フルサイズセンサーのデジタルカメラを併用した。完掘状況撮影は高所作業車により行った。

調査の経過　現地調査は令和２年（2020）11 月 24 日・25 日でバックホウによる表土掘削を行い、引き続き遺構検出を進めた。調査区の南半部分は攪乱により遺構面は消失していた。遺構調査を進め 12 月３日に高所作業車からの遺構完掘状況の写真撮影を行い現地調査は完了した。

整理作業　現地調査終了後の令和２年（2020）４月から令和４年（2022）１月にかけて 27 次調査分と併せて遺物の整理作業および報告書作成作業を、株式会社島田組の本社整理棟にて行った。

調査参加者　澤木延文、澤田万里、須部公夫、永津良子、藤原豊廣、井上亮一、岡中喜美、瀬川かおり、出口まゆみ、永田紀博、萩原美香、藤中貴子、石守瞳、井上昌子、岡田都代、斎藤早苗、中島有美、野村佳弘、百野清美、森岡沙織、山内千恵子

1：27 次現地調査、2：39 次現地調査、3：遺構撮影風景、4：現地説明会、5：整理作業風景、6：報告書編集作業風景

Fig.11　作業風景

第２章　27次調査成果

１　概　要

（１）調査の概要

調査区の位置　27次調査は浜松城の三の丸武家屋敷推定地の北西端にあたる場所で、調査の都合上Ａ区Ｂ区と分けて調査を行ったが、本報告では両区を併せて１つの調査区として報告する(Fig.３・10)。

検出遺構・出土遺物　遺構は調査区全域で633基を検出した。内訳は、小穴（SP）591基、土坑（SK）17基、井戸（SE）３基、堀・溝（SD）20基、性格不明遺構（SX）２基である（Fig.12）。特に小穴（SP）を多く確認したが、このうち、建物を復元できるもの（SH）、等間隔に並ぶもの（SA）、単独であっても礎石・根固め石・柱痕がみとめられるもの、遺物が出土しているもののみ本報告書に掲載している(Fig.13)。調査区内には大規模な攪乱で遺構が消失している箇所が多くみられたが、出土遺物・埋土から中世後期～近世と考えられる遺構を同一面で検出した。

（２）周辺の地形と基本層序

調査区周辺の地形　現状地形は本丸から南へ緩やかに傾斜していき、調査区周辺では北西から南東へ緩やかに傾斜する。

基本層序　本発掘調査において確認した基本層序は次のとおりである。１層：表土・盛土、２層：暗褐色粘土（近代以降）、３層：褐灰色粘土（近世整地層か）、４層：暗褐灰色粘土（中世末～近世初頭の整地層か）、５層：淡黄色粘土（基盤層）である。確認調査（16次成果）の成果を踏まえ、表土掘削後、近世整地層とみられる３層上面において遺構検出を行ったが、近代と考えられる遺構や攪乱等が顕著であり、下層の４層上面においても同様の様相が確認された。そのため、遺構検出は各整地層上面での遺構検出は困難と判断し、基盤層上面において行った。

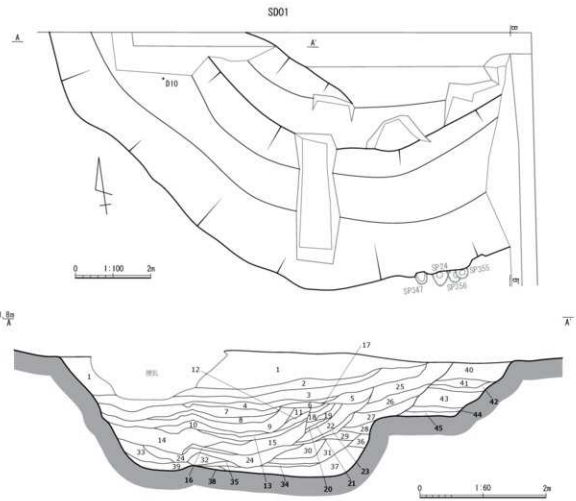
２　検出遺構と出土遺物

（１）堀・溝（ＳＤ）

SD01（Fig.14・15）　A3・A4グリッドに位置する東西方向に延びる堀である。両端は湾曲し調査区外へと延びているため本来の規模は不明であるが、調査区内において長軸14.72ｍ、短軸5.73ｍ、深さ2.05ｍを確認した。軸は、西半はN-40°-W、東半はN-85°-Eを。断面形状は、逆台形を呈しており、北側には幅1.0ｍ程の段を有する。検出面から１段目、１段目から底面までの深さはいずれも約1.0ｍである。掘方の傾斜は、北側および南側ともに約40°～60°で開削されている。埋土はⅠ～Ⅲの３層に大別できる。Ⅰ層（上層）は黄褐色系シルト（礫を多く含む）である。色調は基盤層（黄褐色粘土）と酷似しており、廃絶時の埋め立て土と考えられる。上層内からは戦国時代～近世初頭の遺物に加えて、小片のため図示できなかったが、近世末～近代にかけての陶磁器が出土した。Ⅱ層（中層）は褐色、灰色系シルトである。植物遺体が多く含まれていることから滞水環境にあったと考えられる。中層内からは瀬戸大窯２～４段階の陶器や内湾形口縁の内耳鍋等が出土し

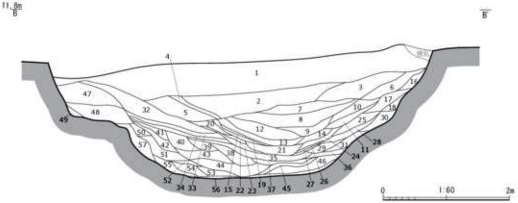
Fig. 12　27 次調査区全体図

Fig. 13　27次調査区全体図（本報告書掲載）



1	2.5Y5/4	黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキを含む
2	2.5Y4/2	暗灰黄色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・鉄分・炭化物を含む
3	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・炭化物を多く含む
4	2.5Y4/1	黄灰色	細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ2cm以下のレキ・炭化物を含む　土器に鉄分注着顕著
5	2.5Y6/3	にぶい黄色	中砂	粘性なし	しまりあり	φ2cm以下のレキ・炭化物を含む
6	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキ・炭化物を含む
7	10BG4/1	暗灰色	シルト			
8	2.5Y4/3	オリーブ褐色	中砂の混濁層	粘性あり	しまりあり	炭化物・土器片を含む
9	2.5Y2/1	黒褐色	微砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・土器片を含む
10	10BG3/1	黒褐色	粘性シルト	粘性強	しまり強	φ5cm以下のレキ・炭化物・植物遺体・土器片を含む
11	5Y3/1	オリーブ黒色	粘性シルト	粘性強	しまり強	植物遺体・リンを含む
11	2.5Y4/1	黄灰色	粘性シルト	粘性強	しまり強	巣穴のレキを含む
12	2.5Y3/2	黒褐色	粘性シルト	粘性強	しまり強	φ5cm以下のレキ・植物遺体を少量含む
13	2.5Y2/1	黒褐色	粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体・リンを少量含む
14	5Y2/2	オリーブ黒色	シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体・貝殻・リン・土器片を多く含む
15	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体を多く含む　リンを含む
16	5Y2/1	黒色	シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体を含む
17	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	粘性あり	しまりあり	鉄分を含む
18	10BG4/1	暗灰色	粘性シルト	粘性強	しまりあり	鉄分注着顕著
19	10YR6/2	灰黄褐色	中砂	粘性弱	しまり弱	
20	10YR5/1	褐灰色	中砂	粘性なし	しまり弱	
21	2.5Y5/1	黄灰色	シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・礫砂を少量含む
22	10YR6/4	にぶい黄褐色	シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・鉄分を多く含む
23	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキを含む
24	N3/0	暗灰色	粘性シルト	粘性強	しまりあり	φ3cm以下のレキ・植物遺体・リンを含む
25	10YR5/3	にぶい黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・鉄分を多く含む
26	10YR4/3	にぶい黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・鉄分を多く含む
27	10YR5/4	にぶい黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・鉄分を含む
28	2.5Y5/3	黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・鉄分を含む
29	10YR5/2	灰黄褐色	中砂混シルト	粘性弱	しまりあり	φ3cm以下のレキ・鉄分を含む
30	5Y5/1	灰色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキを含む
31	2.5Y5/2	暗灰黄色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキを含む
32	2.5Y5/1	黄灰色	粘性シルト	粘性強	しまりあり	φ3cm以下のレキを多く含む　リンを含む
33	2.5Y5/1	黄灰色	粘性シルト	粘性強	しまり強	φ3cm以下のレキ・植物遺体を含む
34	5Y5/1	灰色	粘性シルト	粘性強	しまり強	
35	5Y5/2	灰オリーブ色	シルト	粘性強	しまり強	植物遺体を少量含む
36	10YR5/3	にぶい黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
37	5Y5/2	灰オリーブ色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ2cm以下のレキを多く含む
38	5Y4/1	灰色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
39	5Y5/1	灰色	粘性シルト			
	5Y5/2	灰オリーブ色	中砂混シルトの混濁層	粘性あり	しまりあり	
40	10YR5/4	にぶい黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまり強	φ2cm以下のレキ・地山ブロックを多く含む
41	10YR5/3	にぶい黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまり強	φ2cm以下のレキ・地山ブロックを多く含む
42	10YR6/1	褐灰色	粘性シルト	粘性強	しまり強	φ2cm以下のレキを僅かに含む　鉄分を含む
43	10YR4/3	にぶい黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまり強	φ3cm以下のレキ・鉄分を多く含む
44	10YR6/4	明黄褐色	シルト	粘性あり	しまり強	φ1cm以下のレキを僅かに含む
45	10YR4/3	にぶい黄褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまり強	φ1cm以下のレキ・炭化物を少量含む

Fig.14　SD01遺構図（1）



1	10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	拳大のレキを多く含む
2	2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	拳大のレキ・地山ブロックを多く含む
3	10YR4/2 灰黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	拳大のレキを多く含む
4	10YR3/1 黒褐色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	
5	10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂混シルト	粘性弱	しまり弱	拳大のレキを多く含む
6	10YR5/2 灰黄褐色 粘性シルト	粘性強	しまり強	φ5cm以下のレキを含む
7	10YR4/1 褐灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキ・地山ブロックを含む
8	10YR4/1 褐灰色 微砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・炭化物を含む
9	2.5Y4/1 黄灰色 微砂混シルト	粘性あり	しまりあり	2.5Y7/4浅黄色シルトブロックを含む
10	2.5Y4/1 黄灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキ・漆器を含む
11	2.5Y4/2 暗灰黄色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	
12	2.5Y3/1 黒褐色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体を多く含む
13	2.5Y4/1 黄灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体を多く含む
14	10Y3/1 オリーブ黒色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体・リンを含む
15	7.5Y4/1 灰色 微砂混シルト	粘性あり	しまり弱	植物遺体を含む
16	10YR6/6 明黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	地山由来
17	2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキを含む
18	10YR7/4 にぶい黄橙色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物を含む
19	5Y3/1 オリーブ黒色 シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物を含む
20	5Y4/1 灰色 粗砂混シルト	粘性弱	しまりあり	
21	5Y4/2 灰オリーブ色 シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体　漆器を含む
22	5Y4/1 灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体を含む
23	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体を含む
24	10YR4/2 灰黄褐色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	リンを含む
25	10YR4/1 褐灰色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
26	7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体・リンを含む
27	10Y3/1 オリーブ黒色 シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体・リンを含む
28	2.5Y5/3 黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む
29	2.5Y4/1 黄灰色 シルトと 2.5Y5/3 黄褐色 中砂混シルトの混濁層	粘性あり	しまりあり	φ2cm以下のレキを含む
30	2.5Y5/3 黄褐色 粘性シルトと 2.5Y6/4 にぶい黄色 細砂の混濁層	粘性あり	しまりあり	
31	10YR6/1 褐灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	10YR6/2オリーブ灰色微砂を僅かに含む
32	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキ・地山ブロックを多く含む　鉄分を含む
33	5Y6/2 灰オリーブ色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキを含む
34	5Y3/1 オリーブ黒色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体・リンを含む
35	5Y4/2 灰オリーブ色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体・リンを含む
36	7.5Y4/1 灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	地山ブロックを含む
37	10Y4/1 灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体・リンを含む
38	7.5Y5/1 灰色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ2cm以下のレキを含む
39	7.5Y5/2 灰オリーブ色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ2cm以下のレキを含む
40	7.5Y4/2 灰オリーブ色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	鉄分を多く含む
41	2.5Y6/3 にぶい黄色 中砂	粘性弱	しまりあり	φ5cm以下のレキ・鉄分を含む
42	5Y5/3 灰オリーブ色 シルト	粘性あり	しまり強	φ5cm以下のレキ・鉄分を多く含む
43	10Y5/1 灰色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキを多く含む　炭化物を僅かに含む
44	5GY5/1 オリーブ灰色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキを多く含む　炭化物を僅かに含む
45	10Y4/1 灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体を少量含む
46	10Y6/1 灰色 シルトと 7.5Y6/2 灰オリーブ色 細砂混シルトの混濁層	粘性強	しまりあり	炭化物を含む
47	10YR5/3 にぶい黄褐色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	拳大のレキ・鉄分を含む
48	10YR5/2 灰黄褐色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	拳大のレキ・鉄分を含む
49	2.5Y5/3 黄褐色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキを少量含む
50	5Y4/2 灰オリーブ色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキを少量含む
51	7.5Y5/3 灰オリーブ色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ2cm以下のレキを含む
52	7.5Y5/2 灰オリーブ色 粗砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ2cm以下のレキを多く含む
53	5Y5/3 灰オリーブ色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキを含む
54	7.5Y4/1 灰色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ2cm以下のレキを多く含む
55	10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキ・鉄分を含む
56	7.5Y5/1 灰色 粘土	粘性強	しまりあり	
57	10YR5/1 褐灰色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキ・鉄分を含む

Fig.15　SD01 遺構図（２）

た。Ⅲ層（下層）は灰色系シルトであり、小型の礫や鉄分が多く含まれる。下層内から出土した遺物は多くないが、瀬戸大窯２段階の陶器が出土した。SD01 の形成時期は、出土遺物から瀬戸大窯２段階であると考えられる。埋土の下層と中層には植物遺体や鉄分が含まれることから水堀であったとみられる。上層から出土した遺物から廃絶時期は、近世末～近代とみられ、土層堆積状況から人為的に埋め立てられたと考えられる。

SD01 出土遺物（Fig.16 ～ 19）　出土遺物は土師器、須恵器、陶器、瓦質土器、磁器、瓦、木製品、漆器、獣骨が出土している。図示できたものでは、土師器 19 点、須恵器１点、瓦質土器１点、陶

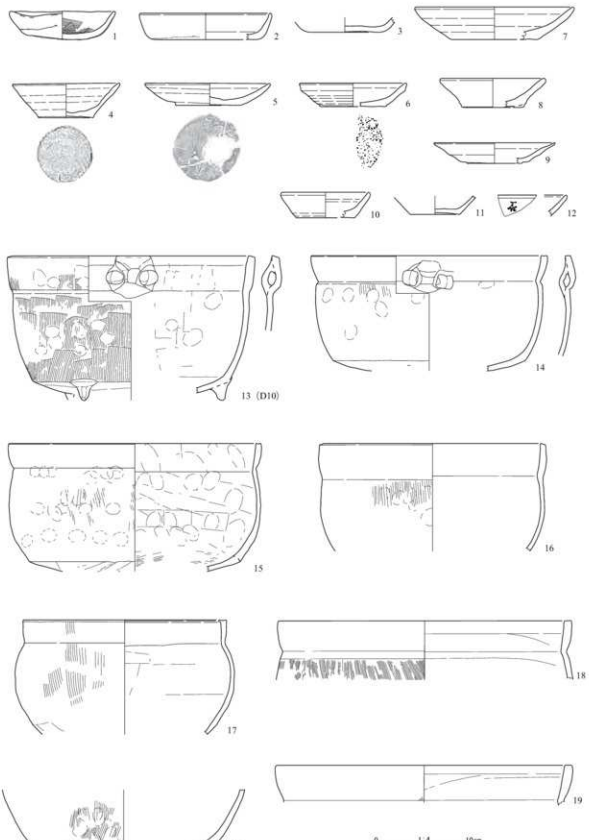


Fig.16　SD01出土遺物実測図（1）

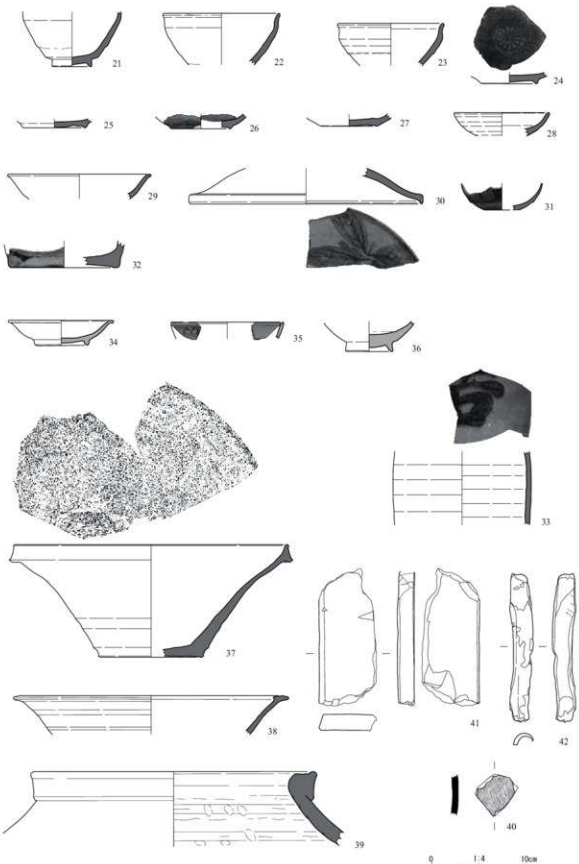


Fig. 17　SD01 出土遺物実測図（2）

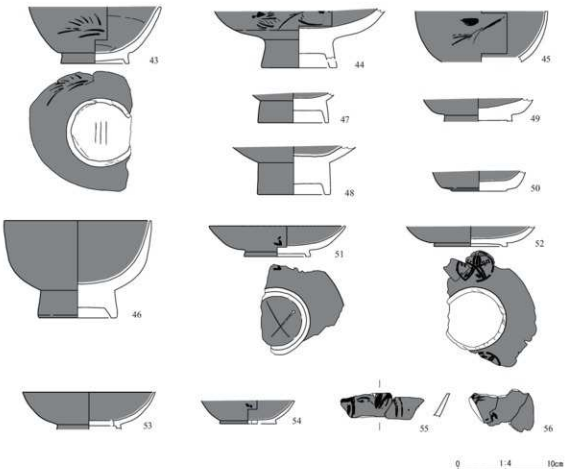


Fig.18　SD01 出土遺物実測図（3）

器 16 点、磁器 3 点、瓦 1 点、獣骨 1 点、木製品 8 点、漆器 14 点である。1 ～ 12 は土師器の皿で 1 ～ 3 は手捏ね成形で、内面底部から口縁部にかけて横ナデ調整、外面は指オサエ痕がある。4 ～ 12 は轆轤成形で 4 ～ 11 は外底部が残存しており、糸切痕が確認できる。12 は外面に墨書があり「長」と読める。13 ～ 19 は口縁部が「く」の字に外反しない内湾形口縁の内耳鍋で、耳が残存しているものは 13・14 だけである。耳は口縁部内面に付き、内面体部から外面口縁部まで横ナデ調整。外面体部は刷毛調整が施され、煤が付着している。また 13 は土師器ではなく瓦質土器で外底部に脚が残存している。20 は 13 ～ 19 の同形の底部だと考えられる。

21 ～ 23 は瀬戸産の碗で、いずれも鉄釉が施されている。21 は釉薬黒色で古瀬戸中期様式Ⅲ期、22 は釉薬赤褐色で瀬戸大窯 2 段階、23 は釉薬赤褐色で瀬戸大窯 4 段階とそれぞれ考えられる。24 ～ 29 は施釉の皿で 27 は志戸呂産と考えられ鉄釉が施されている。底部の一部が残存しており、見込み・外底部は重焼き用に無施釉である。24 ～ 26・28・29 は瀬戸産でそれぞれに灰釉が施されている。24 は底部が残存しており、見込みに菊花の刻印が施されている。全面施釉で外底にはトチン痕がある。瀬戸大窯 4 段階と考えられる。25 は底部の一部が残存しており、外底部以外に施釉がされている瀬戸大窯 3 段階と考えられる。26 は底部の一部が残存しており、内面の立上りに縦に削ぎが施されている。外底部以外は施釉がされている。瀬戸大窯 2 段階と考えられる。28・29 は口縁部の一部が残存し、内・外面ともに施釉がされている。28 は瀬戸大窯 3 段階、29 は瀬戸大窯 1 ～ 2 段階と考えられる。30 は蓋で内・外面に長石釉がされており、内面には葉が描かれている。

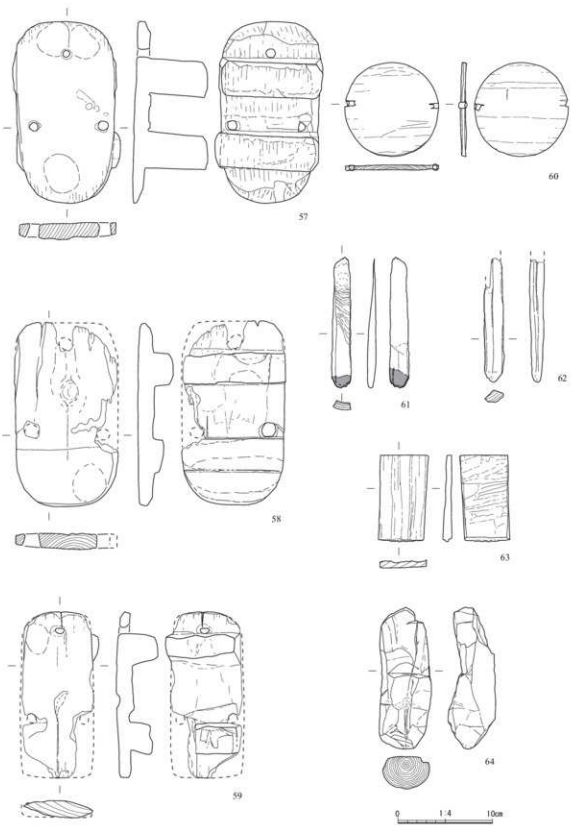


Fig.19　SD01出土遺物実測図（4）

産地は不明。31は茶入と考えられ、瀬戸産で、底部が残存している。内面は無施釉で、外面に褐色の釉薬に黒色の釉薬をかけ流している。外底部は無施釉であり、瀬戸大窯3～4段階と考えられる。32は瀬戸美濃産で壺と考えられる底部の一部が残存している。内・外面を長石釉で施釉し、外面は鉄釉で何か描かれている。17世紀～18世紀頃と考えられる。33は通い徳利と考えられる外面に屋号または酒名が描かれていると思われる。17世紀～18世紀頃と考えられる。34～36は磁器で舶来品と考えられる。34は白磁の皿で外底部以外は施釉がされている。35は染付の碗で口縁部の一部が残存する。36は龍泉窯系青磁の碗で底部が残存する。見込み・外底部に釉剥ぎがみられる。37～39は焼締陶器で、37は瀬戸大窯2段階の瀬戸産の擂鉢である。内・外面に鉄釉で施釉がされており擂目は20条、外底部には糸切痕が残る。38は志戸呂産の擂鉢で無施釉、擂目は6条で口縁部は外反する。39は常滑産の甕で、口縁部の一部が残存しており、二重口縁になっている。40は須恵器の甕片で外面にタタキがある。41は平瓦片で面の一部に摩擦痕があり、何か転用で使用された可能性がある。42は獣骨である。

43～50は漆器の碗で、43～45は内面が赤黒漆、外面が黒漆、模様が朱漆で、43の外底部には「川」のような傷がある。45は底部が欠損しているため高台形はわからないが、43は高台が低く、44は高台が高い。46は内面が赤黒漆、外面が黒漆、模様はなく外面は漆の剥離が著しく、高台は高い。47～50は底部のみが残存し、47～49は高台が高い。47・50は内面赤漆、外面黒漆。48・49は内・外面黒漆である。51～54は漆器の皿で、51・52・54は内面赤漆、外面黒漆、模様朱漆で、51は外底部には「メ」のような傷がある。51・54の模様はわずかにしか残っておらず形は不明、両方とも見込み付近の漆は剥離している。53は内面赤漆、外面黒漆で模様はない。55・56は破片で器形は不明、内面赤漆、外面黒漆、模様朱漆である。57～59は二枚歯の下駄で、57・58は59より1.5倍ほど幅が広い。60は柄杓の底板と考えられる曲げ物の底板である。外周に穿孔が2箇所あり、穿孔は対角位置にある。また穿孔の中には桜皮と考えられる物が挟まっている。61・62は棒状で、先端部が炭化している。付木の可能性がある。63は約9㎝×約5㎝角の板状の木製品で片面を槍鉋で成形している。64は錘状の木製品で用途不明である。

SD02（Fig.20～22）　A1・A2・B1・B2・C1・C2・D1グリッドに位置する南北方向に延びる堀である。南端は調査区外へと延びているため本来の規模は不明であるが、調査区内において長軸41.35m、短軸5.24m、深さ1.97mを確認した。軸は、N-13°-Eである。断面形状は逆台形を呈し、南にいくほど遺構西側は調査区西壁外に向かい、また攪乱の影響を受けている。掘方の傾斜は、東側で約40°～60°で開削されている。埋土はⅠ・Ⅱの2層に大別できる。Ⅰ層は黄褐色、灰黄色系シルトである。基盤層（黄褐色粘土）と酷似したブロックを含み、廃絶時の埋め立て土と考えられるが、遺物は確認されなかった。Ⅱ層は黄灰色、黒灰色系シルトである。植物遺体が含まれた層が認められ、堀底の基盤層はグライ化した痕跡がみられることから滞水環境にあったと考えられる。出土遺物は、古瀬戸後期Ⅳ段階の瀬戸美濃産の陶器、常滑産の甕、く字形口縁の内耳鍋等が出土した。なお、調査時はⅡ層を上・中・下層に分けて遺物を取り上げたが、時期差はみられなかった。SD02の形成時期は、出土遺物から古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。Ⅱ層内には、植物遺体を含む層や基盤層にグライ化した痕跡が確認されたことから水堀であったと考えられる。廃絶時期は、埋め立て土にあたるⅠ層内から遺物が出土しなかったことから明確な時期は不明と言わざるを得ない。しかし、Ⅰ層は土層堆積状況から短期間で埋め戻されたとみられ、加えてⅡ層内に含まれる遺物がおおむね古瀬戸後期様式Ⅳ期に限られることから、比較的短期間のうちに廃絶したとみられる。

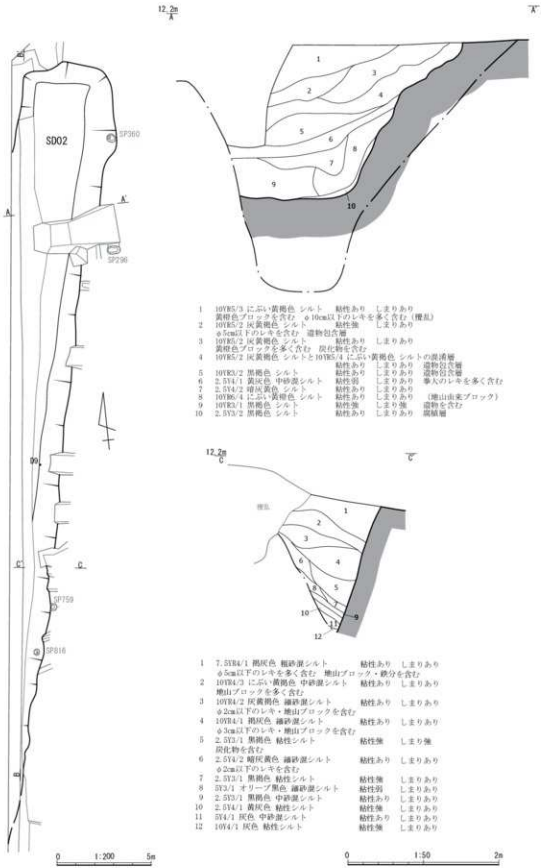


Fig. 20　SD02 遺構図（1）

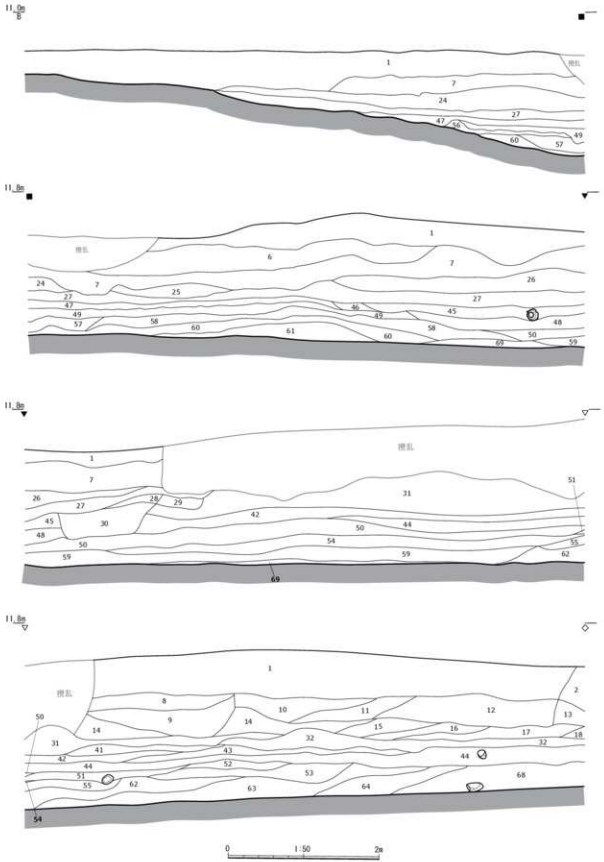
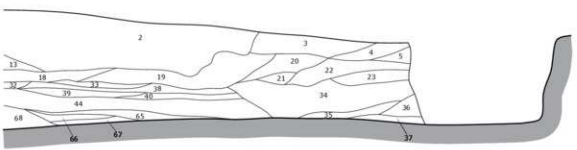


Fig.21　SD02遺構図（2）



1	7.5YR4/1 褐灰色 粗砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキを多く含む　地山ブロック・鉄分を含む
2	10YR4/1 褐灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	鉄大のレキを多く含む
3	2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物・地山ブロックを含む
4	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物・地土ブロック・地山ブロックを含む
5	7.5YR4/3 褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物・地山ブロックを含む
6	10YR4/3 にぶい黄褐色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを多く含む
7	10YR4/1 褐灰色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・地山ブロックを含む
8	10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキ・鉄分を含む
9	10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・鉄分を含む
10	10YR6/3 にぶい黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキを含む
11	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物・地山ブロックを多く含む
12	10YR4/4 褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキを多く含む
13	10YR3/3 暗褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを多く含む
14	10YR6/4 にぶい黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	10YR4/1褐灰色シルトブロックを含む
15	10YR6/6 明黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	10YR3/2黒褐色シルトブロックを含む
16	10YR6/6 明黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	10YR3/2黒褐色シルトブロックを多く含む
17	10YR4/2 灰黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む
18	5Y4/1 灰色 シルトと 2.5Y5/4 黄褐色 粘性シルトの混合層	粘性あり	しまりあり	
19	5Y6/3 オリーブ黄色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	鉄大のレキ・鉄分を多く含む
20	10YR4/2 灰黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物・地山ブロックを含む
21	10YR5/1 褐灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物・鉄分を含む
22	10YR5/2 灰黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	φ5cm以下のレキ・地山ブロックを多く含む
23	2.5Y5/1 黄灰色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・鉄分を含む
24	5Y3/1 オリーブ黒色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む
25	2.5Y4/1 黄灰色 シルト	粘性あり	しまり弱	地山ブロックを含む
26	10YR4/1 褐灰色 シルトと 5GY6/1 緑灰色 微砂混シルトの混濁層	粘性強	しまり強	φ2cm以下のレキを含む
27	2.5Y3/1 黒褐色 粘性シルト	粘性強	しまり強	炭化物を含む
28	10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
29	10YR2/2 黒褐色 中砂混シルト	粘性強	しまりあり	
30	10YR4/1 褐灰色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	2.5YR/3に近い黄色シルトブロック・遺器を含む
31	5Y4/1 灰色 細砂混シルト	粘性弱	しまり弱	
32	2.5Y4/1 黄灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	7.5YR/1灰色シルトブロックを含む
33	5Y4/1 灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	
34	2.5Y4/1 黄灰色 粘性シルト	粘性あり	しまりあり	鉄大のレキ・鉄分を含む
35	5Y5/2 灰オリーブ色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	
36	5Y6/2 灰オリーブ色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体を含む
37	5Y4/1 灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体を含む
38	5Y4/1 灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体を含む
39	2.5Y4/1 黄灰色 粘性シルト	粘性あり	しまりあり	植物遺体を含む
40	10YR4/1 褐灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体を含む
41	2.5Y4/1 黄灰色 粘性シルト	粘性強	しまり強	
42	2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
43	2.5Y4/1 黄灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキ・炭化物を含む
44	2.5Y3/1 黒褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	リンを含む
45	10YR3/1 黒褐色 粘性シルト	粘性強	しまり強	炭化物・土器片を含む
46	2.5Y4/1 黄灰色 シルト	粘性弱	しまりあり	
47	2.5Y3/1 黒褐色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	
48	10YR4/1 褐灰色 粘性シルト	粘性強	しまり強	粗砂を斑状に含む
49	2.5Y3/1 黒褐色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
50	10YR4/1 褐灰色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
51	10YR4/2 灰黄褐色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	鉄大のレキを含む
52	5Y4/1 灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	
53	5Y5/2 灰オリーブ色 シルト	粘性弱	しまりあり	φ3cm以下のレキを含む
54	2.5Y4/1 黄灰色 微砂混シルト	粘性あり	しまりあり	リンを僅かに含む
55	2.5Y4/1 黄灰色 中砂混シルト	粘性弱	しまりあり	
56	2.5Y4/1 黄灰色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
57	7.5Y4/1 灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	鉄大のレキを含む
58	2.5Y4/1 黄灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	
59	5Y4/1 灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	
60	5Y4/1 灰色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
61	10Y4/1 灰色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	
62	2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
63	7.5YR3/1 黒褐色 粘砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
64	10YR3/2 黒褐色 シルトと 5Y7/3 浅黄色 シルトの混濁層	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキを僅かに含む
65	10YR4/2 灰黄褐色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	植物遺体を含む
66	2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	炭化物を含む
67	5Y4/1 灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物を含む
68	10YR3/1 黒褐色 粘性シルト	粘性強	しまりあり	鉄大のレキを含む
69	5B6/1 青灰色 粘砂混シルト	粘性あり	しまり強	地山

Fig. 22　SD02 遺構図（３）

SD02 出土遺物（Fig. 23 ～ 27）　出土遺物は土師器、須恵器、陶器、瓦質土器、磁器、瓦、木製品、漆器、獣骨、銭、土製品が出土している。図示できたものでは土師器 35 点、須恵器 1 点、瓦質土器 4 点、陶器 24 点、磁器 5 点、瓦 2 点、土製品 1 点、銭 1 点、木製品 4 点、漆器 4 点である。65 ～ 78 は土師器の皿で 65 ～ 69 は手捏ね成形で、内面底部から口縁部にかけて横ナデ調整、外面は指オサエ痕がある。70 ～ 78 は轆轤成形で外底部が残存しているものは糸切痕が確認できる。79 ～ 90・92・93 は内耳鍋で口縁部は「く」の字に外反する。く字形口縁で耳が残存しているものは 79 ～ 84 である。耳は口縁部内面に付き、内面体部から外面口縁部まで横ナデ調整。外面体部は刷毛調整が施され、煤が付着している。91 は鍋で耳を伴わないタイプで南伊勢型である。口縁部は外反するが体部から急に外反せず「S」字を描く曲線である。また内耳鍋と比べ薄い。94・95 は茶釜型鍋で 94 は外面に付いている耳が欠損している。外面体部中央には羽釜のような羽がある。95 は耳の一部が残存するのみである。96 ～ 98 は外面体部の羽のみが残存しているが、茶釜型鍋と考えられる。99 は耳・羽がないタイプで内・外面の口縁部は横ナデ調整、体部外面は指オサエ後、刷毛調整が行われている。外面全体に煤が付着している。100 ～ 103 は瓦質土器で、100 は茶釜型鍋である。外底部に脚があり外面に耳はあるが羽がない。外面の耳の下あたりから口縁部にかけてヘラ磨き調整、内面口縁部から耳の裏側付近は横ナデ調整、そこから下は指オサエ痕がある。内面底部・外底部は焦げていて、外面全体に煤が付着している。101 は口縁部が外反しない内湾形口縁の内耳鍋で、口縁部の一部が残存している。内・外面口縁部は横ナデ調整がされている。外面体部は煤が付着し、調整がよくわからないが一部に刷毛調整がみられる。102 は蓋である。破片であるため詳しいことは不明である。103 は火鉢で口縁部の一部が残存する。外面口縁部に 2 条の凸線の間に梅花刻印が帯状に施されている。

104・105 は瀬戸産の碗で、104 は灰釉が内面から外面口縁部にかけて施されており、ほぼ完形。105 は口縁部から体部の一部が残存し、鉄釉が施されている。104・105 ともに古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。106 は瀬戸産の仏飯器で受皿部と碗底部が残存する。鉄釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。107 ～ 110 は古瀬戸後期様式Ⅳ期の瀬戸産の皿で 110 以外は灰釉が施されている。107 は削り高台で内面体部から外面口縁部まで施釉されている。発色が悪く釉色は白。108 は内面から外面口縁部に施釉、発色は良く灰釉特有の釉色をしている。109 も発色が悪く釉色は白で、内・外口縁部に施釉。高台はなく外底部に糸切痕が残る。110 は底部の一部が残存しておりこの部分は無施釉、外底部に糸切痕がある。体部無施釉、外底部に糸切痕がある特徴から 109 の同形と考えられる。111 ～ 113 は施釉の壺甕で 111・113 は瀬戸産で底部の一部が残存し灰釉が施され、古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。112 が口縁部の一部が残存し鉄釉が施され、志戸呂産と考えられる。114 ～ 118 は磁器である。114・115 は国産の染付で、19 世紀後半以降と新しく、遺構の表層から出土していることから混入品であると考えられる。116 ～ 118 は舶来品の龍泉窯系の青磁である。116 は鉢で口縁部から体部の一部が残存し、外面には連弁文が施されている。117 は碗で口縁部から体部の一部が残存し、外面には雷文帯が施される。118 は鉢で底部の一部が残存している。119 ～ 132 は焼締陶器である。119・120・123・124 は擂鉢で、119 は口縁部の一部が残存し、志戸呂産である。120・123・124 は瀬戸産で 120 は鉄釉が施され、口縁部の一部が残存するが擂目のある部分ではない。123・124 は無施釉で 123 は擂目が 8 条、124 は擂目が 7 条で底部の一部が残存する。瀬戸産の擂鉢はいずれも、古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。121・122 は鉢で、121 は常滑産で底部の一部が残存する。122 は志戸呂産で口縁部の一部が残存し、口縁部がやや外反する。125 ～ 129 は常滑産の甕でいずれも口縁部の一部が残存し、二重口縁になっている。130 は常滑産

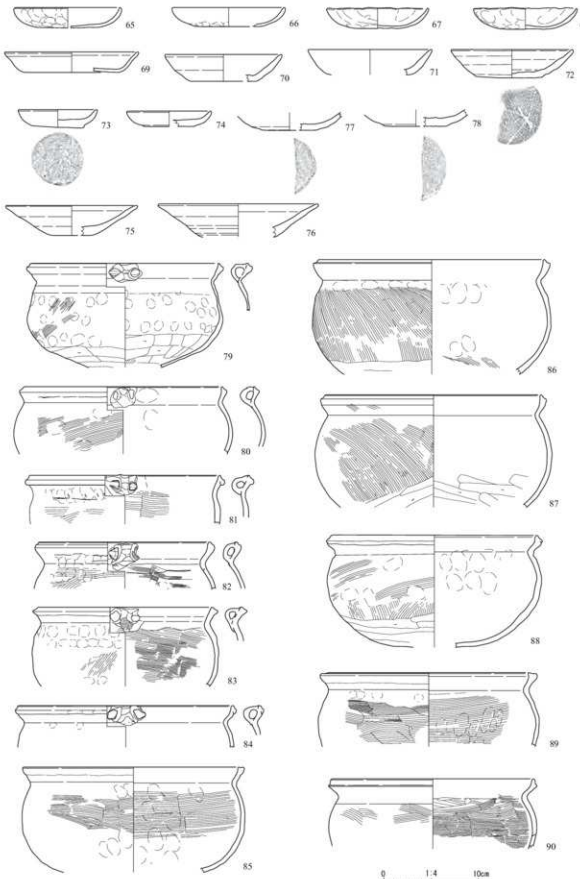


Fig. 23　SD02 出土遺物実測図（1）

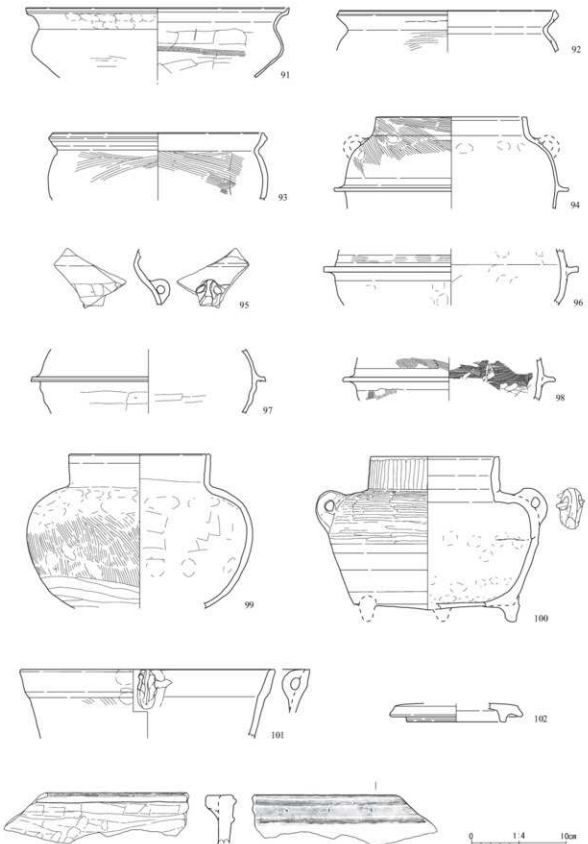


Fig. 24　SD02 出土遺物実測図（2）

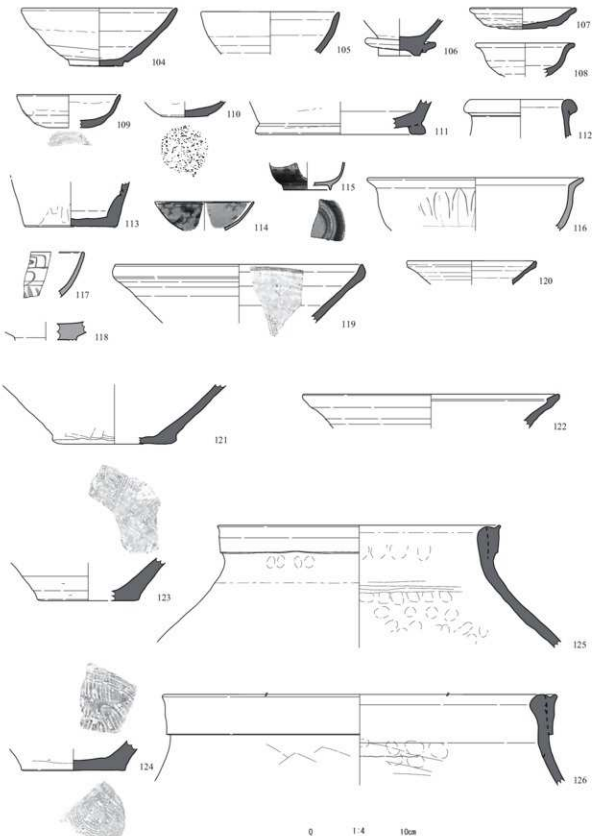


Fig. 25　SD02 出土遺物実測図（3）

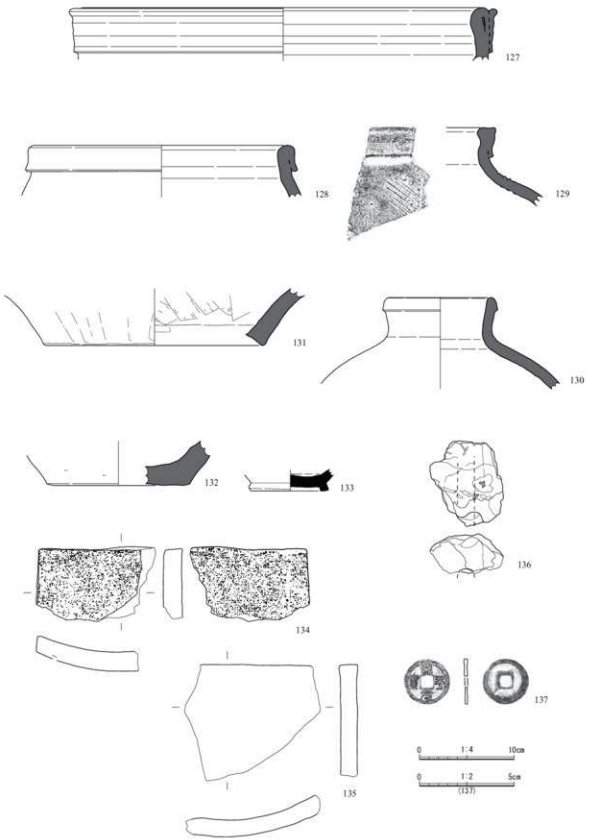


Fig. 26　SD02 出土遺物実測図（4）

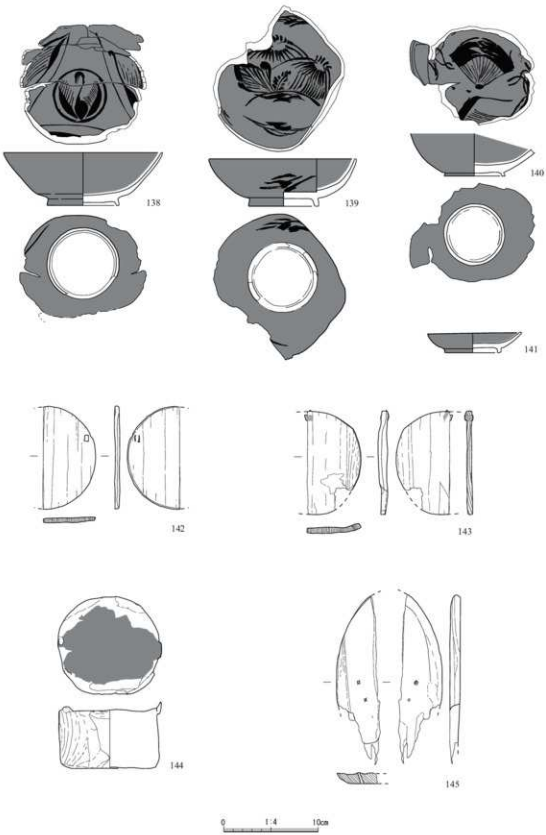


Fig. 27　SD02出土遺物実測図（5）

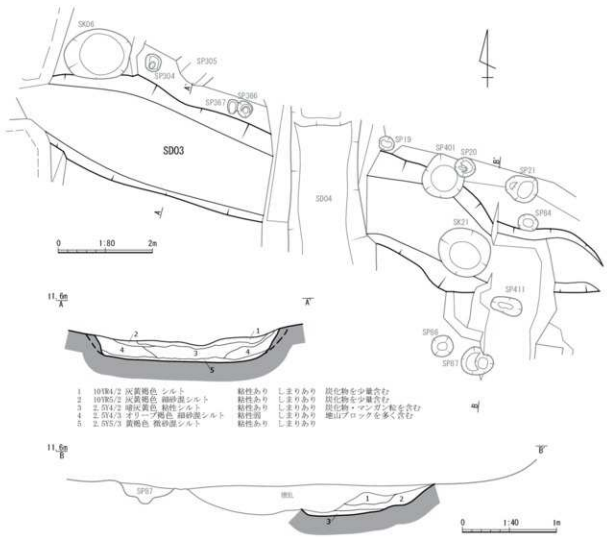


Fig. 28　SD03 遺構図

の壺で口縁部から肩部の一部が残存する。131・132 は常滑産の壺甕の底部で、一部が残存している。先に記載した鉢の 121 と 131 は赤物と呼ばれる胎土が赤い常滑である。133 は須恵器の壺の底部で、付高台である。134・135 は平瓦片である。136 は輪の羽口片で先端が焦げている。137 は渡来銭で「平治元宝」である。138 ～ 141 は漆器の碗でいずれも内・外面が黒漆、模様が朱漆。模様は内面底部にあり、138 は「鶴」、139 は「草花」、140 は「扇」がそれぞれ描かれている。139 は外面にも「草花」が描かれている。それぞれに高台は低い。141 は漆器の皿で内面が赤漆、外面が黒漆で模様はない。142・143 は柄杓の底板と考えられる曲げ物の底板である。142・143 それぞれ半分ほど残存しており、穿孔が 1 つあり穿孔の中に桜皮が挟まっている。144 は径 10 cm、高さ 7 cm程度の大きさで台状になっており、上部がやや凹む。その凹みに漆が塗られている。145 は用途不明木製品で、約 18 cm×約 5 cm、厚さ 0.5 cmで釘の抜けたような痕が 2 箇所ある。

SD03（Fig. 28）　B2・B3・B4 グリッドに位置する東西方向に延びる溝である。両端は攪乱の影響を受けていたため本来の規模は不明であるが、長軸 12.44 m、短軸 2.28 m、深さ 0.36 mを確認した。軸は、N-73°　-W である。重複関係は SD04、SK06 および SK21 に切られており、詳細は後述するが、

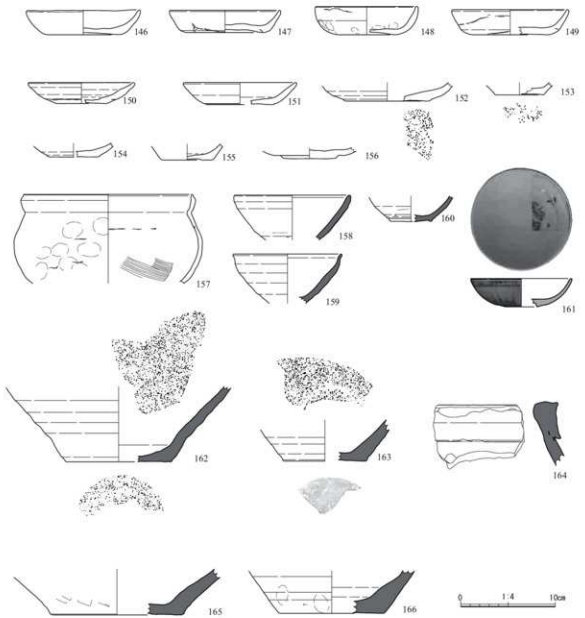


Fig. 29　SD03 出土遺物実測図

SD04・SK21 は 15 世紀後半～ 16 世紀前半、SK06 は 19 世紀以降の遺構と考えられる。埋土は黄褐色系シルトである。SD03 は出土遺物から古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。

SD03 出土遺物（Fig. 29）　遺物は土師器、陶器、磁器が出土している。図示できたものでは土師器 12 点、陶器 8 点、磁器 1 点である。146 ～ 156 は土師器の皿で 146 ～ 149 は手捏ね成形、内面底部から口縁部にかけて横ナデ調整、外面は指オサエ痕がある。150 ～ 156 は轆轤成形で外底部が残存しており、糸切痕が確認できる。157 は内耳鍋で口縁部は「く」の字に外反するく字形口縁で耳は残存していない。内面体部から外面口縁部まで横ナデ調整。外面体部は指オサエ痕があり、煤が付着している。158 ～ 160 は瀬戸産の碗で内・外面は鉄釉が施され、外底部は露胎している。158・160 は古瀬戸後期様式Ⅳ期、159 は瀬戸大窯 3 段階と考えられる。161 は舶来品の染付皿で見込みと内面口縁部、外面に染付が施されている。162・163 は瀬戸産の擂鉢でいずれも鉄釉が施され、体部から底部の一部が残存している。162 は擂目 16 条で外底部に糸切痕が確認できる。163 は

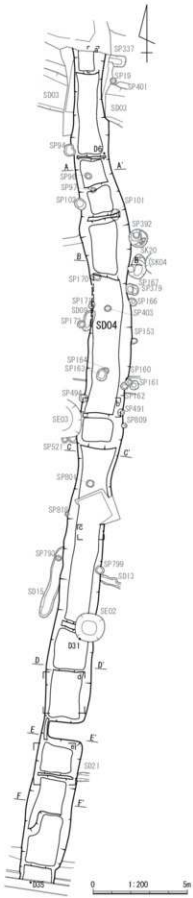
擂目14条で外底部に糸切痕が確認できる。162・163はいずれも古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。164～166は常滑産で164は甕の口縁部の一部で二重口縁になってる。165・166は常滑産の甕か鉢の底部と考えられる。166は胎土が赤い、いわゆる赤物である。

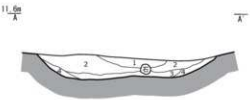
SD04（Fig.30～32）　B3・C3・D3・E3・F3グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。北側は攪乱の影響を受けており、南側は調査区外へと延びているが、39次調査において検出したSD03と同一遺構と考えられる。本調査区にて確認した規模は長軸44.18m、短軸2.54m、深さ0.27～0.52mである。軸は2軸あり、C3グリッド南側に位置するSH01のSP163あたりでやや西側に曲がる。北軸N-4°-W、南軸N-8°-Eである。溝の断面形状は緩やかな肩を持ち、内部には部分的に高まりが残る障子堀を呈する。埋土は黄灰色、黒灰色系シルトである。出土遺物には8世紀代と考えられる須恵器が一定量含まれるが、主体となる遺物の特徴から古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯1段階の遺構と考えられる。

SD04出土遺物（Fig.33～40）　遺物は土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、石製品、銭貨、金属製品、漆器、木製品が出土している。図示できたものでは土師器105点、須恵器9点、陶器44点、磁器6点、瓦3点、石製品1点、銭貨2点、金属製品2点、漆器1点、木製品6点である。

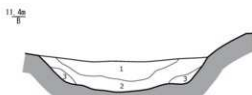
167～223は土師器の皿で167～183は手捏ね成形で内面底部から口縁部にかけて横ナデ調整、外面は指オサエ痕がある。184～223は輪轤成形で191・196・204・205以外は、外底部が残存しており糸切痕が確認できる。224～258は口縁部が「く」の字に外反するく字形口縁の内耳鍋で、耳が残存しているものは224～247である。耳は口縁部内面に付き、内面体部から外面口縁部まで横ナデ調整。外面体部は刷毛調整が施され、煤が付着している。259～271は茶釜型鍋で、259・260は外耳と羽部が付くタイプで、口縁部から体部の一部が残存している。261は外耳と羽を含む体部の一部が残存している。262は外耳が欠損しているが、痕跡が残っており羽を含む体部の一部が残存している。263は外耳と体部の一部が残存してる。264は外耳のみ残存している。265は外耳がなく羽があるタイプで口縁部から羽を含む体部の一部が残存している。266・267は口縁部の一部が残存していて外耳なく羽があるタイプだと考えられる。268～270は羽と体部の一部が残存している。271は耳がツマミように上向きに付き、穿孔がないタイプで羽も無い。このタイプはSD04で出土している内耳鍋、茶釜型鍋と比べて時代が新しく、17世紀代の遺物であり混入品と考えられる。272は土師器の蓋と考えられる。

273～280は陶器の碗で273～279は瀬戸産、280は瀬戸美濃産である。273・275・276は内面体部から外面口縁部に灰釉が施され、外面体部から露胎している。口縁部から体部の一部が残存している。274は口縁部から体部の一部が残存しており、内・外面に灰釉が施されている。279は底部で内面は灰釉が施され、外底部は露胎している。277は底部が完形で口縁部から体部の一部が残存している。内面底部から外面体部に灰釉が施され、外底部は露胎している。278は口縁部から体部の一部が残存しており、内・外面に鉄釉が施されている。273・275・276・277・279は古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。274は古瀬戸中期様式Ⅳ期～後期様式Ⅰ期と考えられる。278は瀬戸大窯1段階と考えられる。280は19世紀末以降での遺物で、271と同様に混入品と考えられる。281～289は陶器の皿で281・282は志戸呂産で、283～289は瀬戸産である。281は口縁部から底部の一部が残存しており、内面底部から外面口縁部に鉄釉が施されている。外面体部から外底部は露胎している。282は底部の一部が残存し、内・外面に鉄釉が施されている。外底部は露胎している。283・284は底部完形で口縁部から体部の一部が残存している。内・外面口縁部に灰釉が施されており、他は露胎している。外底部には糸切痕が確認できる。285・286・287は口縁部から体部の一

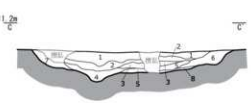




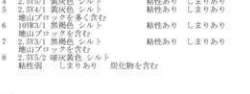
1　10YR4/4 褐色 中砂混シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを多く含む
2　7.5YR4/3 褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物を含む
3　10YR3/3 暗褐色 粘砂混シルト　粘性あり　しまりあり
4　2.5Y4/4 オリーブ褐色 中砂混シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む



1　10YR4/2 灰黄褐色 粘砂混シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物を含む
2　7.5YR3/1 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
3　10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂混シルト　粘性あり　しまりあり



1　10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
地山ブロックを多く含む
2　10YR5/2 灰黄褐色 粘砂混シルト　粘性あり　しまりあり
炭化物を含む
3　10YR5/1 褐灰色 シルト　粘性あり　しまりあり
4　2.5Y5/1 黄灰色 シルト　粘性あり　しまりあり
5　2.5Y4/1 黄灰色 シルト　粘性あり　しまりあり
地山ブロックを多く含む
6　10YR3/1 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
地山ブロックを含む
7　2.5Y3/1 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
地山ブロックを含む
8　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト
粘性弱　しまりあり　炭化物を含む



1　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
炭化物を含む
2　10YR3/2 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
炭化物を多く含む
3　7.5YR2/1 黒褐色 細砂混シルト　粘性あり　しまりあり
φ1cm以下のレキ・炭化物を含む
4　7.5YR4/1 褐灰色 細砂混シルト　粘性あり　しまりあり
地山ブロックを多く含む
5　10YR3/2 黒褐色 中砂混シルト　粘性あり　しまりあり
φ5cm以下のレキ・地山ブロックを多く含む
6　7.5YR3/1 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
φ3cm以下のレキを含む
7　7.5YR4/1 褐灰色 シルト　粘性強　しまりあり
鉄分沈着が顕著
8　7.5YR3/1 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
地山ブロックを含む
9　7.5YR2/1 黒色 シルトと
10YR6/4 にぶい黄橙色 シルトの互層　粘性あり　しまりあり
10　7.5YR2/1 黒色 中砂混シルトと
10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂混シルトの互層　粘性あり　しまりあり
植物遺体を含む

0　1:40　1m

Fig. 30　SD04 遺構図（1）

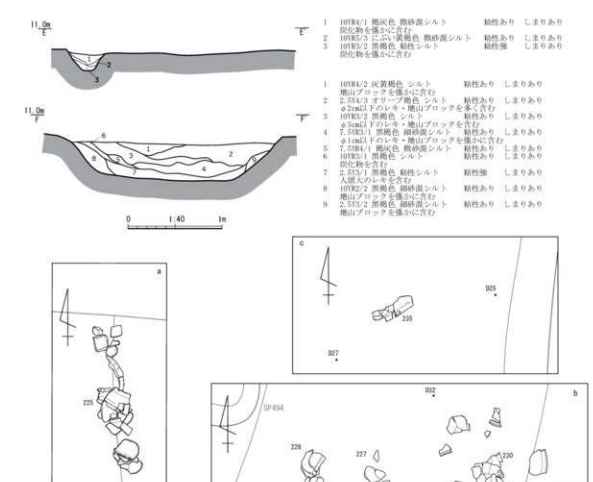


Fig.31　SD04 遺構図（2）

部が残存しており、内・外面の口縁部に灰釉が施されている。288・289 は底部で 288 は削り高台、289 は糸切痕が確認できる。口縁部のみ施釉されている皿の底部と考えられる。283・284 は古瀬戸後期様式Ⅲ期～古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。285 ～ 289 は古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。290 は志戸呂産で内側口縁部から外面に鉄釉が施されている長頸壺の口縁部から頸部である。291 は瀬戸産の燭台と考えられる。内・外面に鉄釉が施されている。瀬戸大窯 1 段階と考えられる。298・299 は山茶碗の底部である。高台は付高台。292・293・294 は染付の碗で 292・293 は舶来品である。294 は国産で 17 世紀以降の遺物と考えられ、混入品と考えられる。295・296・297 は龍泉窯系の青磁の碗である。295 は連弁文、296 は雷文帯、297 は底部で外底部は蛇の目釉剝ぎが施されており、外面の一部体部が残存するところには細連弁文（剣先文）が施されている。300 ～ 322 は焼締陶器で 300 ～ 309 は擂鉢である。300・301・303・304・305 は瀬戸産の擂鉢で、鉄釉が施されている。300・301 は口縁部の一部が残存しており、擂目がわかる部分は残存していない。300 は古瀬戸後期様式Ⅳ期、301 は古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯 1 段階と考えられる。303・304・305

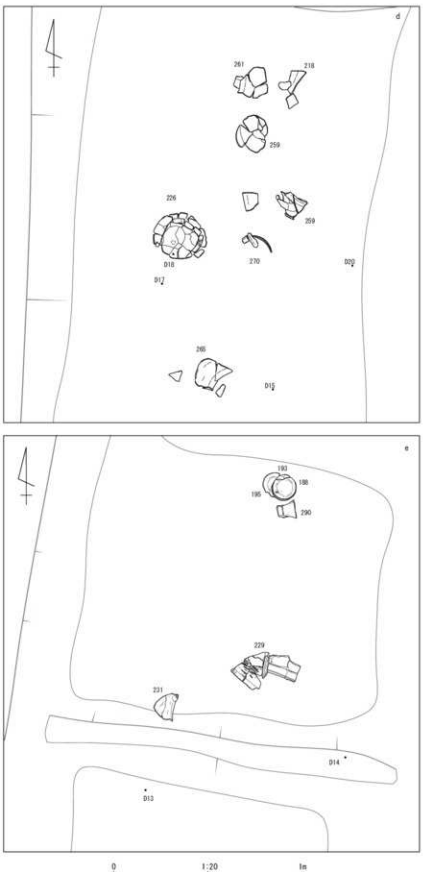


Fig. 32　SD04 遺構図（３）

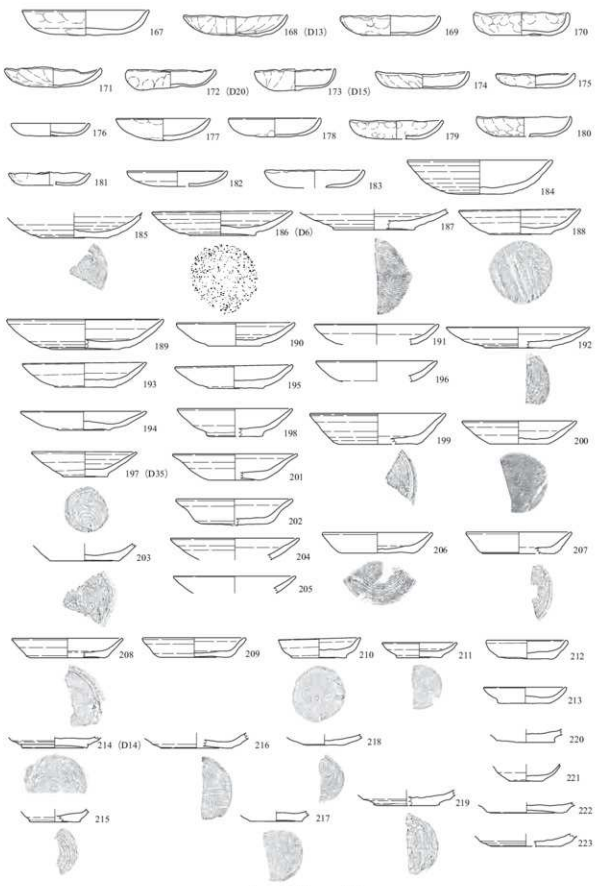


Fig.33　SD04 出土遺物実測図（1）

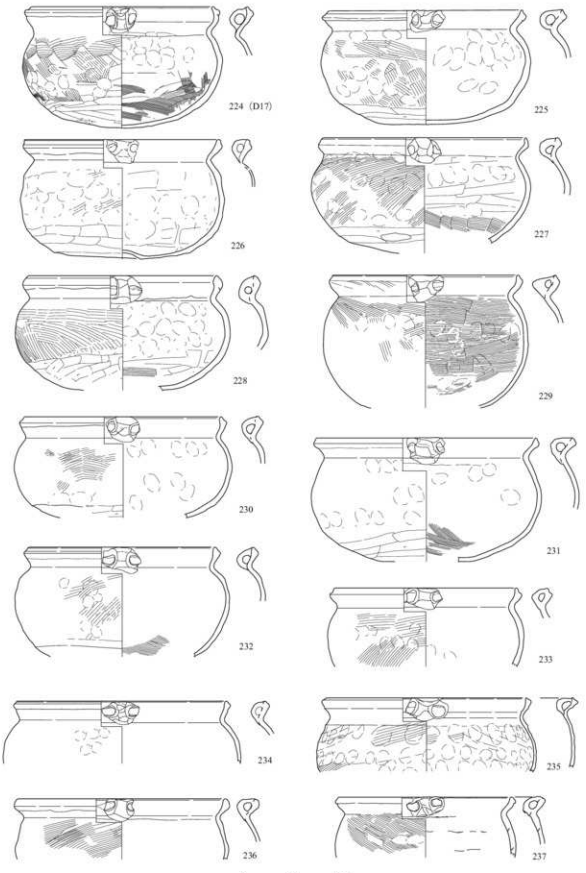


Fig. 34　SD04 出土遺物実測図（2）

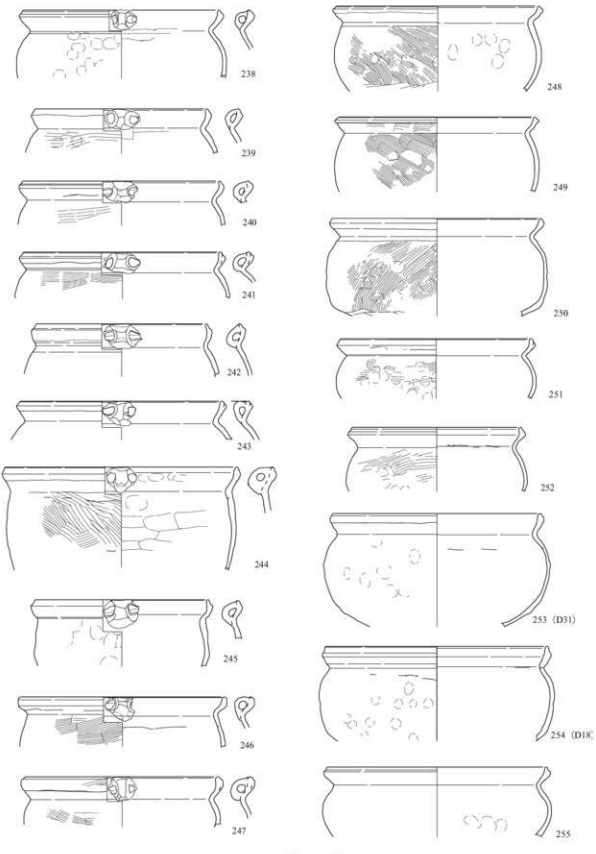


Fig. 35　SD04 出土遺物実測図（3）

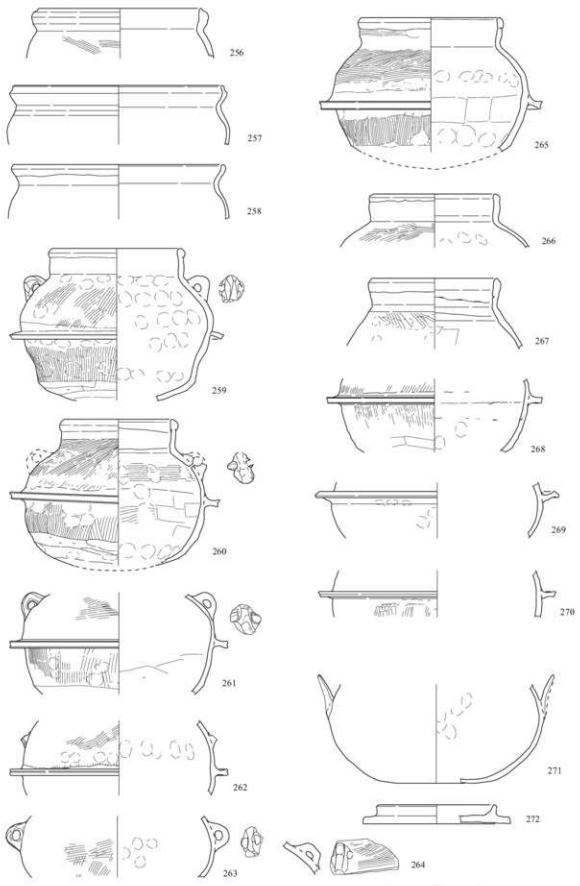


Fig. 36　SD04出土遺物実測図（4）

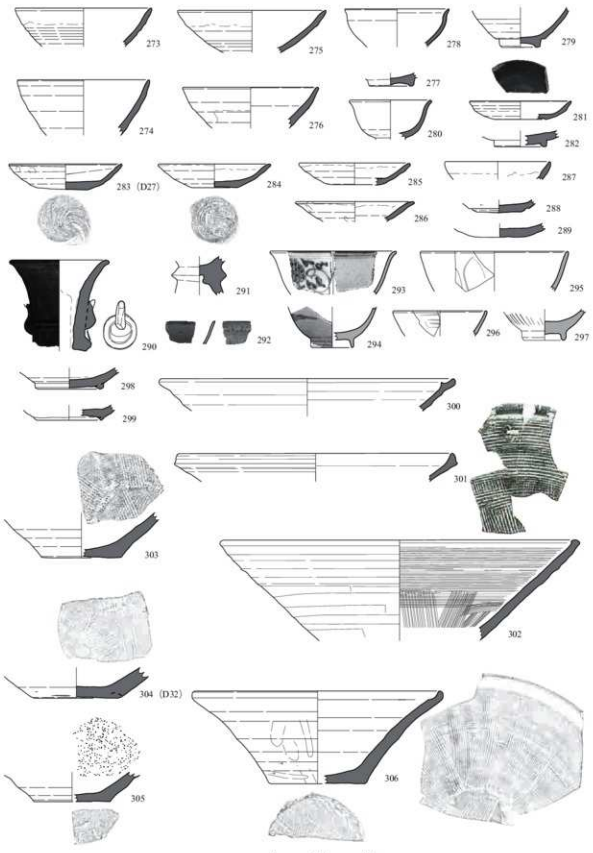


Fig. 37　SD04 出土遺物実測図（5）

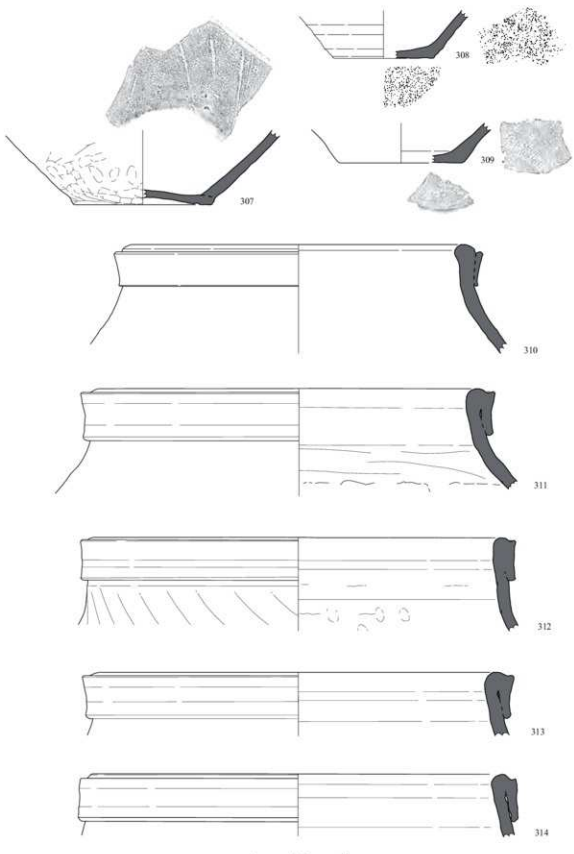


Fig. 38　SD04出土遺物実測図（6）

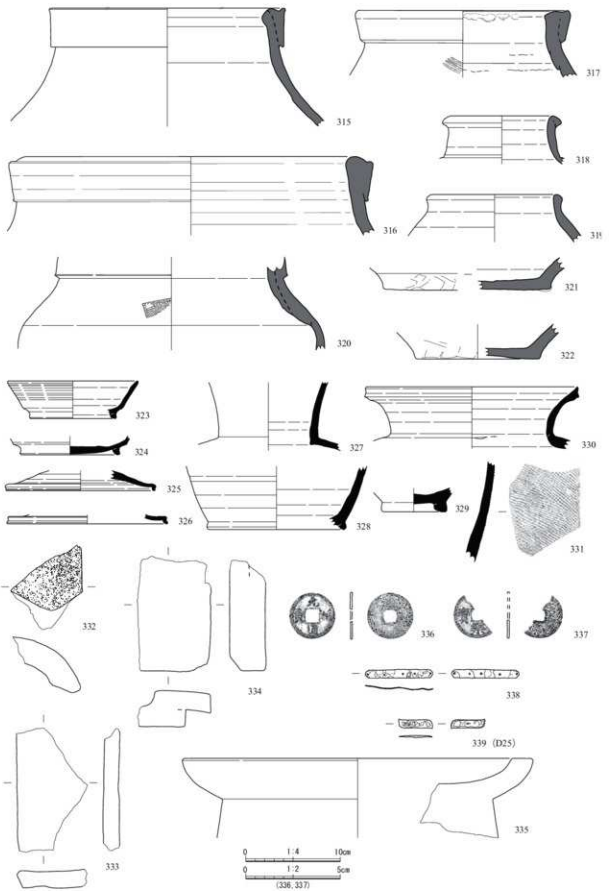


Fig. 39　SD04 出土遺物実測図（7）

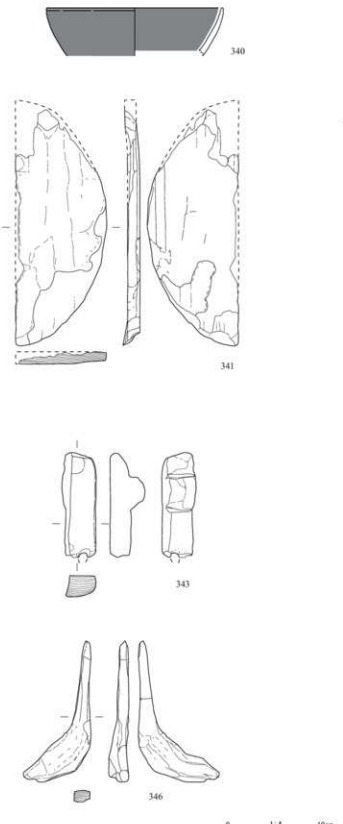


Fig. 40　SD04出土遺物実測図（8）

は底部の一部が残存し 303 の擂目は 9 条で外底部に糸切痕が確認できる。304 の擂目は 10 条。305 の擂目は 10 条で外底部に糸切痕が確認できる。303・304・305 はいずれも古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯 1 段階と考えられる。306・308・309 は志戸呂産の擂鉢で無施釉である。306 は擂目が 11 条、308 は 10 条、309 は 8 条でいずれも外底部に糸切痕が確認できる。307 は常滑産で内面に 1 条ずつ目が入っている。302 は鉄釉が施され、体部上半の摺目が横、体部下半の摺目がそれに直行するもので、他の擂鉢と比べ異色である。擂目の多少で時期を確定するのであれば、他の遺物と比べ時期が違う可能性がある。310 ～ 317・320 は常滑産の甕で口縁部の一部が残存している。どれも二重口縁である。318・319 は壺の口縁部で 318 は瀬戸産で鉄釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯 1 段階と考えられる。321・322 は常滑産の壺、甕、鉢いずれかの底部である。321 は赤物とよばれる常滑である。

323 ～ 331 は須恵器で 323・324 は坏身、325・326 は坏蓋、327 は壺の頸部、328・329 は壺の底部、330、331 は甕である。331 は表面にタタキがある。いずれも 8 世紀代と考えられる。332 ～ 334 は瓦である。332 は丸瓦、333 は平瓦、334 は塼瓦である。いずれも完形でなく一部分のみ残存する。335 は石製品で石臼である。上部が凹み鉢状になっている。336・337 は銭貨で渡来銭である。336 は「元□通宝」と読めるので、元祐通宝か元符通宝と考えられる。337 は「□楽□宝」と読めるので、永楽通宝と考えられる。338・339 は金属製品で何かの金具の可能性がある。338 は長さ 7.15cm、巾 0.9 cm、厚さ 0.05 cmで穿孔が 5 つあり、重さは 2.35g。339 は長さ 3.1 cm、巾 1.0 cm、厚さ 0.25 cmで穿孔が 1 つあり、重さは 1.22g である。

340 は碗の口縁部の一部が残存し、内・外面ともに黒漆が塗られている。341 は桶の底板の一部である。側面に目釘痕はない。342 は桶の側板で外面に箍の痕がある。内面は底板の痕があり表面は槍鉋で加工されている。343・344・345 は何かの部材と考えられる。346 は用途不明である。

SD05（Fig. 41）　C3・C4・D3 グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。北側は攪乱の影響を受けており、南側は SH01 に切られているため本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸 10.81 m、短軸 0.82 m、深さ 0.4 mである。軸は N-14° -E である。断面形状は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色、黒褐色シルトである。出土遺物で図示できたものはないが、土師器、陶器、瓦の小片が出土している。また、SH01 が 15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺構と考えられることから、15 世紀後半以前の遺構と捉えられる。

SD07（Fig. 41）　C2・C3 グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。規模は長軸 1.41 m、短軸 0.51 m、深さ 0.31 mである。SA04 の東側で検出した。断面形状は逆台形を呈し、埋土は黒褐色、暗灰黄色シルトである。SA04 にほぼ平行している。出土遺物で図示できたものはないが、土師器の口縁部が「く」の字に外反するく字形口縁の内耳鍋片が出土していることから、15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺構と考えられる。

SD08（Fig. 41）　C3 グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。規模は長軸 1.41 m、短軸 0.46 m、深さ 0.17 mである。断面形状は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SD09（Fig. 41）　C3 グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。北東側で SD04 を切り、南西側を SH01 に切られている。規模は長軸 1.17 m、短軸 0.55 m、深さ 0.11 mである。断面形状は浅く、埋土は褐灰色シルトである。出土遺物で図示できたものはないが、土師器片が出土している。SD04・SH01 は 15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺構と考えられることから、同時期の遺構と考えられる。

SD11（Fig. 41）　D4 グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。北側と南側で攪乱の影響を

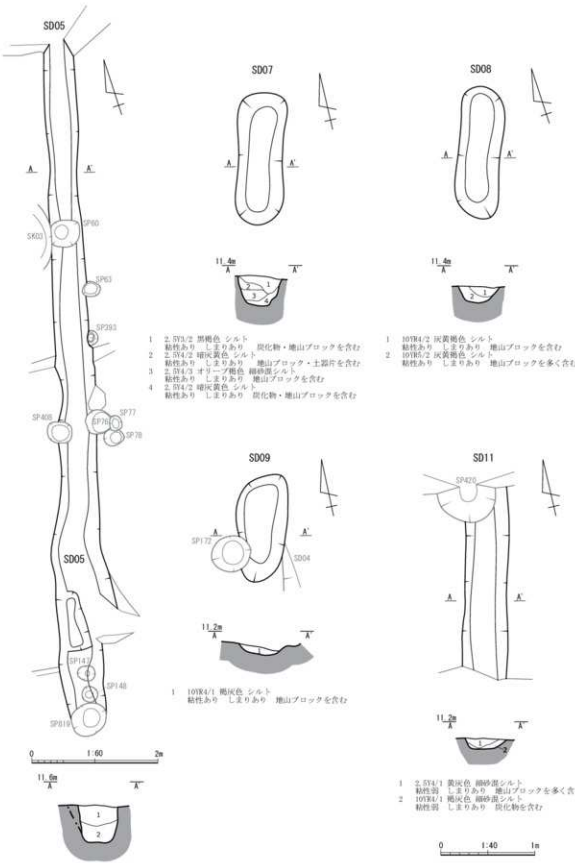


Fig. 41　SD05, SD07, SD08, SD09, SD11 遺構図

受けており、SH01に切られているため本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸2.02 m、短軸0.45 m、深さ0.1 mである。軸はN-14°-Eで SD05と平行である。断面形状は浅く、埋土は黄灰色、褐灰色シルトである。出土遺物で図示できたものはないが、土師器の皿片、口縁部が「く」の字に外反するく字形口縁の内耳鍋片、瓦質土器の口縁部が「く」の字に外反しない内湾形口縁の内耳鍋が出土している。出土遺物から15世紀後半～16世紀前半の遺構と考えられる。

SD13（Fig. 42）　D3・E3グリッドに位置する東西方向に延びる溝である。西側をSD04に切られているため本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸と2.44 m、短軸0.42 m、深さ0.18 mである。軸はN-71°-Wである。断面形状はU字形を呈し、埋土は黄灰色、暗灰黄色シルトである。遺物は出土していないが、SD04に切られていることから、15世紀中期以前の遺構と考えられる。

SD14（Fig. 42）　E3グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。規模は長軸1.83 m、短軸0.27 m、深さ0.06 mである。軸はN-23°-Eである。。断面形状は浅く、埋土は褐灰色シルトである。遺物は出土していない。遺構の時期は判断する資料が乏しく不明である。

SD15（Fig. 42）　D3・E3グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。北側をSD04に切られているため本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸3.89 m、短軸0.66 m、深さ0.08 mである。軸はN-17°-Eである。断面形状は浅く、埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は土師器の甕片が出土している。出土遺物から古代の遺構と考えられる。

SD16（Fig. 42）　E2・E3グリッドに位置する東西方向に延びる溝である。西側をSP643・SP800に切られているため本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸2.05 m、短軸0.59 m、深さ0.11 mである。軸はN-66°-Wである。断面形状は浅く、埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は出土していない。遺構の時期は判断する資料が乏しく不明である。

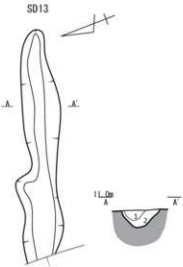
SD17（Fig. 43）　D2・D3グリッドに位置する東西方向に延びる溝である。規模は長軸1.05 m、短軸0.29 m、深さ0.07 mである。断面形状は浅く逆台形を呈し、埋土は灰褐色シルトである。遺物は出土していない。遺構の時期は判断する資料が乏しく不明である。

SD18（Fig. 43）　D2・D3グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。規模は長軸0.63 m、短軸0.22 m、深さ0.24 mである。断面形状はU字形を呈し、埋土は黒褐色、黄褐色シルトである。出土遺物で図示できたものはないが、土師器片が出土している。遺構の時期は判断する資料が乏しく不明である。

SD19（Fig. 44）　D2・D3グリッドに位置する東西方向に延びる溝である。西側は攪乱の影響を受けており本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸5.83 m、短軸0.69 m、深さ0.16 mである。軸はN-65°-Wである。断面形状は浅く、埋土は黄褐色、にぶい黄褐色シルトである。出土遺物は8世紀代と考えられる須恵器の坏身と土師器の甕片が出土しており、古代の遺構と考えられる。

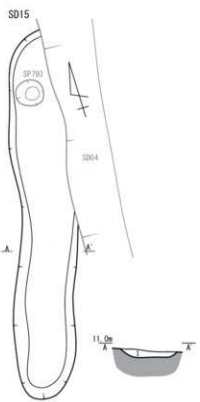
SD19出土遺物（Fig. 45）　遺物は土師器、須恵器、陶器が出土している。図示できたものでは、土師器1点、須恵器2点である。347は土師器の甕である。内・外面は摩滅しており、調整は不明である。348・349は須恵器の坏身で口縁部の一部が残存している。

SD20（Fig. 44）　D2・E2グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。北側は攪乱の影響を受けており、本来の規模は不明であるが、確認した規模は5.83 m、短軸0.69 m、深さ0.16 mである。軸はN-14°-Eである。断面形状は浅く、埋土は黒褐色シルトである。出土遺物は図示できたものはなく、陶器片が出土している。SH04とは直接切り合っているわけではないが、SH04との関係次第で遺構の時期が異なる。SH04より成立が先ならば15世紀中期以前の遺構となり、SH04より成立が後ならば15世紀中期以降の遺構となる。後述するが、SD23にも同様の事がいえる。

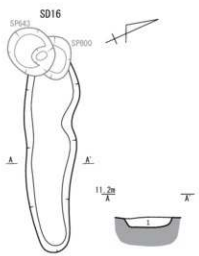


1　2.5Y4/1 黄灰色 シルト
粘性あり　しまりあり
2　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト
粘性あり　しまりあり　地山ブロックを多く含む

1　10YR4/1 褐灰色 シルト
粘性あり　しまりあり
地山ブロック・炭化物・焼土ブロックを僅かに含む



1　10YR5/2 灰黄褐色 シルト
粘性あり　しまりあり　φ5mm以下のレキ・地山ブロックを含む



1　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト　粘性あり　しまりあり

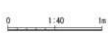


Fig. 42　SD13, SD14, SD15, SD16 遺構図

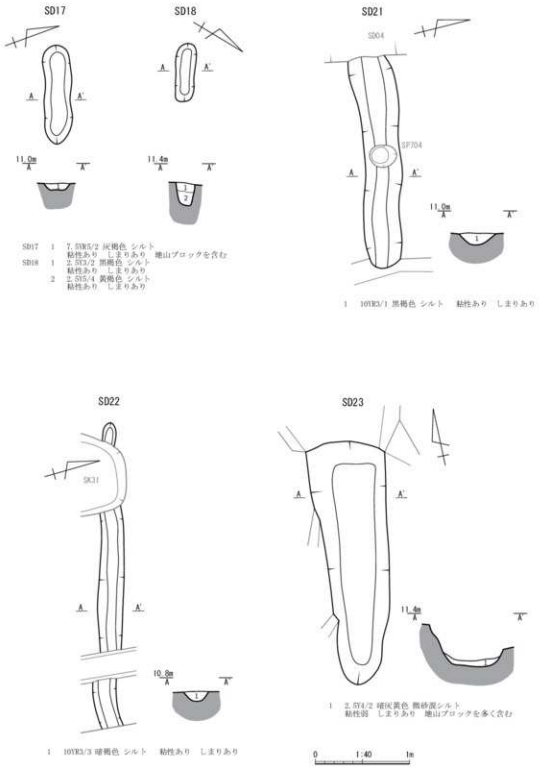


Fig. 43　SD17, SD18, SD21, SD22, SD23 遺構図

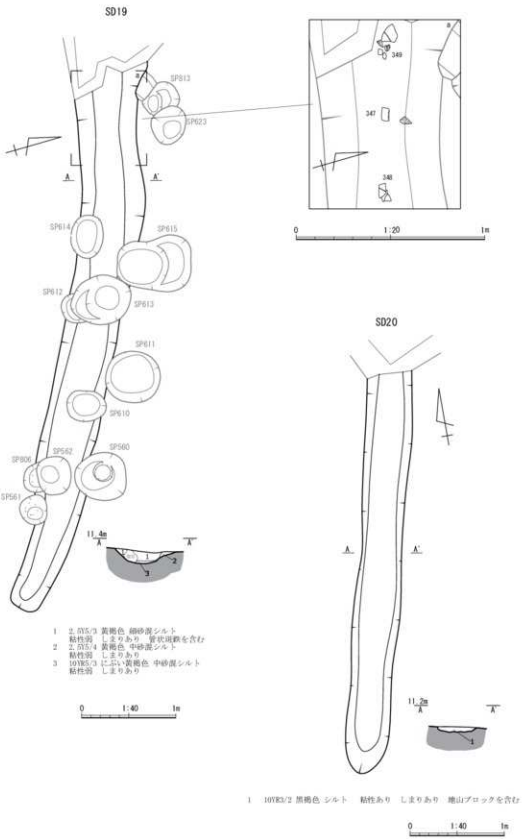


Fig. 44　SD19, SD20 遺構図

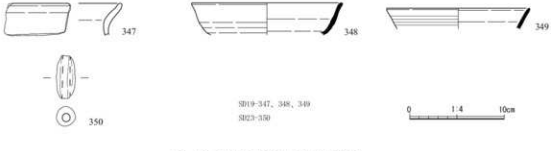


Fig. 45　SD19, SD23 出土遺物実測図

SD21（**Fig. 43**）　F3 グリッドに位置する東西方向に延びる溝である。西側を SD04 に切られており、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸 2.24 m、短軸 0.48 m、深さ 0.12 m で、軸は N-80°　-W である。断面形状は浅く、埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土していないが、SD04 に切られている事から、15 世紀中期以前と考えられる。

SD22（**Fig. 43**）　F3・F4 グリッドに位置する東西方向に延びる溝である。西側の一部を SK31 に切られる。東側は調査区外に続くと考えられる。本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸 3.24 m、短軸 0.26 m、深さ 0.10 m で、軸は N-74°　-W である。断面形状は浅く、埋土は暗褐色シルトである。遺物は出土していないが、16 世紀代の遺構と考えられる SK31 に切られている事から、16 世紀以前の遺構と捉えられる。

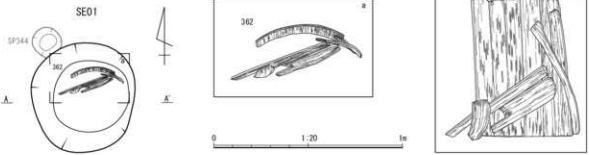
SD23（**Fig. 43**）　D2 グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。北側は攪乱の影響を受けているため、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸 2.59 m、短軸 0.83 m、深さ 0.42 m である。軸は N-14°　-E である。断面形状は逆台形を呈し、埋土は暗灰黄色シルトである。出土遺物から遺構の時期は特定できないが、SD20 と同様に SH04 との関係次第で成立時期が異なってくる。

SD23 出土遺物（**Fig. 45**）　遺物は土師器片、陶器片、土製品が出土している。図示できたものでは 350 の土錘の 1 点である。土錘は弥生時代から近世にかけて形状を変えていないため、時期の特定は難しい。

（2）井戸（SE）

SE01（**Fig. 46**）　A4・B4 グリッドに位置する素掘りの井戸である。平面形はほぼ円形で重複関係は SP344 を切る。検出規模は長軸 1.18 m、短軸 1.12 m、深さ 5.96 m であり、底面は長軸 0.8 m、短軸 0.64 m である。最下層からは円形とみられる井筒の一部が確認されており、推定径は 0.65 m 程度である。出土遺物には連房式登窯第 1 段階第 3 小期～第 2 段階第 6 小期の遺物がみられることから 17 世紀中頃～ 18 世紀初頭の遺構と捉えられる。

SE01 出土遺物（**Fig. 47**）　遺物は土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。図示できたものでは、陶器 4 点、磁器 3 点、瓦 4 点、木製品 1 点である。351 は陶器で、355 ～ 357 は焼締陶器である。351 は美濃産の碗で口縁部から体部の一部が残存し、鉄釉が施されており美濃大窯 2 段階と考えられる。355 ～ 357 は瀬戸産の擂鉢で鉄釉がいずれも施されている。355・356 は口縁部の一部が残存しているが擂目が何条あるかは不明である。357 は 11 条の擂目がある。355 は連房式登窯第 1 段階第 3 小期、356 は連房式登窯第 2 段階第 6 小期、357 は瀬戸大窯 2 段階と考えられる。352 ～ 354 は磁器で、352 は肥前産の染付磁器の碗で外面は 2 重の綱目柄、内面は 1 重の綱目柄、見込みは菊花柄、外底部は渦福が描かれている。渦福の様子から 17 世紀中期以降と考えられる。353 は白磁



1　10YR4/3 にぶい黄褐色 中砂混シルト　粘性あり　しまり弱　φ5cm以下のレキ・炭化物を含む
2　10YR3/2 黒褐色 中砂混シルト　粘性あり　しまり弱　φ5cm以下のレキ・炭化物を含む
3　2.5Y3/2 黒褐色 細砂混シルト　粘性あり　しまり弱　地山ブロックを含む
4　10YR4/2 灰黄褐色 中砂混シルト　粘性弱　しまり弱　炭化物を含む
5　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 微砂混シルト　粘性弱　しまりあり　炭化物を含む
6　7.5YR4/1 褐灰色 細砂混シルト　粘性弱　しまり弱
7　10YR3/1 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物を含む
8　10YR4/1 褐灰色 粗砂混シルト　粘性弱　しまり弱　φ5cm以下のレキを多く含む

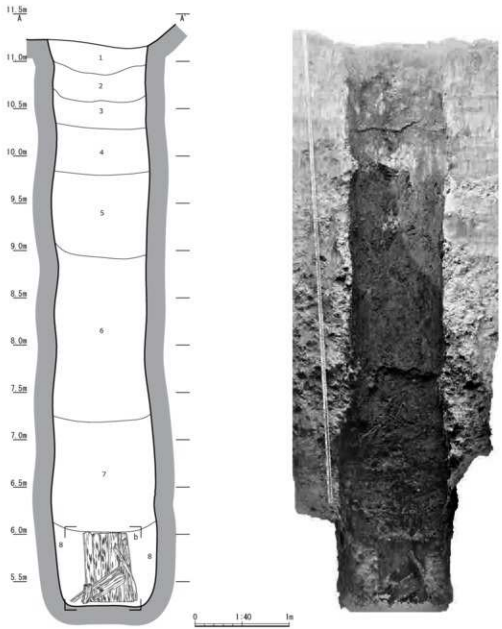


Fig. 46　SE01 遺構図

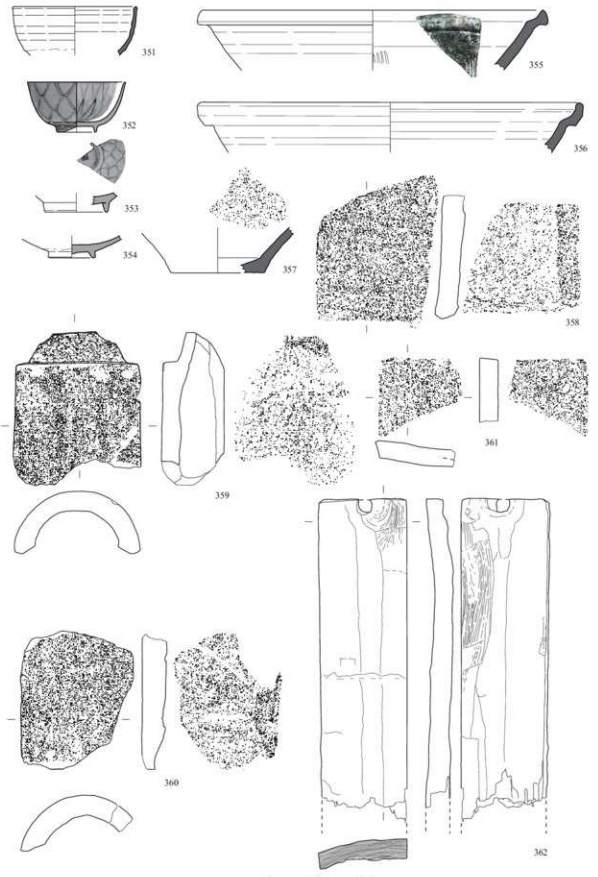


Fig. 47　SE01 出土遺物実測図

の碗で底部の一部が残存している。354は白磁の鉢で底部の一部が残存している。見込みは蛇の目釉剝ぎ状になっている。353・354は国産と考えられる。358～361は瓦で、358は軒丸瓦の瓦当が欠損している。359・360は丸瓦でどちらも凹部に布目があり、コビキB技法である。361は平瓦である。362は板状の木製品である。井戸枠の板の一部の可能性がある。

SE02（Fig. 48）　E3グリッド北中央に位置する素掘りの井戸である。平面形はほぼ円形で重複関係はSD04を切る。検出規模は長軸1.56 m、短軸1.50 m、深さ6.12 mであり、底面は長軸0.79 m、短軸0.73 mである。、最下層において井筒は確認されなかった。出土遺物は7世紀～8世紀代と考えられる土師器、須恵器が一定量含まれるが、主体となる遺物の特徴から古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯1段階と考えられ、15世紀後半～16世紀前半の遺構と捉えられる。

SE02出土遺物（Fig. 49～51）　遺物は土師器、須恵器、陶器、磁器、漆器、木製品、石製品が出土している。図示できたものでは、土師器6点、須恵器5点、陶器12点、磁器5点、石製品4点、漆器2点、木製品4点である。

363～365は土師器の皿で363は手捏ね成形で、内面底部から口縁部にかけて横ナデ調整、外面は指オサエ痕がある。364・365は轆轤成形で、364は外底部が摩滅しており糸切痕は確認できない。365は糸切痕が確認できる。366～368は内耳鍋である。366・367は口縁部が「く」の字に外反するく字形口縁で、耳は残存していない。内面体部から外面口縁部まで横ナデ調整、外面体部は刷毛調整が施され、煤が付着している。368は体部が直線的に延び、口縁部は外反する。形態的特徴から当地の製品ではないとみられ、古瀬戸地方の製品に似る。369は高坏の脚部で古墳時代と考えられる。

370・371は瀬戸産の陶器で、370は灰釉の碗である。口縁部から体部の一部が残存しており、内面体部から外面体部に施釉されている。発色が悪く釉色は白色である。371は灰釉の皿で口縁部から体部の一部が残存しており、内面体部から外面体部まで施釉されている。外底部に目跡がある。370・371はどちらも古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。372～377は龍泉窯系の青磁である。すべて碗で372・373・375・376は底部の一部が残存しており、374・377は口縁部から体部の一部が残存している。372・373は見込みに牡丹刻印が施され、外底部は釉剝ぎが施されている。375は見込みに牡丹刻印が施され、外底部は蛇の目釉剝ぎが施されている。376は外面に草花文が施され、外底部は釉剝ぎが施されている。374は外面に連弁文、377は外面に雷文帯が施されている。378～387は焼締陶器である。378～380は擂鉢でそれぞれに鉄釉が施されている。378は志戸呂産で擂目は底部では縦方向にはいり、体部では横方向に入る。379・380は瀬戸産の擂鉢で口縁部の一部が残存する。残存する口縁部は擂目がない部分になる。379は瀬戸大窯1段階、380は古瀬戸後期様式Ⅳ段階と考えられる。381～387は常滑産で、16世紀後半の遺物と考えられる。381～385は甕である。口縁部の一部が残存し、それぞれの口縁部は二重口縁になっている。386は壺、387は甕の底部である。

388～392は須恵器で、388は甕、389は長頸壺、390は壺、391・392は坏身である。388は口縁部から体部の一部が残存し、389は頸接合部の一部が残存している。390は体部の一部が残存し、391・392は底部である。393～396は石製品で、いずれも残りが悪く詳しい事は不明である。393・395は器形が皿状になっていることから石鍋の可能性がある。特に395は外底部と考えられるところが焦げているため、火を受けていると考えられる。394は器形が平であることから温石の可能性がある。396は棒状のものだが用途不明である。

397・398は漆器の皿で、397は内・外面が黒漆、模様が朱漆である。破片であるため模様が何で

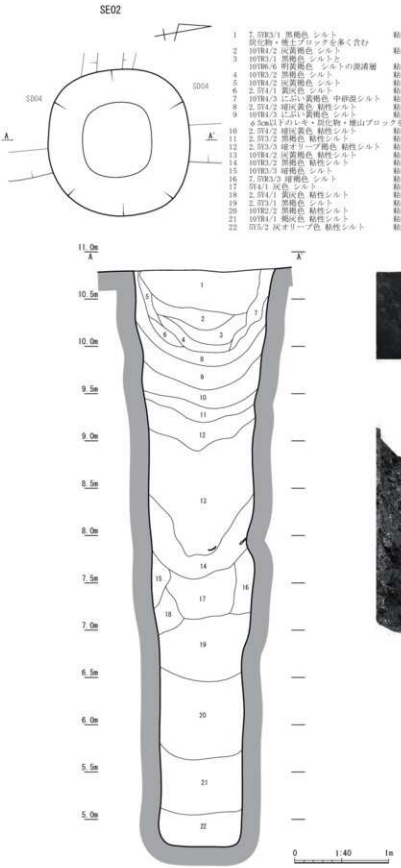


Fig. 48 SE02 遺構図

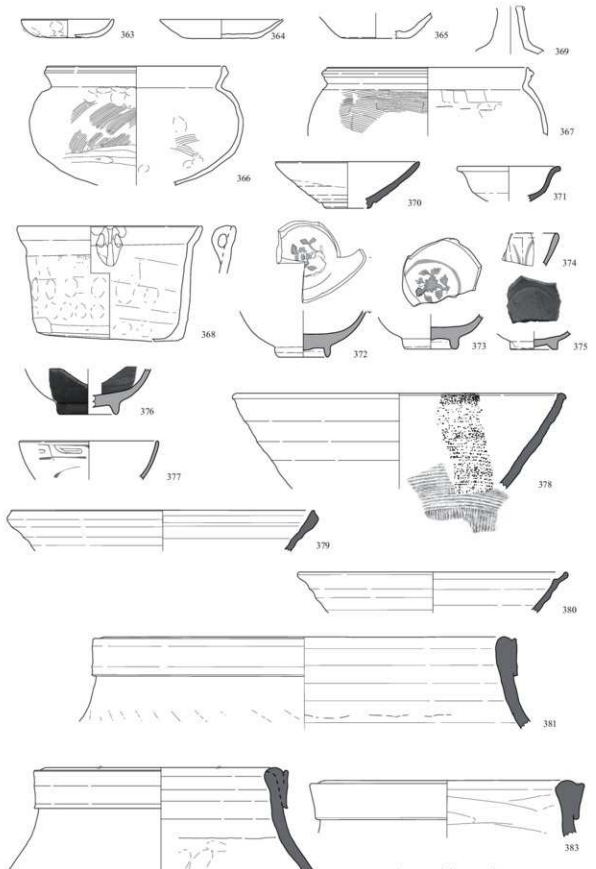


Fig. 49　SE02出土遺物実測図（1）

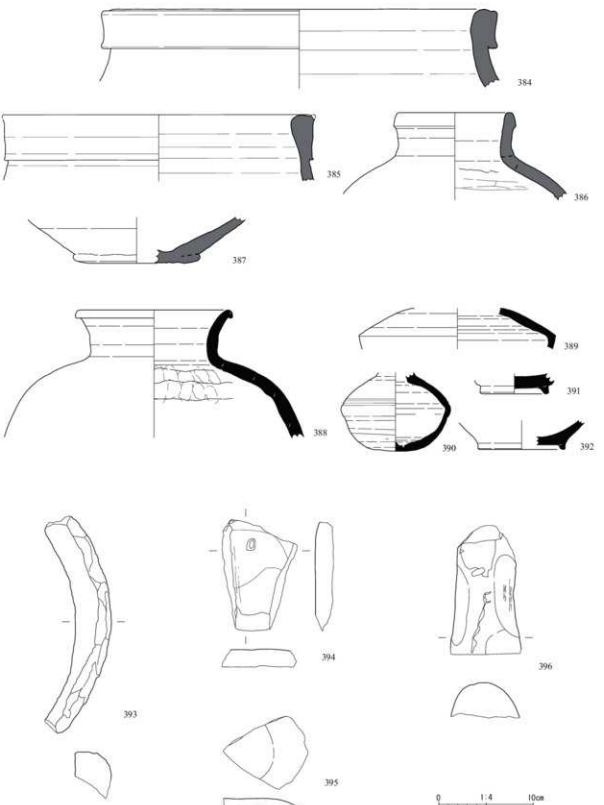


Fig.50　SE02出土遺物実測図（2）

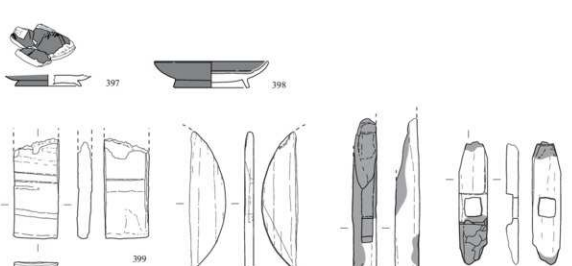


Fig. 51　SE02 出土遺物実測図（3）

あるかは不明。398 は内・外面の下地が黒漆で、その上に内・外面ともに赤漆を塗っている。399 は板状のもので、桶の側板と考えられる。外面に箍痕が 2 条ある。400 は桶の底板と考えられる。401・402 は何かの部材片である。それぞれ一部炭化している。

SE03（Fig. 52・53）　D3 グリッド北中央に位置する素掘りの井戸である。平面形はほぼ円形で重複関係は SD04、SP512 を切る。検出規模は長軸 2.34 m、短軸 2.14 m、深さ 6.4 mで、底面は長軸 1.61 m、短軸 1.43 mである。遺構の最下層からは円形と思われる井筒の一部が確認されており、直径は 0.81 m程度である。出土遺物から瀬戸大窯 2 段階の遺構と考えられ、16 世紀前半と捉えられる。なお、わずかではあるが埋土上層より 16 世紀後半とみられる遺物が出土していることから、廃絶時期は 16 世紀後半の可能性がある。

SE03 出土遺物（Fig. 54）　遺物は土師器、陶器、瓦質土器、磁器、瓦、漆器、木製品、獣骨が出土している。図示できたものでは、土師器 16 点、陶器 6 点、瓦質土器 1 点、磁器 2 点、瓦 2 点、金属製品 1 点、漆器 1 点である。403 ～ 417 は土師器の皿ですべて輪轆成形である。414 は外底部摩滅により糸切痕は確認できなかった。418 は口縁部が「く」の字に外反しない内湾形口縁の内耳鍋と考えられ、口縁部の一部が残存しているが耳は残存していない。口縁部の内・外面にかけて横ナデ調整がされており、16 世紀後半の遺物と考えられる。419・420・422 は陶器の碗で、419・420 は底部が完形で残存し口縁部から体部の一部が残存する。内・外面に鉄釉が施され、外底部は露胎している。422 は底部のみが完形で残存し、内・外面に灰釉が施され、外底部は露胎している。419・422 は瀬戸産で瀬戸大窯 2 段階と考えられる。420 は志戸呂産である。421 は瀬戸産の皿で底部の一部が残存する。内・外面に灰釉が施され、内面底部と外底部に重焼痕がある。瀬戸大窯 2 段階と考えられる。425・426 は焼締陶器で 425 は瀬戸産の擂目が 12 条の擂鉢である。口縁部の一部が残存し、鉄釉が施されている。瀬戸大窯 2 段階と考えられる。426 は志戸呂産の鉢で底部の一部が残存している。423・424 は龍泉窯系の青磁である。423 は碗で口縁部の一部が残存しており、無

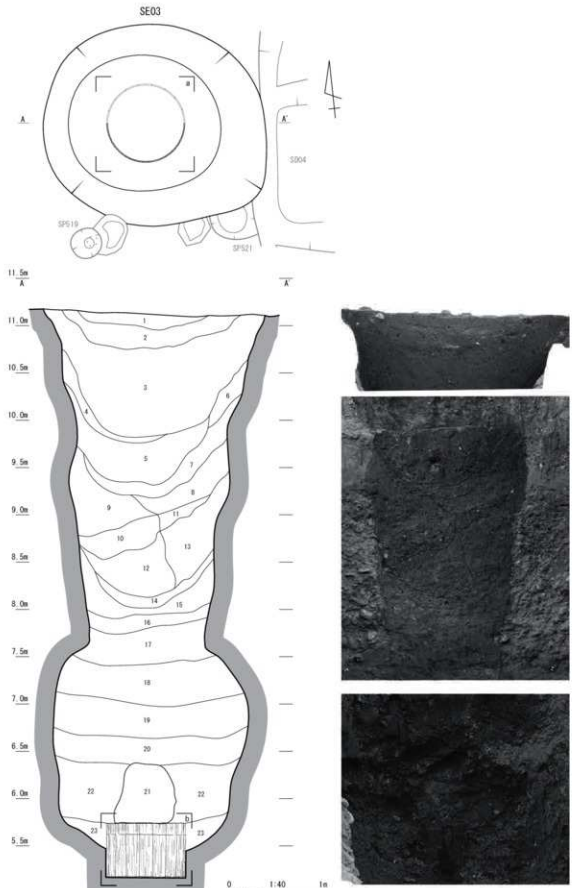
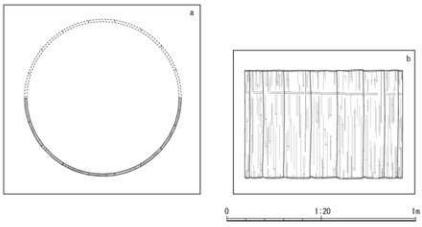


Fig.52　SE03遺構図（1）



1	2. 5Y4/3 オリーブ褐色	微砂混シルト	粘性弱	しまりあり	φ1cm以下のレキ・炭化物を含む
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキ・炭化物・地山ブロックを含む
3	10YR4/1 褐灰色	微砂混シルト	粘性弱	しまりあり	φ3cm以下のレキ・炭化物を含む
4	2. 5Y4/1 黄灰色	シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物・地山ブロックを含む
5	10YR5/1 灰色	粘性シルト	粘性強	しまりあり	管状凝集を含む
6	2. 5Y5/1 黄灰色	細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ1cm以下のレキ・炭化物を含む
7	7. 5Y5/1 灰色	粘性シルト	粘性強	しまりあり
8	2. 5Y4/1 黄灰色	細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・地山ブロックを含む
9	10YR4/2 灰黄褐色	細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・地山ブロックを含む
10	10YR3/1 黒褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む
11	7. 5YR4/2 灰褐色	中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物・地山ブロックを含む
12	10YR3/2 黒褐色	シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物を含む
13	10YR4/3 にぶい黄褐色	微砂混シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物を含む
14	10YR5/1 褐灰色	微砂混シルト	粘性弱	しまり弱	炭化物を含む
15	2. 5Y4/3 オリーブ褐色	シルト	粘性強	しまりあり	φ5cmほどのレキを含む
16	2. 5Y4/2 暗灰黄色	細砂混シルト	粘性弱	しまりあり	炭化物を含む
17	2. 5Y4/1 黄灰色	粘性シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物を含む
18	10YR4/2 灰黄褐色	細砂混シルト	粘性弱	しまりあり	多大のレキを含む
19	7. 5Y3/1 オリーブ黒色	粘性シルト	粘性あり	しまりあり
20	5Y4/1 灰色	細砂混シルト	粘性弱	しまり弱	多大のレキを含む
21	7. 5YR7/4 にぶい橙色	シルト質粘土	粘性強	しまり強
22	7. 5Y4/1 灰色	中砂混シルト	粘性弱	しまり弱	層界に鉄分沈着
23	5G5/1 オリーブ灰色	微砂混シルト	粘性あり	しまりあり

Fig. 53　SE03 遺構図（２）

文である。424 は輪花皿で外面には草花文が施されている。427 は瓦質土器の火鉢の脚部と考えられる。中は空洞になっている。428・429 は丸瓦で、一部分が残存しているのみで、コビキは不明。それぞれに吊紐痕がある。430 は鉄製品で、釘であろうか。恐らく、釘と考えられる。頭部と先端部が欠損しており、胴部のみである。431 は漆器の皿で口径約 26 cmと大きい。口縁部の一部が残存するのみである。内・外面ともに赤漆が塗られている。

（３）土坑（ＳＫ）

SK02（Fig. 55）　B3 グリッド南東・B4 グリッド南西に位置する土坑である。平面形は瓢箪形で検出規模は長軸 1. 32 m、短軸 1. 05 m、深さ 0. 3 m・0. 44 mと２段に落ちており、下面の１段目は長軸 0. 28 m、短軸 0. 24 mである。底部に礎石と思われる長軸 0. 24 m、短軸 0. 17 m、厚み 0. 06 mの石を検出した。下面の２段目は長軸 0. 78 m、短軸 0. 75 mである。底部に礎石と思われる長軸 0. 68 m、短軸 0. 45 m、厚み 0. 18 mの石を検出した。断面形状は１段目、２段目ともに逆台形を呈し、遺物は出土しておらず、遺構の時期は判断する資料が乏しく不明である。

SK03（Fig. 55）　C3 グリッド北東・C4 グリッド北西に位置する土坑である。平面形は楕円形で重複関係は、SP105・SP385 に切られ、SD05・SP60・SP80 を切り、最下面からは SP386 ～ SP388 を検出した。検出規模は長軸 1. 83 m、短軸 1. 45 m、深さ 0. 23 mで、下面は長軸 1. 24 m、短軸 1. 11 mである。断面形状は長方形を呈し、埋土は暗オリーブ褐色、暗灰黄色シルトである。出土遺物で図示できたものはないが、土師器の鍋釜片が出土している。SD05 を切ることから、16 世紀前半以降の遺構と考えられる。

SK04（Fig. 55）　C3 グリッド北東に位置する土坑である。平面形は楕円形で重複関係は、SK20 を

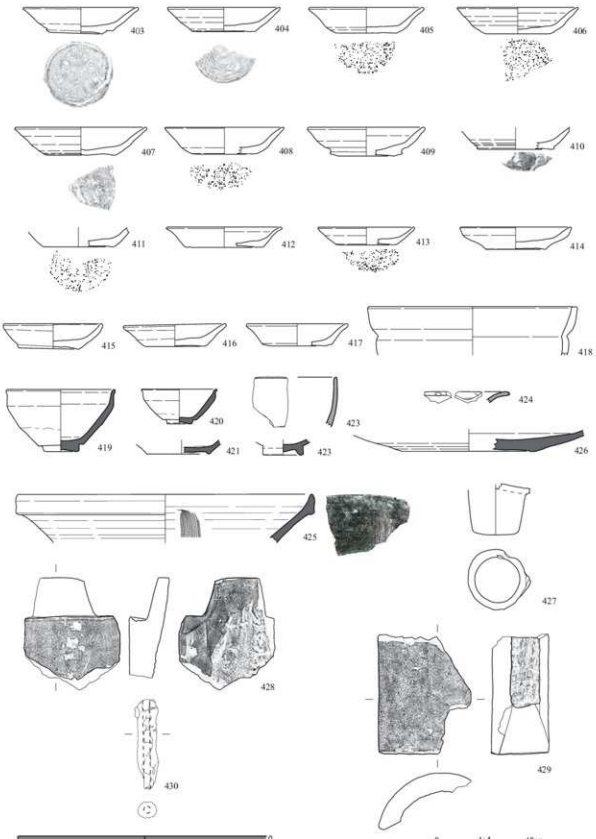


Fig. 54　SE03 出土遺物実測図

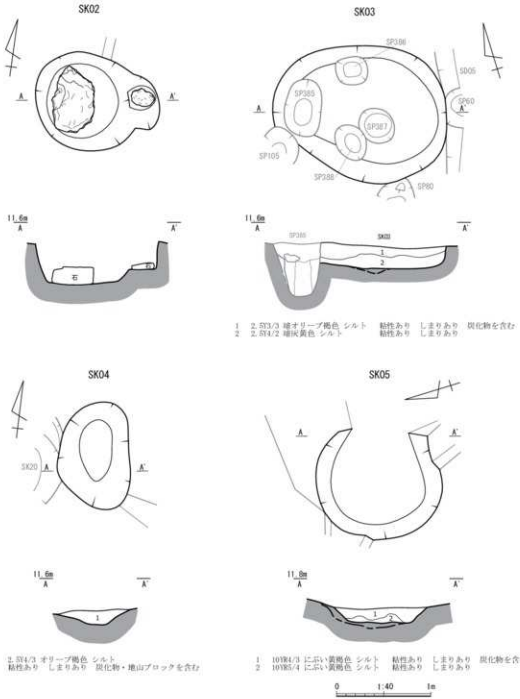


Fig. 55　SK02, SK03, SK04, SK05 遺構図

切る。検出規模は長軸 1.14 m、短軸 0.78 m、深さ 0.14 mで、下面は長軸 0.64 m、短軸 0.34 mである。断面形状は浅く、埋土はオリーブ褐色シルトである。出土遺物で図示できたものはないが、土師器の鍋釜片、龍泉窯系の青磁片が出土しており、遺物の特徴から 16 世紀代の遺構と考えられる。

SK05（Fig. 55）　B2 グリッド北中央に位置する土坑である。平面形は円形で攪乱に南東側を攪乱の影響を受けており本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸 1.33 m、短軸 1.25 m、深さ 0.26 mで、下面は長軸 1.00 m、短軸 0.96 mである。断面形状は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄

褐色シルトである。遺物は出土しておらず、遺構の時期は判断する資料が乏しく不明である。

SK06（Fig. 56）　B2 グリッド北東・B3 グリッド北西に位置する土坑である。平面形は楕円形で重複関係は SD03 を切る。検出規模は長軸 1.44 m、短軸 1.05 m、深さ 0.26 m で、下面は長軸 0.86 m、短軸 0.93 m である。底部の一部分に瓦と石がかたまって出土している。断面形状は横長逆台形を呈し、埋土は灰褐色、灰黄褐色シルトである。瀬戸大窯 1 ～ 2 段階の擂鉢の底部が 1 点出土しているものの、主体となる出土遺物の時期から、19 世紀以降の遺構と考えられる。

SK06 出土遺物（Fig. 57）　遺物は土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。図示できたものでは、磁器 1 点、擂鉢 2 点、瓦 4 点である。432 は国産染付の碗で、口縁部の一部が残存している。19 世紀以降と考えられる。433・434 は瀬戸の擂鉢で、それぞれ鉄釉が施されている。433 は口縁部から体部の一部が残存し、19 条の擂目があり、口縁部は二重口縁になっている。19 世紀以降と考えられる。434 は底部の一部が残存しており、7 条の擂目がある。瀬戸大窯 1 ～ 2 段階と考えられる。435 ～ 438 は瓦で 435・436 は丸瓦、437・438 は平瓦である。435・436 の凹部には細かい布目があり、いずれもコビキ B 技法の痕跡が残る。

SK09（Fig. 56）　B3 グリッド南西・C3 グリッド北西に位置する土坑である。平面形は楕円形で重複関係は、SP217 ～ SP219・SP395 に切られ、SP407 を切る。検出規模は長軸 1.26 m、短軸 1.01 m、深さ 0.05 m・0.22 m と 2 段に落ちており、下面の 1 段目は長軸 0.62 m、短軸 0.26 m、2 段目は長軸 0.76 m、短軸 0.69 m である。断面形状は 1 段目、2 段目ともに逆台形を呈し、埋土は暗褐色、暗オリーブ褐色シルトである。出土遺物から古瀬戸後期様式Ⅳ期の遺構と考えられる。

SK09 出土遺物（Fig. 60）　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは、土師器 2 点、陶器 1 点である。439 は土師器の皿で、口径が 14.3 ㎝と大きい。外面底部には糸切痕はなく、手捏ねで外面体部には指オサエ痕がある。441 は土師器の茶釜型鍋と考えられる。羽の部分のみ残存している外面の羽より下部は煤におおわれている。440 は瀬戸の碗で内・外面に鉄釉が施されており、外底部は露胎している。古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。

SK19（Fig. 56）　C4 グリッド南中央に位置する土坑である。平面形は方形と思われるが、調査区東壁にかかっているため本来の規模は不明である。確認した規模は長軸 1.22 m、短軸 0.74 m、深さ 0.26 m で、下面は長軸 0.90 m、短軸 0.65 m である。断面形状は長逆台形を呈し、埋土は灰色、オリーブ黒色シルトである。出土遺物で図示できたものはないが、土師器の皿片と鍋釜片が出土しており、遺物の特徴から 16 世紀後半の遺構と考えられる。

SK20（Fig. 56）　C3 グリッド北東に位置する。平面形は楕円形で南西側を攪乱の影響を受けており、北東側を SK04 に切られるため、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸 1.20 m、短軸 0.84 m、深さ 0.26 m・0.21 m と 2 段に落ちており、下面の 1 段目は長軸 0.55 m、短軸 0.18 m、2 段目は長軸 0.63 m、短軸 0.38 m である。遺構の中層から石が出土した。断面形状は 1 段目、2 段目ともに逆台形を呈し、埋土は暗褐色、褐色、黒褐色、灰褐色、褐灰色シルトである。出土遺物で図示できたものはないが、土師器の皿片、鍋釜片、常滑産の甕片、龍泉窯系の青磁片が出土している。SK04 との切り合い関係と出土遺物の特徴から 16 世紀以前の遺構と考えられる。

SK21（Fig. 58）　B3 グリッド北東に位置する。平面形はほぼ円形で重複関係は、SD03 を切る。検出規模は長軸 1.06 m、短軸 1.01 m 深さ 0.61 m で、下面は長軸 0.67 m、短軸 0.55 m である。断面形状は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルトである。出土遺物から 15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺構と考えられる。

SK21 出土遺物（Fig. 60）　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは土師器 2 点、

Fig.56　SK06,SK09,SK19,SK20 遺構図

陶器１点である。442・443 は内耳鍋で口縁部は「く」の字に外反するく字形口縁であり、耳が残存している。耳は口縁部内面に付き、内面体部から外面口縁部まで横ナデ調整。外面体部は刷毛調整が施され、煤が付着している。444 は常滑産の甕で口縁部から体部の一部が残存する。

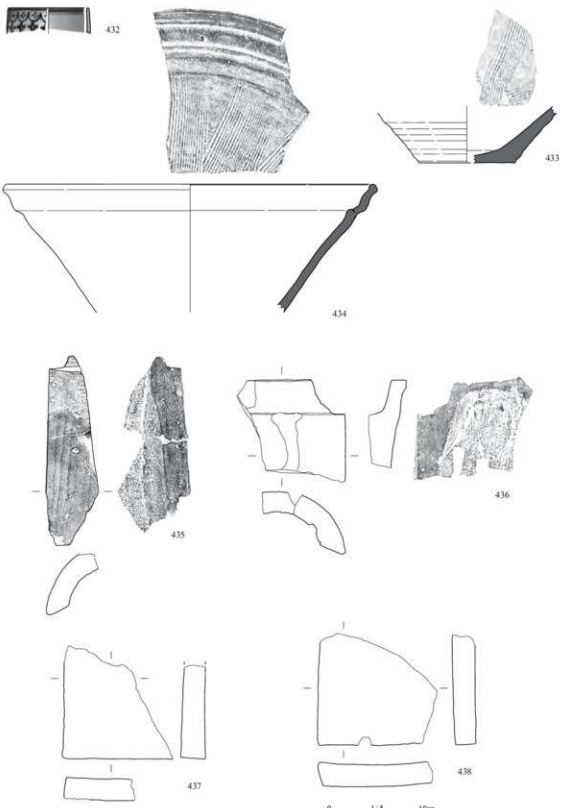


Fig. 57　SK06 出土遺物実測図

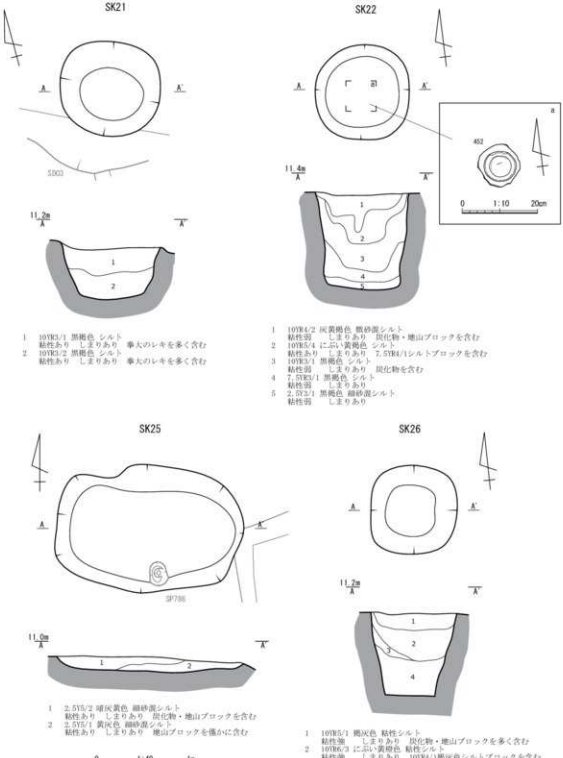


Fig. 58　SK21, SK22, SK25, SK26 遺構図

SK22（Fig.58）　C2グリッド南東・D2グリッド北東に位置する土坑である。平面形はほぼ円形。検出規模は長軸1.01m、短軸0.99m、深さ1.03mで、下面は長軸0.67m、短軸0.64mである。断面形状は掘方が垂直に落ち逆台形もしくは、ほぼ長方形を呈し、埋土は灰黄褐色、にぶい黄褐色、黒褐色シルトである。中心となる出土遺物の年代から、15世紀後半～16世紀前半の遺構と考えられる。

SK22出土遺物（Fig.60）　遺物は土師器、灰釉陶器、陶器が出土している。図示できたものでは、土師器5点、灰釉陶器1点、陶器2点である。445・446は土師器の皿で、445は手捏ねで外面体部には指オサエ痕がある。446は轆轤成形と考えられるが摩滅しており、糸切痕は確認できない。447～449は内耳鍋で、口縁部は「く」の字に外反するく字形口縁である。447は耳が残存している。耳は口縁部内面に付き、内面体部から外面口縁部まで横ナデ調整。外面体部は刷毛調整が施され、煤が付着している。448は内面体部に煤が付着している。450・451は瀬戸産の陶器で450は皿、451は注口鉢である。450は内・外面口縁部に灰釉が施されており、内・外面の体部と底部は露胎している。内面底部には目跡がある。451は口縁部から体部の一部が残存し、内・外面に鉄釉が施されている。450は古瀬戸後期様式Ⅳ期、451は瀬戸大窯4段階と考えられる。452は灰釉陶器の底部で、内面底部に重焼痕が確認できる。高台は極端ではない「八」の字型をしている。高台は付け高台、内面はナデ調整、外底部は糸切り後ナデ調整がされている。

SK25（Fig.58）　D3グリッド南東・E3グリッド北東・E4グリッド北西に位置する。平面形は楕円形で最下面からSP786を検出し、東側を攪乱の影響を受け、本来の規模は不明であるが、確認した規模は　長軸1.96m、短軸1.36m、深さ0.15mで、下面は長軸1.74m、短軸0.95mである。断面形状は浅く、埋土は暗灰黄、黄灰色シルトである。土師器が出土しているが、帰属時期は不明である。

SK25出土遺物（Fig.60）　遺物は土師器が出土している。図示できたものでは、土師器1点で453は皿である。轆轤成形で、外底部には糸切痕が確認できる。

SK26（Fig.58）　E2グリッド北東・E3グリッド北西に位置する土坑である。平面形はほぼ方形で検出規模は長軸0.94m、短軸0.93m、深さ0.85mで、下面は長軸0.54m、短軸0.51mである。断面形状は掘方が垂直に落ち逆台形を呈し、埋土は褐灰色、にぶい黄橙色、黒褐色、にぶい黄色シルトである。若干の大きさの違いはあるが、SK22と形態が類似する。遺物は出土していないため帰属時期は不明と言わざるを得ないが、形態的特徴からSK22と同時期と考えれば、15世紀後半～16世紀前半の遺構と考えられる。

SK27（Fig.59）　E2グリッド北東・E3グリッド北西に位置する土坑である。平面形は楕円形で重複関係は、西側をSK28に切られるため、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸1.12m、短軸0.94m、深さ0.10mで、下面は長軸0.68m、短軸0.58mである。断面形状は浅く、埋土は褐灰色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器の皿片、瀬戸の鉄釉壺片が出土しており、遺物の特徴から16世紀の遺構と考えられる。

SK28（Fig.59）　E2グリッド北東・E3グリッド北西に位置する土坑である。平面形は楕円形で重複関係は、SK27・SP650を切る。検出規模は長軸0.70m、短軸0.52m、深さ0.23mで、下面は長軸0.31m、短軸0.20mである。断面形状はU字形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物が乏しいため、帰属時期を決めることは困難であるが、出土した内耳鍋の特徴から15世紀後半～16世紀前半の遺構と捉えられる。

SK28出土遺物（Fig.60）　遺物は土師器が出土している。図示できたものでは、土師器1点で

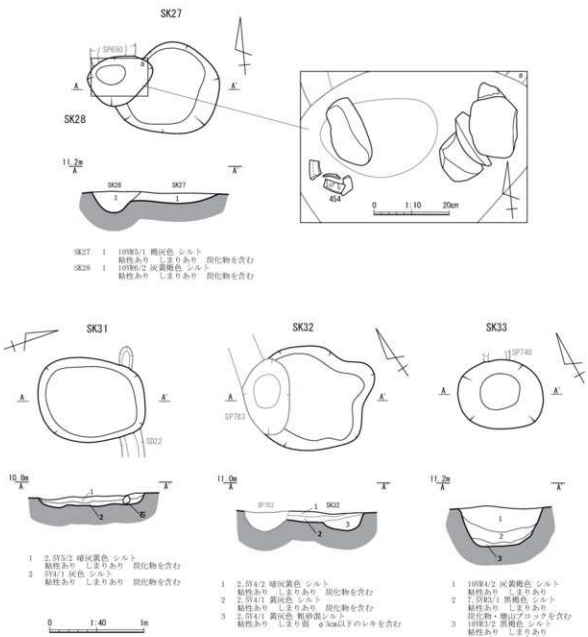


Fig. 59　SK27, SK28, SK31, SK32, SK33 遺構図

454は内耳鍋である。口縁部は「く」の字に外反するく字形口縁で、耳が残存している。耳は口縁部内面に付き、内面体部から外面口縁部まで横ナデ調整。外面体部は刷毛調整が施され、煤が付着している。

SK31（Fig. 59）　F3グリッド北東・F4グリッド北西に位置する。平面形は楕円形で重複関係はSD22を切る。検出規模は長軸1.11 m、短軸0.90 m、深さ0.12 mで、下面は長軸0.94 m、短軸0.74 mである。断面形状は浅く、埋土は暗灰黄色、灰色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器の皿片、鍋釜片の特徴から16世紀代の遺構と考えられる。

SK32（Fig. 59）　F3グリッド北東に位置する土坑である。平面形は楕円形で重複関係は、SP783に西側を切られているため、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸1.11 m、短軸0.90 m、

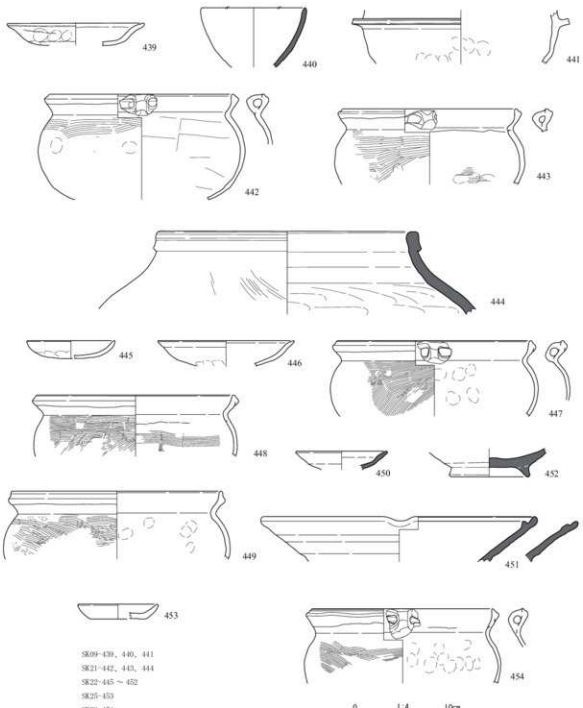


Fig. 60　SK09, SK21, SK22, SK25, SK28 出土遺物実測図

深さ 0.12 mで下面は長軸 0.90 m、短軸 0.40 mである。断面形状は浅く、埋土は暗灰黄色、黄灰色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、口縁部が「く」の字に外反するく字形口縁の内耳鍋が出土していることから 15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺構と考えられる。

SK33(Fig. 59)　E1 グリッド東に位置する土坑である。平面形は楕円形で重複関係は SP740 を切る。検出規模は長軸 0.90 m、短軸 0.73 m、深さ 0.42 mで、下面は長軸 0.41 m、短軸 0.38 mである。断面形状は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色、黒褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無

いが、土師器の甕片が出土している。全体が摩滅して調整等はわからないが口縁部は外反し、口縁に刻みがあるのが確認できる。このことから弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

（4）掘立柱建物（SH）・柱穴列（SA）

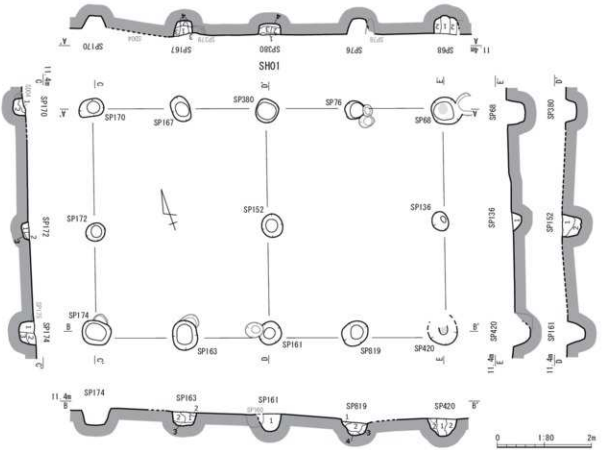
SH01（Fig.61）　C3・C4・D3・D4グリッドに位置する掘立柱建物である。南北2間約4.7m、東西4間約7.4mである。軸はN-18°-Eである。構成する柱穴は13基。SP68・76・136・152・161・163・167・170・172・174・380・420・819で、重複関係はSD04・SD05・SD11を切る。各柱穴の規模は、SP68は長軸0.61m、短軸0.57m、深さ0.38m、柱痕径0.20m。SP76は長軸0.42m、短軸0.40m、深さ0.33m。SP136は長軸0.36m、短軸0.34m、深さ0.19m。SP152は長軸0.49m、短軸0.45m、深さ0.40m。SP161は長軸0.50m、短軸0.46m、深さ0.38m。SP163は長軸0.63m、短軸0.51m、深さ0.29m。SP167は長軸0.56m、短軸0.39m、深さ0.34m、柱痕径0.14m。SP170は長軸0.55m、短軸0.37m、深さ0.26m。SP172は長軸0.42m、短軸0.38m、深さ0.16m、柱痕径0.22m。SP174は長軸0.61m、短軸0.52m、深さ0.36m、柱痕径0.20m。SP380は長軸0.48m、短軸0.46m、深さ0.23m。SP420は長軸0.61m、短軸0.38m、深さ0.37m、柱痕径0.18m。SP819は長軸0.24m、短軸0.23m、深さ0.34mである。出土遺物が極めて少なく、帰属時期を明確にすることはできないが、出土した陶器と古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯1段階のSD04を切っていることから、15世紀後半～16世紀前半の遺構と捉えておきたい。

SH01出土遺物（Fig.69）　遺物は土師器、須恵器、陶器が出土している。図示できたものでは、土師器1点、陶器1点である。455はSP161から出土した土師器の皿である。幟幟成形で外底部が残存しており、糸切痕が確認できる。456はSP380から出土した志戸呂産の擂鉢である。口縁部の一部が残存しているが、擂目のある部分は残存していない。15世紀後半の遺物と考えられる。

SH02（Fig.62）　C1・C2グリッドに位置する掘立柱建物である。南北1間西側約1.5m、東側約1.3m、東西2間約3.5mである。構成する柱穴は6基。SP184・195・242・246・497・500である。各構成Pitの規模は、SP184は長軸0.39m、短軸0.35m、深さ0.40m。SP195は長軸0.39m、短軸0.34m、深さ0.16m。SP242は長軸0.34m、短軸0.28m、深さ0.18m。SP246は長軸0.56m、短軸0.46m、深さ0.36m。SP497は長軸0.37m、短軸0.38m、深さ0.28m、柱痕径0.15m。SP500は長軸0.36m、短軸0.22m、深さ0.36m、柱痕径0.11mである。出土遺物から帰属時期を決めることは困難であるが、SH01と軸が同じであることから、15世紀後半～16世紀前半の遺構と捉えておく。

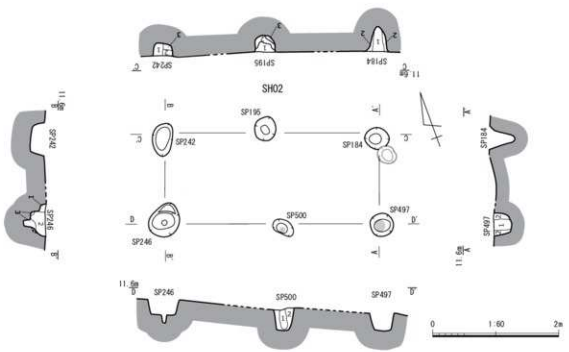
SH02出土遺物（Fig.69）　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは、土師器2点でSP195から出土している。457・458は土師器の皿で、いずれも幟幟成形で外底部が残存しており、糸切痕が確認できる。457は内面の一部が焦げていることから、燈明皿に使用されていた可能性がある。

SH03（Fig.63）　E4グリッドに位置する掘立柱建物。確認できるのは、南北2間約4.3m、東西1間約1.4mである。残りの東西部分は調査区東壁外に続いている。構成する柱穴は4基。SP671・673・678・785である。重複関係はSX01を切る。各柱穴の規模は、SP671は長軸0.62m、短軸0.56m、深さ0.46m、柱痕径0.12m。SP673は長軸0.62m、短軸0.55m、深さ0.52m。SP678は長軸0.40m、短軸0.37m、深さ0.25m。SP785は長軸0.49m、短軸0.46m、深さ0.18m、柱痕径0.16mである。出土遺物は土師器、陶器が出土しているが、図示できたものは無い。SX01を切っていることから、帰属時期は16世紀後半以降と考えられる。



SP68				
1	10YR4/2 灰黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む　柱痕
2	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを斑状に含む
SP76				
1	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	草大のレキを含む
2	2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む
3	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物を含む
SP380				
1	2.5Y5/3 黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	
2	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む
3	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを多く含む
4	2.5Y3/2 黒褐色 シルト	粘性強	しまりあり	
SP167				
1	10YR3/2 黒褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキ・地山ブロックを含む　柱痕
2	10YR3/1 黒褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを多く含む　柱痕
3	10YR3/1 黒褐色 シルトと			
	10YR6/6 明黄褐色 粘性シルトの混淆層	粘性強	しまりあり	
4	2.5Y4/1 黄灰色 細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
SP170				
1	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを多く含む
2	10YR3/3 暗褐色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物を含む
SP174				
1	2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	柱痕
2	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む
3	10YR4/2 灰黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	φ2cm以下のレキを含む
SP163				
1	10YR4/2 灰黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	
2	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む
3	10YR3/2 黒褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む
SP161				
1	5Y4/1 灰色 中砂混シルト	粘性あり	しまりあり	
SP819				
1	10YR4/2灰黄褐色細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	地土ブロック・地山ブロックを少量含む
2	10YR5/4にぶい黄褐色細砂混シルト	粘性あり	しまりあり	2.5Y3/2黒褐色シルトブロックを含む
3	10YR4/1褐灰色シルト	粘性あり	しまりあり	φ3cm以下のレキを含む
4	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを僅かに含む
SP420				
1	2.5Y4/1 黄灰色 シルト	粘性あり	しまりあり	管状凝鉄・炭化物を含む　柱痕
2	2.5Y4/1 黄灰色 シルトと			
	2.5Y7/6 明黄褐色 シルトの混淆層	粘性あり	しまりあり	
SP172				
1	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを含む　柱痕
SP152				
1	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト	粘性あり	しまりあり	地山ブロックを多く含む
2	2.5Y3/1 黒褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	炭化物を含む
SP136				
1	10YR3/1 黒褐色 シルト	粘性あり	しまりあり	

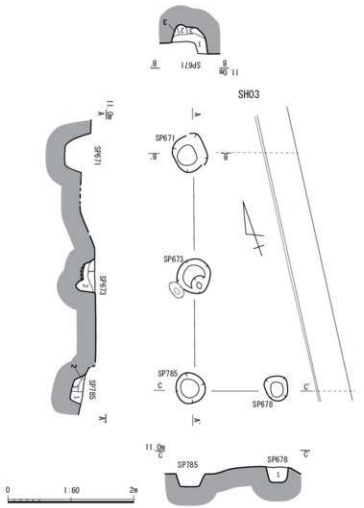
Fig.61　SH01 遺構図



SP184
1　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物・地山ブロックを含む
2　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
SP497
1　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物を含む　柱痕
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
SP242
1　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　柱痕
2　10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
3　10YR3/3 暗褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
SP246
1　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　φ2cm以下のレキ・炭化物・地山ブロックを僅かに含む
2　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　φ5cm以下のレキ・炭化物を僅かに含む
3　10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
SP195
1　10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物・地山ブロックを含む
2　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物・地山ブロックを含む
3　10YR4/6 褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
SP500
1　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物を僅かに含む　柱痕
2　10YR3/4 暗褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを多く含む

Fig.62　SH02 遺構図

SH04（Fig.64） D1・D2・E2 グリッドに位置する掘立柱建物。西側から南北1間、4間、1間、3間、約5.5mで、東西、北列3間約8.5m、南列4間約8.7mである。軸は北列がN-78°-Wで、南列がN-80°-Wである。構成する柱穴は12基。SP569・587・635・638・641・742・743・746・751・752・763・807である。各柱穴の規模は、SP569は長軸0.42m、短軸0.38m、深さ0.20m。SP587は長軸0.52m、短軸0.49m、深さ0.15m。SP635は長軸0.55m、短軸0.54m、深さ0.22m。SP638は長軸0.54m、短軸0.51m、深さ0.33m、柱痕径0.14m、また長軸0.26m、短軸0.17m、厚さ0.05mの石を柱痕の底部で検出した。SP641は長軸0.58m、短軸0.53m、深さ0.16m。SP742は長軸0.54m、短軸0.50m、深さ0.08m、柱痕径0.17m。SP743は長軸0.54m、短軸0.52m、深さ0.27m。SP746は長軸0.54m、短軸0.50m、深さ0.15m、柱痕径0.16m。SP751は長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.18m。SP752は長軸0.71m、短軸0.64m、深さ0.21m、また長軸0.36m、短軸0.17m、厚さ0.08mの石を遺構底部で検出した。SP763は長軸0.64m、短軸0.62m、深さ0.11m、また長軸0.30m、短軸0.21m、厚さ0.08mの石を遺

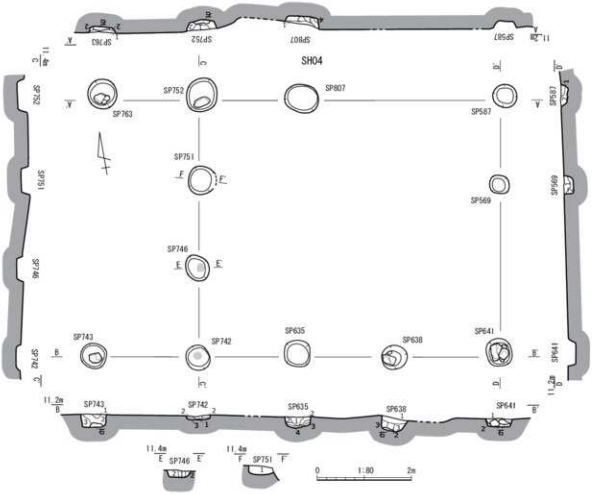


SP671
1　2.5Y3/2　黒褐色　シルト　　粘性あり　しまりあり　φ5cm以下のレキ・炭化物を含む
2　2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト　　粘性強　しまりあり　φ1cm以下のレキを含む　柱痕
3　2.5Y4/1　黄灰色　シルトと
　2.5Y5/4　黄褐色　シルトの混淆層　　粘性あり　しまりあり
SP673
1　10YR5/2　灰黄褐色　シルト　　粘性あり　しまりあり　炭化物を含む
2　10YR4/1　褐灰色　シルト　　粘性あり　しまりあり　炭化物を多く含む
SP686
1　7.5YR5/1　褐灰色　シルト　　粘性あり　しまりあり
SP678
1　10YR4/2　灰黄褐色　シルト　　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
SP785
1　2.5Y4/1　黄灰色　シルト　　粘性あり　しまりあり　炭化物・地山ブロックを含む　柱?
2　2.5Y5/1　黄灰色　シルト　　粘性あり　しまりあり
3　10YR5/1　褐灰色　シルト　　粘性あり　しまりあり　炭化物・地山ブロックを含む

Fig.63　SH03 遺構図

構底部で検出した。SP807 は長軸 0.72 m、短軸 0.62 m、深さ 0.16 mである。出土遺物から古瀬戸後期様式Ⅳ期の遺構と考えられる。

SH04 出土遺物（Fig.69）　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは、土師器２点、陶器１点である。459・460 は土師器の皿で、459 は SP763 から出土し口縁部の一部が残存している。内・外面摩滅により調整痕はわからない。460 は SP752 から出土し輪幅成形で、底部の一部が残存している。外底部には糸切痕が確認できる。461 は SP635 から出土した瀬戸産の陶器の皿で、底部の一部が残存する。口縁部の内・外面に灰釉が施されている。器形の底部の可能性がある。古瀬戸



SP763
1　10YR4/1 褐灰色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物・地土ブロックを含む
2　10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト　粘性あり　しまりあり
SP752
1　10YR4/1 褐灰色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
2　10YR3/2 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
SP807
1　10YR3/2 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
2　10YR4/1 褐灰色 微砂混シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを多く含む
3　10YR2/2 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
4　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
SP587
1　2.5Y4/1 黄灰色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
2　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物・地山ブロックを含む
SP743
1　7.5YR4/1 褐灰色 シルト　粘性あり　しまりあり　焼土ブロックを含む
2　10YR5/1 褐灰色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロック・焼土ブロックを含む
3　10YR3/1 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物を含む
SP742
1　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　焼土ブロックを含む　柱痕
2　10YR4/1 褐灰色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロック・焼土ブロックを含む
3　10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト　粘性あり　しまりあり　10YR4/1褐灰色シルトブロックを含む
SP635
1　10YR4/1 褐灰色 シルト　粘性あり　しまり弱　焼土ブロックを僅かに含む
2　7.5YR3/3 暗褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　焼土ブロックを多く含む
3　10YR3/2 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
4　10YR4/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを多く含む
SP638
1　2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物・地山ブロックを含む
2　2.5Y4/1 黄灰色 シルト　粘性あり　しまりあり　柱痕
3　2.5Y3/2 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを含む
SP641
1　10YR4/1 褐灰色 シルト　粘性あり　しまりあり
2　10YR5/2 灰黄褐色 シルト　粘性あり　しまりあり
SP746
1　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト　粘性あり　しまりあり　φ1cm以下のレキを含む　柱痕
2　10YR3/1 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを多く含む
SP751
1　10YR3/2 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物・地山ブロックを含む
SP569
1　2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト　粘性あり　しまりあり　地山ブロックを多く含む
2　10YR3/1 黒褐色 シルト　粘性あり　しまりあり　炭化物を含む

Fig. 64　SH04 遺構図

後期様式Ⅳ期と考えられる。

SA01（Fig. 65）　B3・C3 グリッドに位置する柱穴列である。間隔は約 1.6 mから約 2.0 mで、全長約 7.5 mである。構成する柱穴は 5 基。SP100・101・102・331・407 で、重複関係は SD04 を切る。各柱穴の規模は、SP100 は長軸 0.70 m、短軸 0.56 m、深さ 0.20 m。SP101 は長軸 0.59 m、短軸 0.46 m、深さ 0.18 m。SP102 は長軸 0.64 m、短軸 0.42 m、深さ 0.28 m。SP331 は長軸 0.68 m、短軸 0.60 m、深さ 0.30 m、また長軸 0.21 m、短軸 0.12 m、厚さ 0.12 m、長軸 0.20 m、短軸 0.14 m、厚さ 0.05 m、長軸 0.19 m、短軸 0.09 m、厚さ 0.16 mの石を 3 つ遺構底部で検出した。407 は長軸 0.63 m、短軸 0.56 m、深さ 0.35 m、柱痕径 0.21 m、また長軸 0.15 m、短軸 0.10 m、厚さ 0.07 m、長軸 0.16 m、短軸 0.14 m、厚さ 0.08 m、長軸 0.16 m、短軸 0.08 m、厚さ 0.09 m、長軸 0.16 m、短軸 0.07 m、厚さ 0.08 mの石を 4 つ遺構底部で検出した。古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯 1 段階の SD04 を切っていることから、帰属時期は 16 世紀前半以降と考えられる。

SA01 出土遺物（Fig. 69）　遺物は土師器、須恵器、銭貨が出土している。図示できたものでは、土師器 1 点、銭貨 1 点である。462 は土師器の皿で SP102 から出土し轆轤成形で、底部の一部が残存している。外底部には糸切痕が確認できる。463 は銭貨片で SP100 から出土し「皇□通□」と読め、渡来銭である。

SA02（Fig. 65）　C2・C3 グリッドに位置する柱穴列である。間隔は約 1.5 mから約 2.0 mで、全長約 5.5 mである。構成する柱穴は 4 基。SP231・234・248・257 である。各柱穴の規模は、SP231 は長軸 0.40 m、短軸 0.35 m、深さ 0.18 m、柱痕径 0.10 m。SP234 は長軸 0.39 m、短軸 0.35 m、深さ 0.19 m。SP248 は長軸 0.38 m、短軸 0.35 m、深さ 0.42 m、柱痕径 0.13 m。SP257 は長軸 0.45 m、短軸 0.42 m、深さ 0.24 m、また長軸 0.19 m、短軸 0.15 m、厚さ 0.06 mの石を遺構底部で検出した。出土遺物が乏しく帰属時期は不明である。

SA02 出土遺物（Fig. 69）　遺物は土師器、須恵器が出土している。図示できたものでは、土師器の皿である。464 ～ 466 は、いずれも SP257 から出土し轆轤成形で、底部の一部が残存している。外底部に糸切痕が確認できる。

SA03（Fig. 66）　B3・B4 グリッドに位置する柱穴列である。間隔は約 3.5 mから約 3.9 mで、全長約 7.3 mである。構成する柱穴は 3 基。SP399・400・401 である。各柱穴の規模は、SP399 は長軸 0.97 m、短軸 0.61 m、深さ 0.48 m。SP400 は長軸 0.71 m、短軸 0.52 m、深さ 0.44 m、また長軸 0.27 m、短軸 0.21 m、厚さ 0.06 mの石を遺構底部で検出した。SP401 は長軸 0.89 m、短軸 0.88 m、深さ 0.98 mである。出土遺物が乏しく帰属時期を決めることは困難であるが、出土遺物の特徴から 15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺構と捉えておく。

SA03 出土遺物（Fig. 69）　遺物は土師器、須恵器が出土している。図示できたものでは、土師器 1 点で 467 は SP399 から出土した茶釜型鍋である。羽周辺の体部と羽の一部が残存している。内面は刷毛調整、口縁部付近から外面体部にかけて指オサエ後ナデ調整がなされている。外面に耳がないタイプと考えられる。図示できなかった遺物の中に口縁部が外反するく字形口縁の内耳鍋がある。15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺物と考えられる。

SA04（Fig. 67）　D2 グリッドに位置する柱穴列である。間隔は約 3.2 mから約 3.4 mで、全長約 6.5 mである。構成する柱穴は 3 基。SP582・754・797 である。各柱穴の大きさは、SP582 は長軸 0.63 m、短軸 0.43 m、深さ 0.14 m、また長軸 0.20 m、短軸 0.14 m、厚さ 0.07 mの石を遺構底部で検出した。SP754 は長軸 0.42 m、短軸 0.38 m、深さ 0.37 m。SP797 は長軸 0.51 m、短軸 0.49 m、深さ 0.20 m、

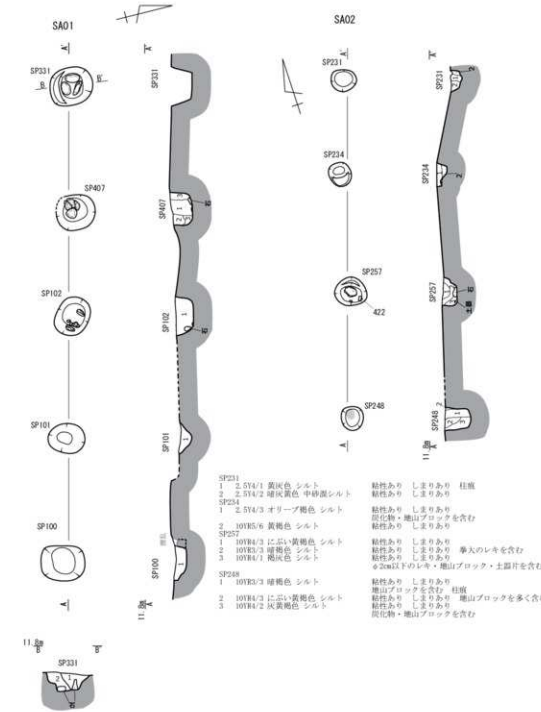


Fig. 65　SA01, SA02 遺構図

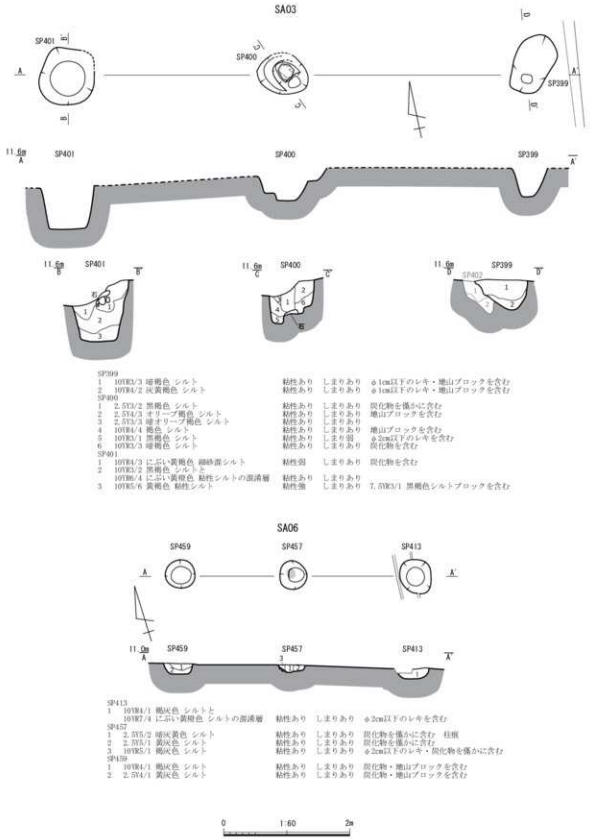


Fig. 66　SA03, SA06 遺構図

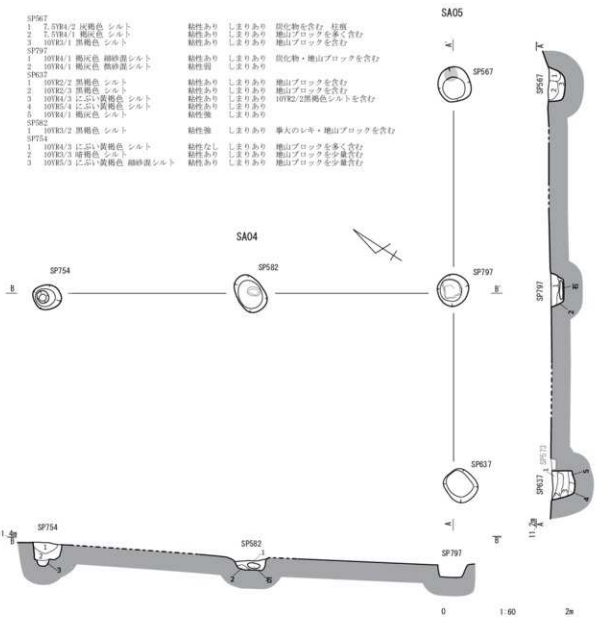


Fig. 67　SA04, SA05 遺構図

また長軸 0.35 m、短軸 0.30 m、厚さ 0.05 m の石を遺構底部で検出した。土師器の皿がわずかに出土しているが、小片のため図示できたものは無く、帰属時期も不明である。

SA05（Fig. 67）　D2・E2 グリッドに位置する柱穴列である。間隔は約 3.2 m、全長約 6.3 m である。構成する柱穴は 3 基。SP567・637・797 である。各柱穴の規模は、SP567 は長軸 0.54 m、短軸 0.51 m、深さ 0.26 m、柱痕径 0.17。SP637 は長軸 0.54 m、短軸 0.46 m、深さ 0.34 m。SP797 は SA04 と共有する。古代の須恵器坏身片が出土したが混入品と考えられる。帰属時期は不明である。

SA06（Fig. 66）　D3・D4・E4 グリッドに位置する柱穴列である。間隔は約 1.8 m から約 2.0 m、全長約 3.8 m である。構成する柱穴は 3 基。SP413・457・459 である。SP413 が調査区東壁にかかっているため、調査区外に延びる可能性がある。各柱穴の規模は、SP413 は長軸 0.59 m、短軸

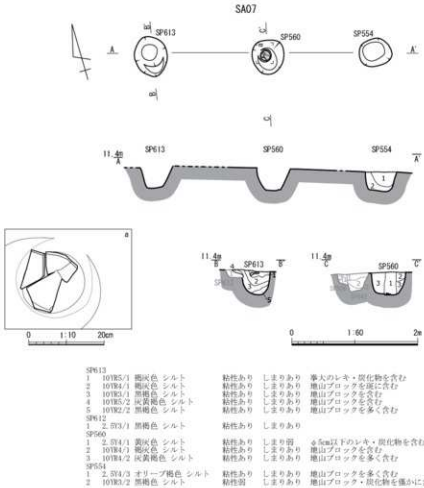


Fig. 68　SA07 遺構図

0.52 m、深さ 0.16 m。SP457 は長軸 0.46 m、短軸 0.43 m、深さ 0.14 m、柱痕径 0.13 m。SP413 は長軸 0.46 m、短軸 0.45 m、深さ 0.16 mである。出土遺物で図示できたものは無いが、出土遺物の特徴から 16 世紀後半～ 17 世紀前半の遺構と考えられる。

SA07（Fig. 68）　D2・D3 グリッドに位置する柱穴列である。間隔は約 1.8 m、全長約 3.6 mである。構成する柱穴は 3 基。SP554・560・613 で、重複関係は SD19 を切る。各柱穴の規模は、SP554 は長軸 0.50 m、短軸 0.45 m、深さ 0.30 m。SP560 は長軸 0.54 m、短軸 0.51 m、深さ 0.36 m、柱痕径 0.18 m。SP613 は長軸 0.64 m、短軸 0.50 m、深さ 0.36 mである。出土遺物から明確な帰属時期を決めることは困難であるが、瓦の特徴等から 17 世紀以降の遺構と捉えておく。

SA07 出土遺物（Fig. 69）　遺物は土師器、陶器、瓦が出土している。図示できたものでは瓦 2 点である。468・469 はともに平瓦で、468 は SP560 から、469 は SP613 から出土している。

（5）性格不明遺構（ＳＸ）

SX01（Fig. 70）　E3・E4 グリッドに位置する性格不明遺構である。重複関係は南側を攪乱の影響をうけ、北側を SH03 を構成する SP785 に切られている。そのため、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸 2.11 m、短軸 1.38 m、深さ 0.17 mである。断面形状は浅く、埋土は褐灰色

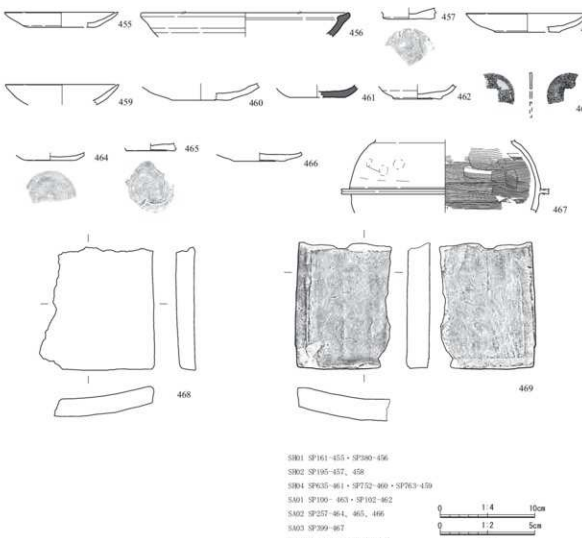


Fig. 69　SH01, SH02, SH04, SA01, SA02, SA03, SA07 出土遺物実測図

シルトである。出土遺物から 16 世紀後半の遺構と考えられる。

SX01 出土遺物（Fig. 71）　遺物は土師器が出土している。図示できたものでは土師器 4 点でいずれも茶釜型鍋である。470 は底部から耳の接合部の一部が残存している。羽から下は煤が付着している。471・472 は同一個体と考えられるが体部片が足りず接合できない。471 は口縁部から耳の下の体部まで、472 は羽の部分から底部まで、それぞれ残存している。羽から下は煤が付着している。473 は羽から下の体部の一部が残存している。16 世紀後半の遺物と考えられる。

SX02（Fig. 70）　D3・D4 グリッドに位置する性格不明遺構である。重複関係は SP484、SP815 を切る。検出規模は長軸 1.09 m、短軸 0.9 m、深さ 0.13 mである。断面形状は浅く、埋土は暗灰黄色シルトである。出土遺物から 16 世紀後半～ 17 世紀前半の遺構と考えられる。

SX02 出土遺物（Fig. 71）　遺物は、土師器が出土している。図示できたものでは、土師器 3 点でいずれも土師器の皿である。474・475・476 は轆轤成形で、外底部には糸切痕が確認できる。

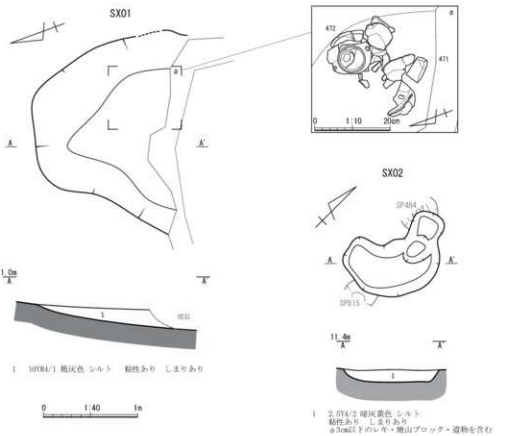


Fig.70　SX01,SX02 遺構図

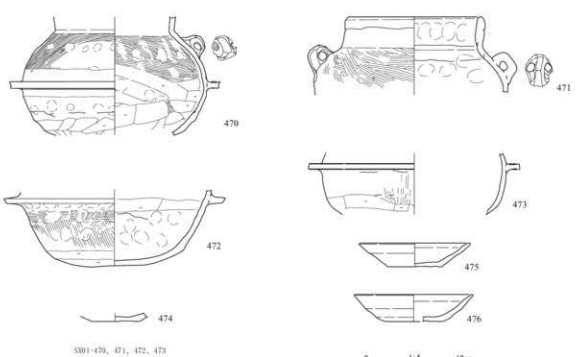


Fig.71　SX01,SX02 遺物実測図

（６）小穴（ＳＰ）

SP21（Fig.72）　B3グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.77ｍ、短軸0.55ｍ、深さ0.33ｍであり、また長軸0.18ｍ、短軸0.11ｍ、厚さ0.04ｍの石を遺構底部で検出した。埋土は黄褐色、暗オリーブ褐色、暗灰黄色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、瀬戸美濃産の陶器片が出土しており、遺物の特徴から16世紀前半の遺構と考えられる。

SP27（Fig.72）　A4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.37ｍ、短軸0.27ｍ、深さ0.22ｍ、柱痕径0.16ｍである。埋土は柱痕が褐灰色シルト、掘方がにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP30（Fig.72）　A4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.42ｍ、短軸0.37ｍ、深さ0.14ｍ、柱痕径0.16ｍである。埋土は柱痕が灰黄褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP50（Fig.73）　B4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.33ｍ、短軸0.32ｍ、深さ0.19ｍ、柱痕径0.11ｍである。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色、褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP62（Fig.73）　C4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.63ｍ、短軸0.54ｍ、深さ0.47ｍであり、また長軸0.24ｍ、短軸0.18ｍ、厚さ0.04ｍ、長軸0.19ｍ、短軸0.09ｍ、厚さ0.03ｍの石２つを遺構底部で検出した。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器の皿片、鍋釜片が出土している。

SP71　C4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.54ｍ、短軸0.34ｍ、深さ0.25ｍ、柱痕径0.15ｍであり、また長軸0.27ｍ、短軸0.24ｍ、厚さ0.13ｍ、長軸0.12ｍ、短軸0.09ｍ、厚さ0.04ｍの石２つを遺構底部で検出した。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方が灰黄褐色シルトである。

SP71出土遺物（Fig.81）　遺物は土師器が出土している。図示できたものは土師器の皿１点である。479は幡幢成形で、外底部には糸切痕が確認できる。

SP80（Fig.73）　C4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.48ｍ、短軸0.42ｍ、深さ0.30ｍであり、また長軸0.17ｍ、短軸0.08ｍ、厚さ0.02ｍ、長軸0.13ｍ、短軸0.07ｍ、厚さ0.04ｍの石２つを遺構底部で検出した。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

SP91（Fig.73）　C3グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.66ｍ、短軸0.60ｍ、深さ0.57ｍである。埋土は柱痕が褐色シルト、掘方は黄褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器片が出土している。

SP94（Fig.73）　B3グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.62ｍ、短軸0.59ｍ、深さ0.30ｍであり、また長軸0.1ｍ、短軸0.06ｍ、厚さ0.02ｍ、長軸0.08ｍ、短軸0.05ｍ、厚さ0.03ｍ、長軸0.07ｍ、短軸0.06ｍ、厚さ0.02ｍ、長軸0.09ｍ、短軸0.06ｍ、厚さ0.03ｍ、長軸0.15ｍ、短軸0.08ｍ、厚さ0.03ｍ、長軸0.18ｍ、短軸0.11ｍ、厚さ0.03ｍ、長軸0.16ｍ、短軸0.09ｍ、厚さ0.03ｍ、長軸0.09ｍ、短軸0.08ｍ、厚さ0.03ｍの石８つを遺構底部から４㎝～５㎝上面で検出した。埋土は黄灰色､暗灰黄色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器の甕片、須恵器の坏蓋片が出土している。

SP107（Fig.73）　C3グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.45ｍ、短軸0.43ｍ、深さ0.3ｍであり、また長軸0.18ｍ、短軸0.13ｍ、厚さ0.03ｍ、長軸0.16ｍ、短軸0.10ｍ、厚さ0.06ｍ、長軸0.17ｍ、短軸0.10ｍ、厚さ0.02ｍの石３つを遺構底部で検出した。埋土はにぶ

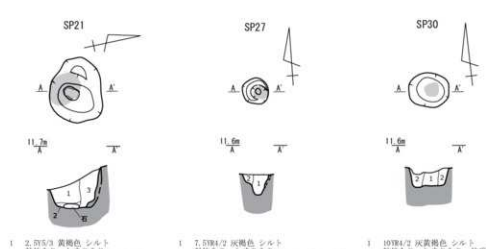


Fig. 72　SP21, SP27, SP30 遺構図

い黄褐色、褐灰色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器の甕片が出土している。

SP110（Fig. 74）　C3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.41 m、短軸 0.38 m、深さ 0.43 m、柱痕径 0.12 mである。埋土は柱痕が黄灰色シルト、掘方が暗灰黄色シルトである。遺物は出土していない。

SP150（Fig. 74）　C3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.46 m、短軸 0.41 m、深さ 0.32 m、柱痕径 0.18 mであり、また長軸 0.16 m、短軸 0.13 m、厚さ 0.02、長軸 0.13 m、短軸 0.08 m、厚さ 0.03 m、長軸 0.13 m、短軸 0.07 m、厚さ 0.02 m、長軸 0.13 m、短軸 0.08 m、厚さ 0.03 m、長軸 0.07 m、短軸 0.06 m、厚さ 0.02 mの石５つを遺構底部で検出した。埋土は柱痕が暗灰黄色シルト、掘方が黒褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器の皿片が出土している。

SP151（Fig. 74）　C3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.38 m、短軸 0.35 m、深さ 0.41 m、柱痕径 0.12 mである。埋土は柱痕が灰黄褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色、黄褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器の皿片が出土している。

SP178（Fig. 74）　C3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.4 m、短軸 0.36 m、深さ 0.3 m、柱痕径 0.16 mであり、また長軸 0.12 m、短軸 0.12 m、厚さ 0.03 mの石を遺構底部で検出した。埋土は柱痕が黄灰色シルト、掘方が暗灰黄色、黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP180（Fig. 74）　C3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.37 m、短軸 0.36 m、深さ 0.41 m、柱痕径 0.12 mである。埋土は柱痕が褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色、黒褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器の皿片が出土している。

SP201（Fig. 74）　C3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.41 m、短軸 0.4 m、深さ 0.52 m、柱痕径 0.16 mである。埋土は柱痕が褐灰色シルト、掘方が灰黄褐色、黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

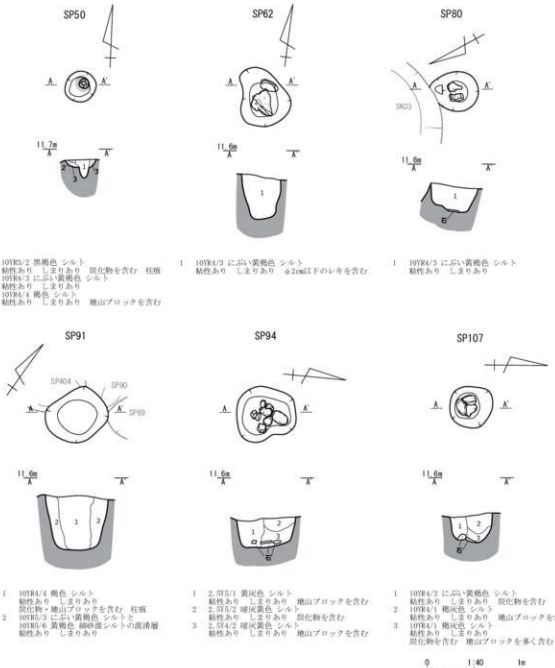


Fig. 73　SP50, SP62, SP80, SP91, SP94, SP107 遺構図

SP217（Fig. 75）　C3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.49 m、短軸 0.44 m、深さ 0.21 mであり、また長軸 0.15 m、短軸 0.16 m、厚さ 0.05 mの石を遺構底部から検出した。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は出土していない。

SP238（Fig. 75）　C2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.4 m、短軸 0.51 m、深さ 0.38 m、柱痕径 0.18 mである。埋土は柱痕がにぶい黄褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色、明黄褐色、黒褐色、黄灰色シルトである。遺物は出土していない。

SP249（Fig. 75）　C2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.69 m、短軸 0.45 m、深さ 0.32 m、柱痕径 0.15 mである。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方が灰黄褐色、暗褐色、灰黄褐

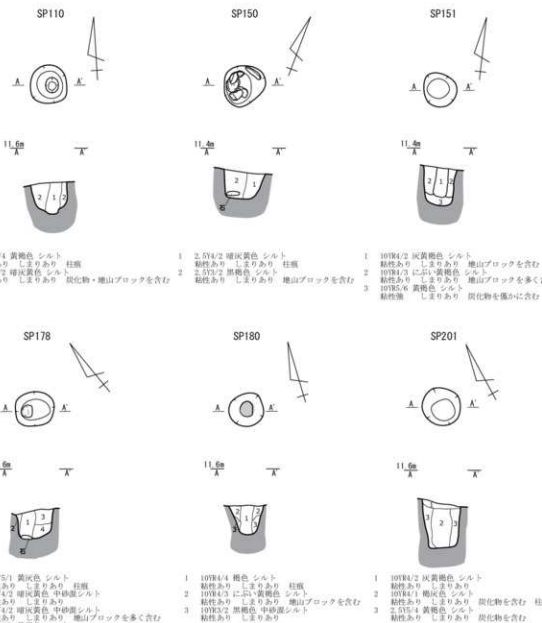


Fig. 74　SP110, SP150, SP151, SP178, SP180, SP201 遺構図

色、暗灰黄色、黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP299　B2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.36 m、短軸 0.30、深さ 0.34 m、柱痕径 0.10 mである。埋土は柱痕がオリーブ褐色シルト、掘方が黒褐色シルトである。出土遺物から古瀬戸後期様式Ⅳ期の遺構と考えられる。

SP299 出土遺物（Fig. 81）　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは土師器 1 点、陶器 1 点である。477 は土師器の皿で手捏ね成形で、口縁部の一部が残存している。488 は瀬戸産の皿で口縁部の一部が残存している。内・外面の口縁部に灰釉が施されている。488 は古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。

SP300（Fig. 75）　B2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.34 m、短軸 0.33、深さ

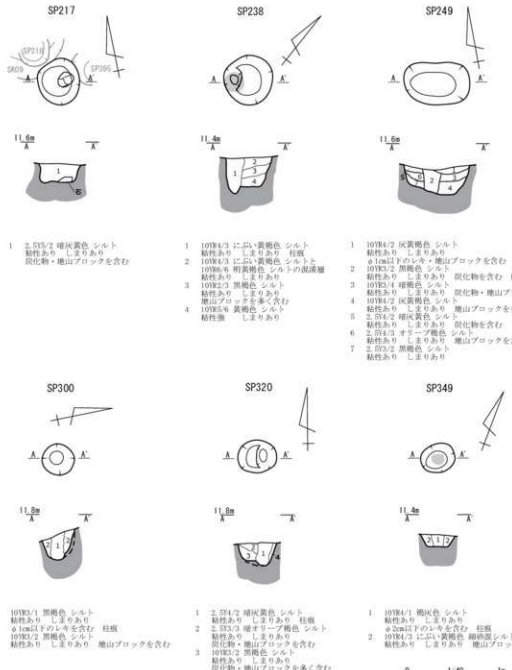


Fig. 75　SP217, SP238, SP249, SP300, SP320, SP349 遺構図

0.33 m、柱痕径0.13 mである。埋土は柱痕、掘方ともに黒褐色シルトであ。が遺物は出土していない。

SP320 (Fig. 75)　B2グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.41 m、短軸0.35 m、深さ0.24 m、柱痕径0.12 mである。埋土は柱痕が暗灰黄色シルト、掘方が暗オリーブ褐色、黒褐色、オリーブ褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、瀬戸産の擂鉢片が出土している。擂鉢自体は古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。

SP346　A4・B4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.22 m、短軸0.20 m、深さ0.29 m、柱痕径0.10 mである。埋土は柱痕、掘方ともに灰黄褐色シルトである。出土遺物から古代の遺構

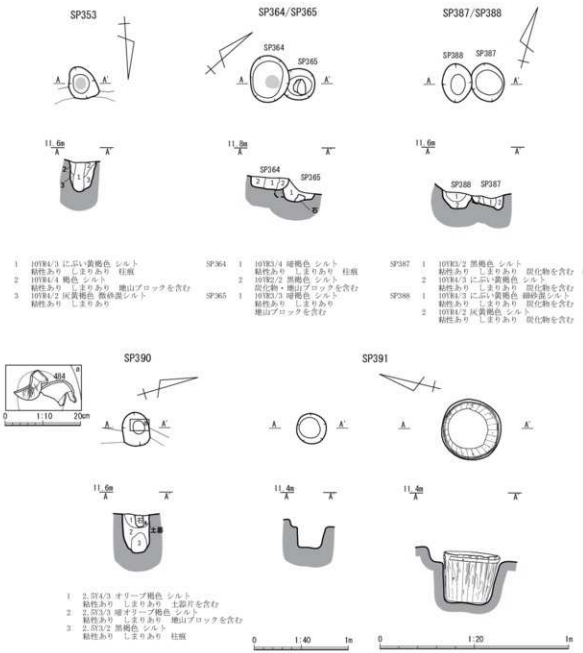


Fig. 76　SP353, SP364/365, SP387/SP388, SP390, SP391 遺構図

と考えられる。

SP346 出土遺物(Fig. 81)　遺物は土師器が出土している。図示できたものでは土師器 1 点である。485 は甕で口縁部の一部が残存している。口縁部の形状から古代と考えられる。

SP349 (Fig. 75)　A4 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.36 m、短軸 0.28 m、深さ 0.14 m、柱痕径 0.11 mである。埋土は柱痕が褐灰色シルト、掘方がにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP353 (Fig. 76)　B4 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.34 m、短軸 0.3 m、深さ 0.31 m、柱痕径 0.10 mである。埋土は柱痕がにぶい黄褐色シルト、掘方が褐色、灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP364（Fig.76）　B2グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.50m、短軸0.41m、深さ0.14m、柱痕径0.14mである。重複関係はSP365を切っている。埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘方が黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP365（Fig.76）　B2グリッドに位置する小穴である。南西側をSP364に切られているため、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸0.33m、短軸0.31m、深さ0.14mであり、また長軸0.15m、短軸0.12m、厚さ0.06mの石を遺構底部から検出した。埋土は暗褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP387（Fig.76）　C4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.41m、短軸0.37m、深さ0.16m、柱痕径0.12mである。重複関係はSP388を切っている。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色シルトである。出土遺物から古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯1段階の遺構と考えられる。

SP387出土遺物（Fig.81）　遺物は陶器が出土している。図示できたものでは陶器1点である。490は瀬戸産の碗で口縁部から体部の一部が残存しており、内・外面に鉄釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯1段階と考えられる。

SP388（Fig.76）　C4グリッドに位置する小穴である。SP387に東側を切られているため、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸0.41m、短軸0.31m、深さ0.21mである。遺物は出土していないが、SP388を切っているSP387が古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯1段階の遺構であるため、それよりも古い遺構と考えられる。

SP390（Fig.76）　C4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.36m、短軸0.28m、深さ0.41m、柱痕径0.13mである。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方がオリーブ褐色、暗オリーブ褐色シルトである。出土遺物から15世紀後半～16世紀前半の遺構と考えられる。

SP390出土遺物(Fig.81)　遺物は土師器が出土している。図示できたものでは土師器1点である。484は内耳鍋で口縁部は「く」の字に外反するく字形口縁で、耳は残存していない。口縁部から体部の一部が残存しており、内面体部から外面口縁部まで横ナデ調整、外面体部は刷毛調整がされている。

SP391（Fig.76）　C4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.32m、短軸0.31m、深さ0.21mである。埋土は黄褐色シルトである。桶が埋設されており、桶は高さ約0.26m、径約0.29mで側板26枚からなる。底板は検出されなかった。

SP391出土遺物（Fig.81）　496・497は埋設されていた桶の側板である。側板1枚の大きさは縦約26cm、巾上端約3.5cm、巾下端約2.8cm　厚約1.1cmである。

SP410（Fig.77）　C3グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.38m、短軸0.34m、深さ0.40m、柱痕径0.11mである。埋土は柱痕がにぶい黄褐色シルト、掘方がオリーブ褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器の鍋釜片が出土している。

SP422（Fig.77）　D4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.25m、短軸0.20m、深さ0.25m、柱痕径0.08mである。埋土は柱痕が灰黄褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色、褐灰色シルトである。遺物は出土していない。

SP424（Fig.77）　D4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.22m、柱痕径0.16mである。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP428（Fig.77）　D4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.41m、短軸0.35m、深

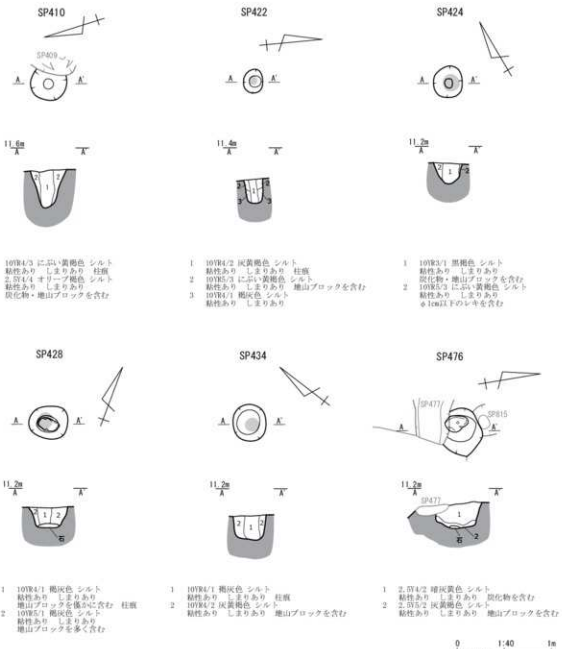


Fig. 77　SP410, SP422, SP424, SP428, SP434, SP476 遺構図

さ 0.21 m、柱痕径 0.12 mであり、また長軸 0.23 m、短軸 0.12 m、厚さ 0.04 mの石を遺構底部から検出した。埋土は柱痕、掘方ともに褐灰色シルトである。遺物は出土していない。

SP434（Fig. 77）　D4 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.39 m、短軸 0.34 m、深さ 0.25 m、柱痕径 0.15 mである。埋土は柱痕が褐灰色シルト、掘方が灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP476（Fig. 77）　D3・D4 グリッドに位置する小穴である。SP447 に南側を切られ、東側は攪乱の影響を受けているため、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸 0.50 m、短軸 0.35 m、深さ 0.25 mであり、また長軸 0.24 m、短軸 0.15 m、厚さ 0.02 mの石を遺構底部から検出した。埋土は暗灰黄色、灰黄褐色シルトである。出土遺物から古瀬戸後期様式Ⅳ期の遺構と考えられる。

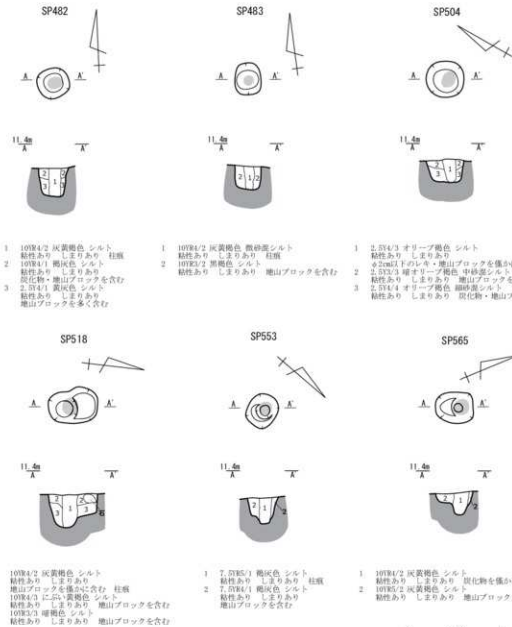


Fig. 78　SP482, SP483, SP504, SP518, SP553, SP565 遺構図

SP476 出土遺物（Fig. 81）　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは陶器１点である。486 は瀬戸産の皿で口縁部の一部が残存している。内・外面に灰釉が施されている。古瀬戸後期様式Ⅳ期と考えられる。

SP482（Fig. 78）　D3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.34 m、短軸 0.32 m、深さ 0.3 m、柱痕径 0.13 mである。埋土は柱痕が灰黄褐色シルト、掘方が褐灰色、黄灰色シルトである。遺物は出土していない。

SP483（Fig. 78）　D3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.34 m、短軸 0.28 m、深さ 0.26 m、柱痕径 0.1 mである。埋土は柱痕が灰黄褐色シルト、掘方が黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP504（Fig. 78）　D3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.40 m、短軸 0.38 m、深さ 0.24 m、柱痕径 0.12 mである。埋土は柱痕がオリーブ褐色シルト、掘方が暗オリーブ褐色、オリーブ褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP516　D3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.27 m、短軸 0.27 m、深さ 0.42 m、柱痕径 0.10 mである。埋土は柱痕がにぶい黄褐色シルト、掘方が灰黄褐色シルトである。

SP516 出土遺物（Fig. 81）　遺物は土師器、陶器が出土してる。図示できたものでは土師器 1 点である。482 は土師器の皿で、底部の一部が残存し、外底部に糸切痕が確認できる。

SP518（Fig. 78）　D3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.52 m、短軸 0.33 m、深さ 0.34 m、柱痕径 0.16 mである埋土は柱痕が灰黄褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色、暗褐色シルトである。

SP518 出土遺物（Fig. 81）　遺物は土師器、須恵器が出土してる。図示できたものでは土師器 1 点、須恵器 1 点である。478 は土師器の皿で手捏ね成形、口縁部の一部が残存している。495 は須恵器の坏身の底部の一部が残存している。須恵器は古代と考えられる。

SP547　D3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.33 m、短軸 0.3 m、深さ 0.28 m、柱痕径 0.13 mである。埋土は柱痕が褐灰色シルト、掘方が灰黄褐色シルトである。

SP547 出土遺物（Fig. 81）　遺物は土師器、陶器が出土してる。図示できたものでは土師器 1 点である。480 は土師器の皿で、底部の一部が残存し、外底部に糸切痕が確認できる。

SP553（Fig. 78）　D3 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.36 m、短軸 0.31 m、深さ 0.28 m、柱痕径 0.12 mである。埋土は柱痕、掘方ともに褐灰色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、須恵器の坏身片が出土している。

SP565（Fig. 78）　D2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.4 m、短軸 0.33 m、深さ 0.24 m、柱痕径 0.16 mである。埋土は柱痕、掘方ともに灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP594（Fig. 79）　D2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.41 m、短軸 0.38 m、深さ 0.21 m、柱痕径 0.12 mである。埋土は柱痕が黄灰色シルト、掘方が暗灰黄色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、陶器片が出土している。

SP601　D2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.4 m、短軸 0.34 m、深さ 0.31 m、柱痕径 0.14 mである。埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘方が灰黄褐色、黄灰色シルトである。

SP601 出土遺物（Fig. 81）　遺物は須恵器が出土している。図示できたものでは須恵器 1 点である。493 は鉢で口縁部の一部が残存している。

SP626（Fig. 79）　D2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.45 m、短軸 0.4 m、深さ 0.44 m、柱痕径 0.16 mであり、また長軸 0.20 m、短軸 0.08 m、厚さ 0.06 m、長軸 0.23 m、短軸 0.08 m、厚さ 0.1 m、長軸 0.21 m、短軸 0.11 m、厚さ 0.05 mの石 3 つを遺構底部から検出した。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方が灰黄褐色、黒褐色、褐灰色シルトである。

SP626 出土遺物（Fig. 81）　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは陶器 1 点である。489 は皿で口縁部の一部が残存し内・外面に長石釉が施されている。瀬戸産や美濃産ではなく、志戸呂産と考えられる。釉薬の状況から 16 世紀以降と考えられる。

SP634（Fig. 79）　E2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.38 m、短軸 0.34 m、深さ 0.2 m、柱痕径 0.14 mである。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方が褐灰色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、遺物は土師器片が出土している。

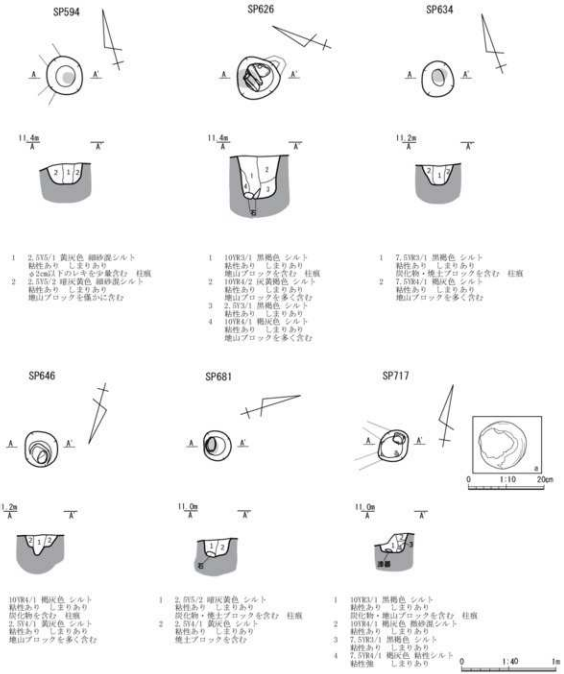


Fig. 79　SP594, SP626, SP634, SP646, SP681, SP717 遺構図

SP646（Fig. 79）　E2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.39 m、短軸 0.37 m、深さ 0.21 m、柱痕径 0.1 m である。埋土は柱痕が褐灰色シルト、掘方が黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP654　E3 グリッドに位置する小穴である。重複関係は SP791 を切る。検出規模は長軸 0.62 m、短軸 0.4 m、深さ 0.2 m であり、また長軸 0.23 m、短軸 0.17 m、厚さ 0.09 m の石を遺構底部から検出した。埋土は暗灰黄色シルトである。出土遺物から瀬戸大窯３段階の遺構と考えられる。

SP654 出土遺物（Fig. 81）　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは陶器１点である。491 は瀬戸産の碗で口縁部から体部の一部が残存し、内・外面に鉄釉が施されている。瀬

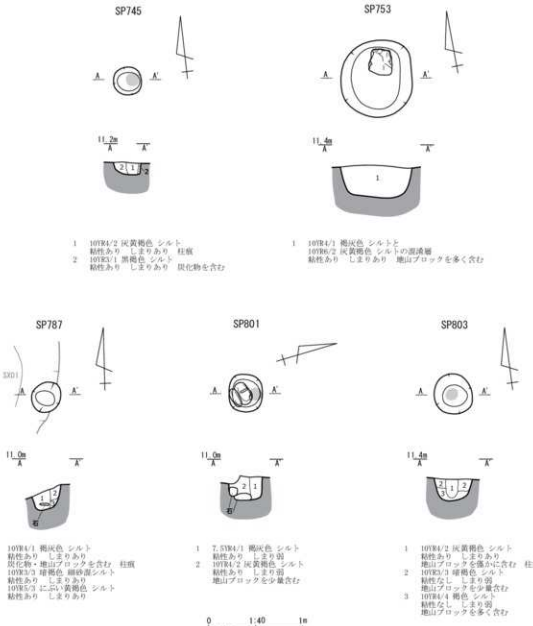


Fig. 80　SP745, SP753, SP787, SP801, SP803 遺構図

戸大窯3段階と考えられる。

SP681（Fig. 79）　E4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.32 m、短軸0.28 m、深さ0.18 m、柱痕径0.11 mであり、また長軸0.14 m、短軸0.09 m、厚さ0.04 mの石を遺構底部から検出した。埋土は柱痕が暗灰黄色シルト、掘方が黄灰色シルトである。遺物は出土していない。

SP717（Fig. 79）　F2グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.33 m、短軸0.3 m、深さ0.19 m、柱痕径0.18 mである。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方が褐灰色、黒褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、漆器が出土している。

SP722　E2・F2グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.56 m、短軸0.54 m、深さ0.2 m、柱痕径0.18 mである。埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方が灰黄褐色シルトである。

SP722 出土遺物（Fig. 81）　遺物は貿易陶磁器が出土している。図示できたものでは青磁1点で

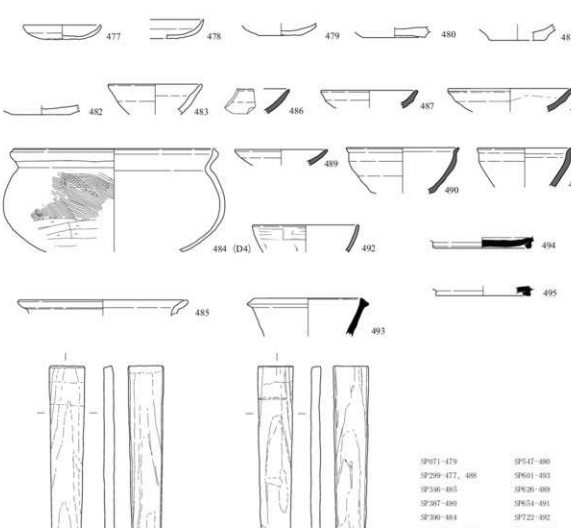


Fig.81　遺構 SP 出土遺物実測図

ある。492 は龍泉窯系の青磁の碗で、口縁部から体部の一部が残存している。外面に雷文帯が施されている。

SP745（Fig.79）　F2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.3 m、短軸 0.3 m、深さ 0.12 m、柱痕径 0.14 mである。埋土は柱痕が灰黄褐色シルト、掘方が黒褐色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、無施釉の擂鉢片が出土している。

SP753（Fig.80）　D2 グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸 0.82 m、短軸 0.75 m、深さ 0.34 mであり、また長軸 0.33 m、短軸 0.20 m、厚さ 0.07 mの石を遺構底部から検出した。埋土は褐灰色、灰黄褐色シルトが混じる。

SP753 出土遺物（Fig.81）　遺物は土師器、須恵器、陶器が出土している。図示できたものでは須恵器 1 点である。495 は古代の坏身で底部の一部が残存している。

SP760　D1・D2グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.50 m、短軸0.50 m、深さ0.14 m、柱痕径0.18 mである。埋土は柱痕、掘方ともに灰黄褐色シルトである。

SP760 出土遺物(Fig.81)　遺物は土師器が出土している。図示できたものでは土師器1点である。483は皿で口縁部から体部の一部が残存している。内・外面が摩滅しており成形は不明である。

SP787 (Fig.80)　E4グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.34 m、短軸0.3 m、深さ0.27 m、柱痕径0.15 mである。埋土は柱痕が褐灰色シルト、掘方が暗褐色、にぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SP791　E3グリッドに位置する小穴である。重複関係は南側をSP654に切られているため、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸0.52 m、短軸0.27 m、深さ0.37 m、柱痕径0.11 mである。埋土は柱痕が暗灰黄色シルト、褐灰色、黄灰色、黄褐色シルトである。

SP791 出土遺物 (Fig.81)　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは土師器1点である。481は皿で底部の一部が残存している。輪積成形で外底部に糸切痕が確認できる。

SP799　D3グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.46 m、短軸0.42 m、深さ0.25 m、柱痕径0.14 mである。埋土は柱痕が黄灰色、灰黄褐色シルト、掘方がにぶい黄褐色シルトである。出土遺物から瀬戸大窯3段階の遺構と考えられる。

SP799 出土遺物 (Fig.81)　遺物は土師器、陶器が出土している。図示できたものでは陶器1点である。487は瀬戸産の皿で口縁部の一部が残存している。内・外面に灰釉が施されている。瀬戸大窯3段階と考えられる。

SP801 (Fig.80)　D3グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.4 m、短軸0.35 m、深さ0.24 m、柱痕径0.13 mである。また長軸0.20 m、短軸0.09 m、厚さ0.09 m、長軸0.24 m、短軸0.14 m、厚さ0.07 mの石2つを遺構底部から検出した。埋土は柱痕が褐灰色シルト、掘方が灰黄褐色である。遺物は出土していない。

SP803 (Fig.80)　D2グリッドに位置する小穴である。検出規模は長軸0.42 m、短軸0.4 m、深さ0.22 m、柱痕径0.14 mである。埋土は柱痕が灰黄褐色シルト、掘方が暗褐色、褐色シルトである。遺物は土師器の皿片が出土している。

3　小　結

今回の調査は浜松城三の丸北西部に相当する箇所で行なわれた。三の丸南西部で行なわれた33次調査成果では、その整備時期がおおむね16世紀後葉から17世紀中葉までの期間に収まる事、また、柱列跡が2列確認されたことにより、絵図における「侍」「屋舗地」にあたる建造物の存在が示唆された。

今回の調査では、浜松城あるいはその前身となる引間城に伴う遺構・遺物が確認された。出土遺物は15世紀から16世紀にかけての土師器と陶器を中心に確認されたが、8世紀代の須恵器も一定量確認されたことから、古代から中世に至るまでの土地利用の可能性が提示された。主な遺構として堀・溝（SD01～04）、井戸（SE01～03）、建物（SH01～04）があげられる。その内調査区北東に位置する堀SD01および井戸SE01を除くほぼ全ての遺構が、近世以前に遡る可能性を提示した。また17世紀後半の絵図と照会したところ、SD01と思しき堀は確認され、一方で南北に伸びるSD02に相当する堀は描かれていないことを踏まえても、浜松城に伴う遺構と引間城および更にそれを遡る時代に属する遺構を段階を追って把握することが可能と考える。

第３章　39 次調査成果

１　概　要

（１）調査の概要

調査区の位置　27 次調査（以下、既往調査と呼称）に隣接し、調査面積は約 110 ㎡（東西長約 22 ｍ×南北幅約５ｍ）である。

検出遺構　検出遺構は 27 基で、溝（SD）３条、小穴（SP）24 基、瓦敷遺構（SX）１基である。このうち小穴（SP）については、根固め石・遺物が出土しているもののみ本報告書に掲載している（Fig. 82）。出土遺物・埋土から中世後期～近世と考えられる遺構を同一面で検出した。

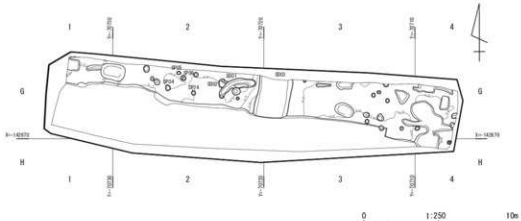


Fig.82　39 次調査区全体図

（２）周辺の地形と基本層序

調査区周辺の地形　現況地形は、西側から東側へ緩やかに傾斜している。

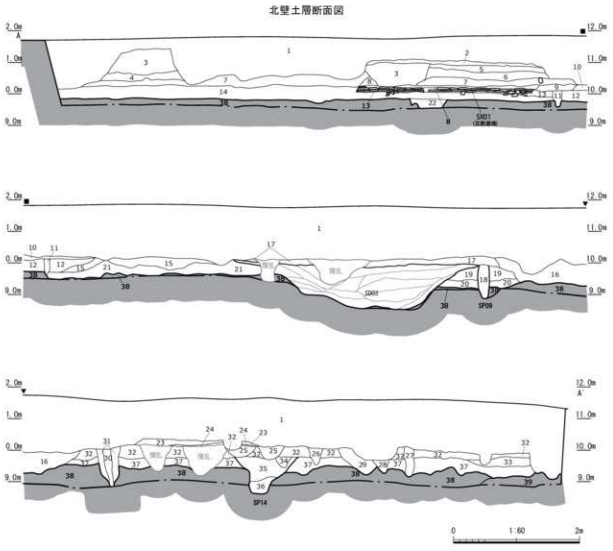
基本層序　既往調査から、近現代の攪乱層が大部分に及んでいることが予想されたが、北側半分は近世以前の遺構面がかろうじて遺存している状態であった。なお重機による掘削深度は表土面より約 1.0 ｍである。

２　検出遺構と出土遺物

（１）溝（ＳＤ）

SD01（Fig.84）　G2 グリッドに位置する南西から東に湾曲する溝である。重複関係は SD02 を切る。規模は長軸 2.6 ｍ、幅 0.5 ｍ、深さ 0.2 ｍである。軸は N-10° -E である。断面形状は二段形を呈すが、浅い。埋土は黒褐色、黄橙色シルトである。出土遺物から 15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺構と考えられる。

SD01 出土遺物（Fig.85）　遺物は土師器、金属製品が出土している。図示できたものでは土師器３点、金属製品１点である。498 ～ 500 は口縁部が「く」の字に外反するく字形口縁の内耳鍋で、



1	近現代整地土			巨礫混じる
2	10YR2/1 黒色 粘質土			地土層　近現代期
3	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土			整地土
4	10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト～微砂混じる	粘性なし	しまりあり	
5	10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂			円礫多く含む
6	10YR5/1 褐灰色 粘質シルト微砂混じる	粘性弱	しまりあり	
7	10YR4/1 褐灰色 微砂			遺物含む
8	10YR5/6 明黄褐色 粘質シルト	粘性弱	しまりあり	
9	10YR2/3 黒褐色 粘質シルト微砂混じる	粘性強	しまりあり	
10	7.5YR5/6 明褐色 微砂			
11	10YR/1 灰白色 細砂	粘性なし	しまりなし	
12	10YR3/2 黒褐色 粘質シルト微砂混じる	粘性強	しまりあり	
13	7.5YR6/1 褐灰色 粘質シルト	粘性強	しまりあり	
14	10YR6/2 灰黄褐色 細砂			円礫多く含む
15	7.5YR4/1 褐灰色 細砂	粘性弱	しまり弱	
16	10YR3/4 暗褐色 粘質シルト	粘性弱	しまりあり	円礫混じる遺物含む
17	10YR4/1 褐灰色 粘質シルト	粘性強	しまりあり	炭化層
18	7.5YR2/2 黒褐色 粘質シルト	粘性強	しまりあり	(SP14埋土)
19	10YR3/4 暗褐色 粘質シルト	粘性強	しまりあり	遺物含む
20	10YR2/2 黒褐色 粘質シルト	粘性強	しまりあり	地山ブロック含む　(SP9埋土)
21	7.5YR4/2 灰褐色 細砂	粘性弱	しまり弱	
22	10YR4/1 褐灰色 粘土			瓦整き・平瓦・軒平瓦含む
23	7.5YR5/8 明褐色 細砂	粘性弱	しまりなし	遺物含む
24	7.5YR4/1 褐灰色 粘質シルト微砂混じる	粘性強	しまりあり	
25	10YR4/4 褐色 粘質シルト	粘性強	しまりあり	
26	2.5Y6/8 明黄褐色 微砂～細砂	粘性弱	しまりあり	
27	2.5Y6/8 明黄褐色 微砂	粘性強	しまりあり	
28	10YR6/1 褐灰色 微砂	粘性強	しまりあり	
29	5Y5/2 オリーブ黒色 粘質シルト	粘性弱	しまりあり	10mm大の礫含む
30	7.5YR2/3 極暗褐色 細砂	粘性弱	しまり弱	
31	7.5YR3/1 黒褐色 細砂	粘性弱	しまり弱	
32	7.5YR3/2 黒褐色 細砂	粘性弱	しまり弱	
33	2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト	粘性強	しまりあり	遺物含む
34	10YR7/6 明黄褐色 粘質微砂	粘性なし	しまりなし	
35	7.5YR2/2 黒褐色 細砂	粘性弱	しまり弱	
36	7.5YR2/1 黒色 粘質シルト	粘性強	しまりあり	
37	7.5YR2/2 黒褐色 粘質シルト	粘性あり	しまりあり	
38	10YR5/8 黄褐色 粘質シルト微砂混じる	粘性弱	しまりあり	(地山層)
39	10YR7/8 黄褐色 粘質シルト	粘性弱	しまりなし	円礫を多く含む　(地山層)

Fig.83　北壁土層断面図

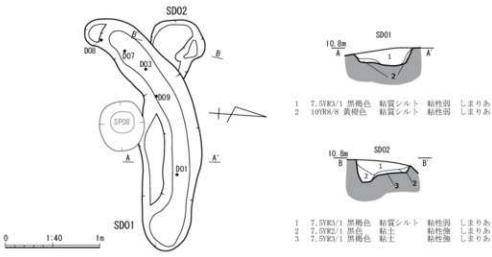


Fig. 84　SD01, SD02 遺構図

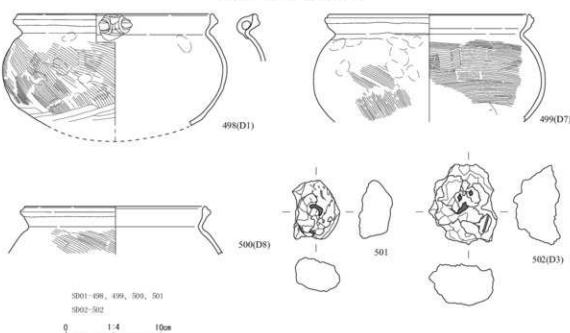


Fig. 85　SD01, SD02 出土遺物実測図

498 は半球形の体部で底部は欠損する。体部の外面調整は下方ヘラ削り、上方刷毛を施し煤が付着する。499・500 はともに体部の内外面は刷毛調整を施す。体部外面が煤の付着がしている。501 は鉄滓である。色調は暗褐色で気泡が観察される。重量 103.2g である。

SD02 (Fig. 84)　G2 グリッドに位置する溝である。重複関係は SD01 に切られており、本来の規模は不明であるが、確認した規模は長軸 0.5 m、短軸 0.5 m、深さ 0.2 mである。軸は N-88° -W である。断面形状はは二段形を呈するが、浅い。埋土は黒褐色シルト、黒色、黒褐色粘土である。15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺構と考えられる SD01 に切られていることから、15 世紀後半以前の遺構と捉えられる。

SD02 出土遺物 (Fig. 85)　遺物は須恵器、金属製品が出土している。図示できたものは金属製品 1 点である。502 は鉄滓で黒褐色、暗褐色で気泡が観察される。重量は 238.0g である。

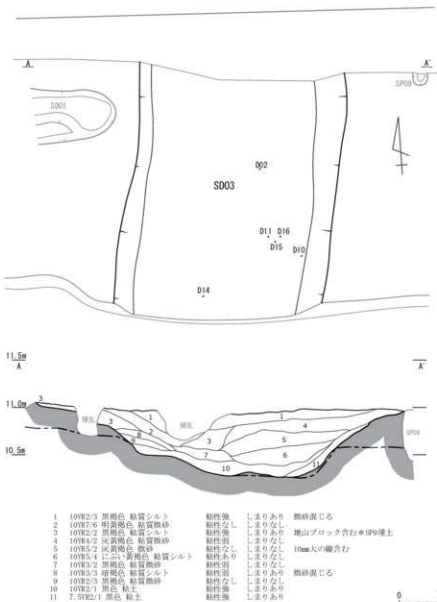


Fig. 86　SD03 遺構図

SD03 (Fig. 86)　G3 グリッドに位置する南北方向に延びる溝である。南側は攪乱の影響を受けており、北側は調査区外へと延びているが、27 次調査における溝 (SD04) の南延長構であると考えられる。本調査区にて確認した規模は長軸 2.6 m、短軸 2.1 m、深さ 0.7 mである。軸は N-8° -E である。溝の断面形状は緩やかな肩を持ち、27 次調査で見られた障子堀りは確認できなかった。埋土は灰黄色系、黒褐色系シルト、粘土である。出土遺物と 27 次調査の SD04 を踏まえて、古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯 1 段階の遺構と考えられる。

SD03 出土遺物 (Fig. 87)　遺物は土師器、磁器、木製品が出土している。図示できたものでは土師器 5 点、陶器 2 点、木製品 5 点である。503・504 は志戸呂産の擂鉢である。体部内面には擂目の痕跡がわずかに残る。505 は土師器の皿である。手捏ね成形で、底部は指オサエ痕が施され、内面には煤が付着する。506・507 は口縁部が「く」の字に外反するく字形口縁の内耳鍋で、506 は上

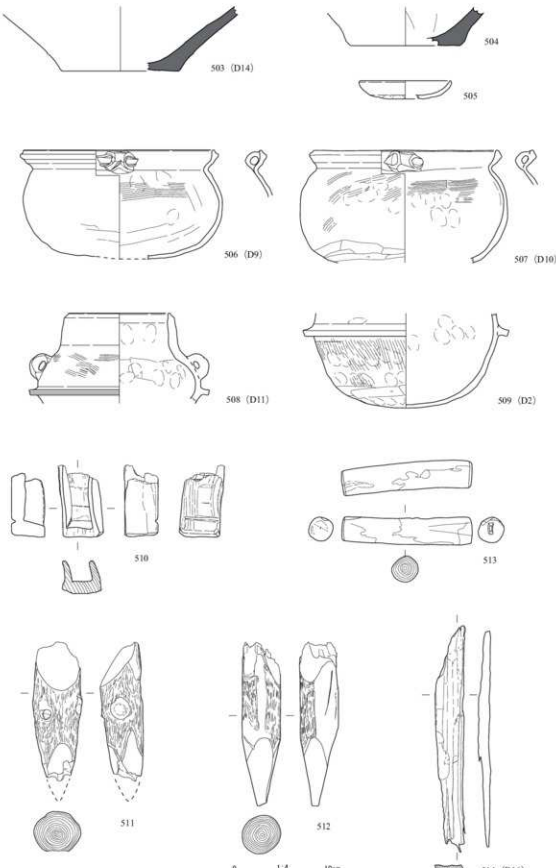


Fig. 87　SD03 出土遺物実測図

端をナデ調整にて丸く仕上げる。体部外面上方はナデ調整を施す。507は上端をナデ調整にて丸く仕上げる。体部外面は上方を刷毛と指ナデ、下方をヘラ削りで調整している。口縁部は、ヨコナデ調整を施し底部は丸底を呈する。外面は煤が付着する。508・509は茶釜形羽釜である。508は体部は撫で肩で、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。外耳は粘土紐を縦に貼り付けし、孔を貫通させる。上面は刷毛調整、体部内面は指オサエを施す。509は体部最大径に羽があり、下方は指オサエ後、指ナデで煤が付着する。上方は刷毛調整を施す。510は用途不明の容器である。長さ7.6㎝、幅4.3㎝、高さ3.5㎝を測る。511・512は丸杭である。511は長さ14.7㎝、直径5.75㎝を測る。先端に4面の加工痕が残る。512は長さ17.3㎝、直径4.05㎝を測る。先端部分に4面の加工痕が残る。513は棒状製品である。長さ13.8㎝、直径2.95㎝を測る。両端を加工しており把手の可能性がある。514は用途不明の木製品で長さ24.0㎝、厚さ1.4㎝、幅3.05㎝を測る。3面に加工痕が残る。

（2）小穴（ＳＰ）

SP04(Fig.88)　G2グリッドに位置する柱穴である。検出規模は長軸0.40ｍ、短軸0.30ｍ、深さ0.22ｍであり、また長軸0.16ｍ、短軸0.04ｍ、長軸0.6ｍ、短軸0.5ｍの石２つを遺構底部から検出した。埋土は黒褐色、黄橙色シルトである。出土遺物で図示できたものは無いが、土師器片が出土している。

SP05(Fig.88)　G2グリッドに位置する柱穴である。検出規模は長軸0.26ｍ、短軸0.22ｍ、深さ0.12ｍであり、また長軸0.16ｍ、短軸0.08ｍの石を遺構底部から検出した。埋土は黒褐色、黄橙色シルトである。遺物は出土していない。

SP06(Fig.88)　G2グリッドに位置する柱穴である。検出規模は長軸0.34ｍ、短軸0.32ｍ、深さ0.21ｍである。埋土は黒褐色、黄橙色シルトである。出土遺物では柱根状の木材が検出されたが、遺存状況が悪く取り上げていない

SP24(Fig.88)　G2グリッドの南に位置する柱穴である。検出規模は長軸0.32ｍ、短軸0.28ｍ、深さ0.12ｍであり、また長軸0.08ｍ、短軸0.07ｍ、厚さ0.03ｍの石を遺構底部から検出した。埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

（3）その他

SX01（Fig.83）　北壁断面西端より4.8ｍ東方、表土面より0.8ｍ下層で、長さ2.7ｍ、層厚0.6ｍの瓦敷が検出された。瓦は主に平瓦で２重構造となっており、一部に円礫を詰めていた。塀瓦が混入されていたことから、土塀（練塀）が存在した可能性も考えられる。帰属時期は塀瓦が含まれることから、18世紀以降と捉えられる。

SX01 出土遺物（Fig.89 ～ 92）　遺物は瓦類が出土している。図示できたものでは軒平瓦１点、丸瓦２点、塀瓦１点、平瓦22点である。515は軒平瓦である。瓦当面文様は唐草文であるが欠損している。顎貼り付け技法である。516は塀瓦である。幅3.3㎝の粘土貼り付け痕が観察される。517・518は丸瓦である。517は玉縁瓦で凹面調整にコビキA技法が施され、518は行基瓦で凹面調整に吊り紐圧痕が施される。519 ～ 534は平瓦である。側面・広端面・狭端面は一面成形、凸面調整は縦ナデ、凹面調整はコビキAを横ナデし、凹面狭端面側に面取りを施している。一部に釘孔が残るものもある。

遺構外出土遺物（Fig.92・93）　535は平瓦である。摩耗が激しく調整は観察できない。536は瀬

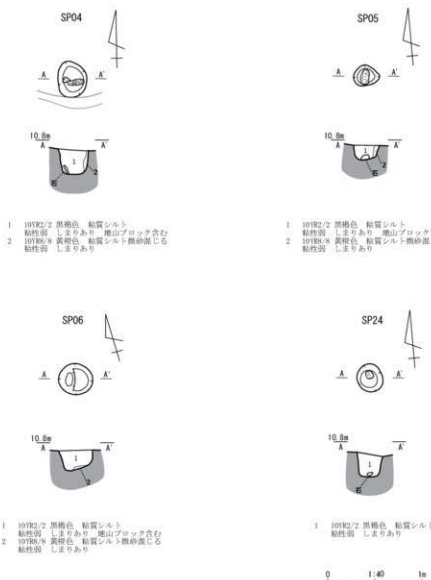


Fig. 88　SP04, SP05, SP06, SP24 遺構図

戸産の擂鉢である。時期は19世紀末以降である。537は染付の皿で凹型蛇の目高台である。見込みにはプリントで風景文が描かれる。538は青磁碗である。龍泉窯系で外面には線刻細連弁文（剣先文）が施されている。539は染付の碗で高台径3.0 cmを測る。537と同様、柄はプリントである。内外面ともに透明釉を施し畳付は露胎である。540は土師器の皿の底部で、糸切痕が観察される。541は陶器の中瓶である。底径12.1 cmを測る。542は土師器の鍋釜の底部である。外面に煤が付着する。底部～体部のみ残存する。543は須恵器甕で、体部外面にタタキ目調整が若干残る。544は土師器の皿である。内外面ともにナデ調整が施される。545は陶器の皿底部である。時期は瀬戸産の瀬戸大窯4期後半である。546は鉢で内外面ともに施釉が施されている。547は丸瓦である。内外面ともに摩耗が激しい。548は土師器甕の口縁部である。内外面ともにナデ調整を施す。549は施釉陶器の壺口縁部である。550は染付皿である。537・539と同様、柄はプリントである。外面に圏線と草花文を施す。551は掛け分け仏花瓶で器高9.4 cmを測る。底部は回転糸切痕が残る。552

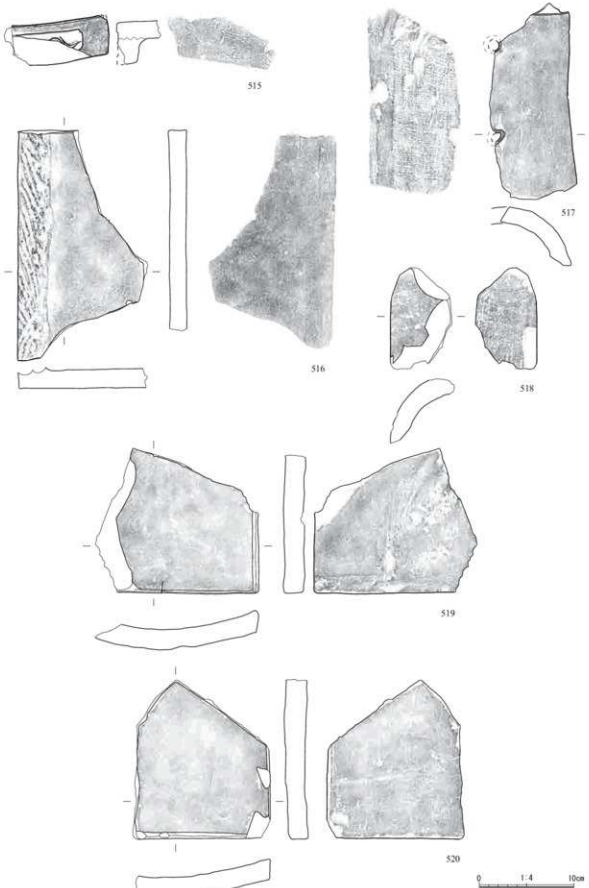


Fig. 89　SX01 出土遺物実測図（1）

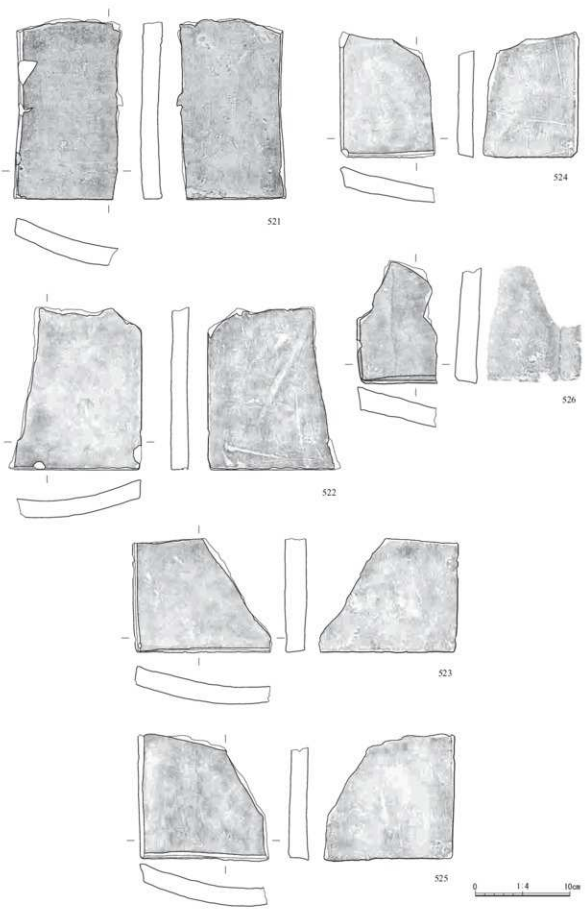


Fig. 90　SX01出土遺物実測図（2）

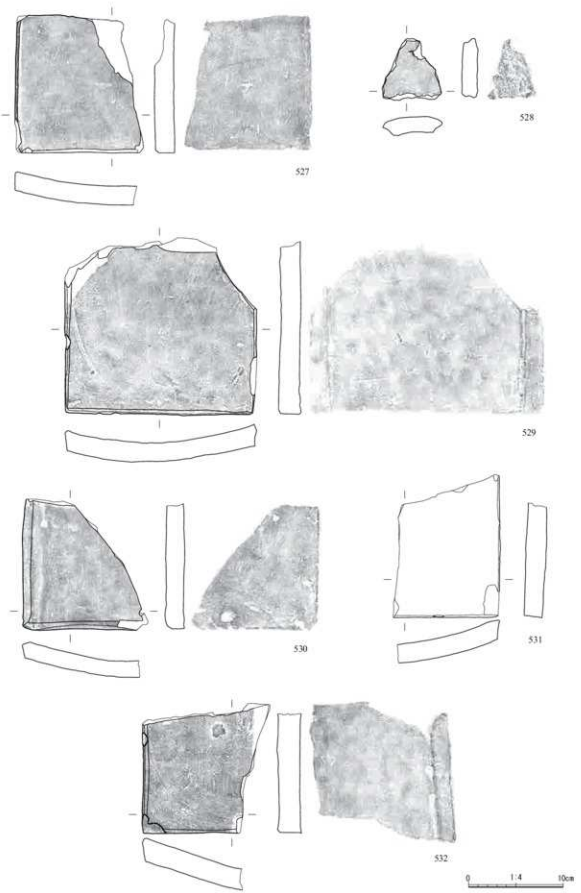


Fig. 91　SX01 出土遺物実測図（3）

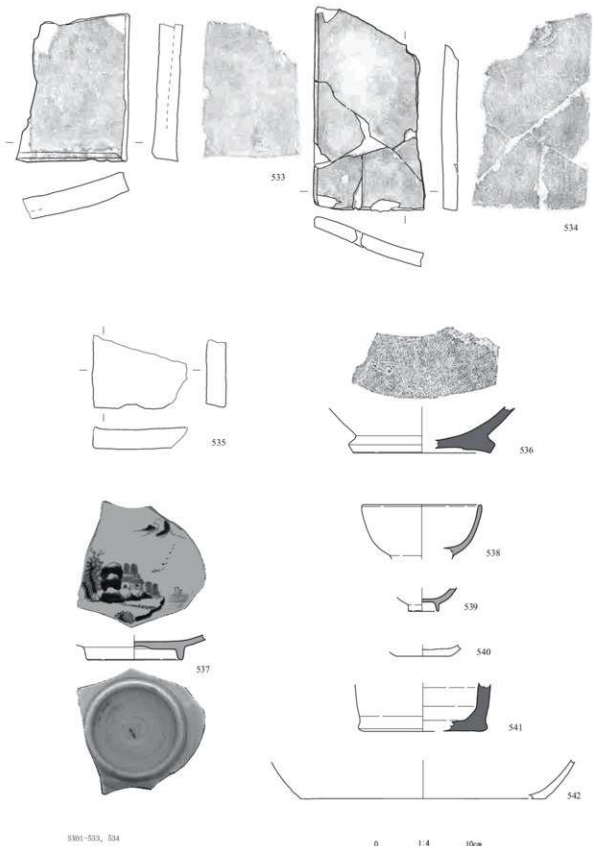


Fig. 92　SX01 出土遺物実測図（4），遺構外出土遺物実測図（1）

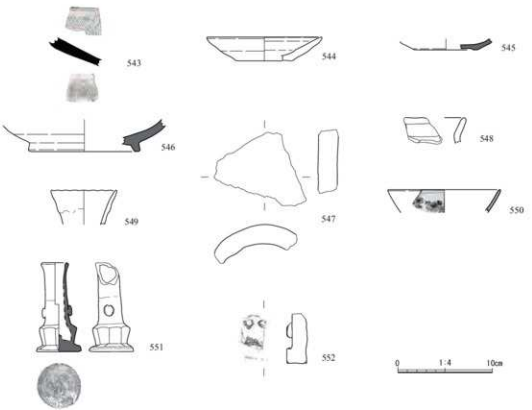


Fig. 93　遺構外出土遺物実測図（2）

は家紋瓦である。瓦当から繋九目結紋で、本庄（松平）資俊・資訓（1702 ～ 1729 年）および資訓・資昌（1749 ～ 1758 年）在城期と考えられる。

3　小　結

調査成果として、27 次調査で検出された溝（SD04）の南延長部分で、今回の調査では SD03 が新たに検出されたことがあげられる。SD03 からは個体数はわずかながら、特色のある遺物が出土した。具体的には内耳鍋や志戸呂産の擂鉢があり、古瀬戸後期様式Ⅳ期～瀬戸大窯 1 段階の時期に帰属する。これらから当溝は引間城時代（15 世紀後半～ 16 世紀前半）に掘削され、家康が入城し浜松城と名前を改めてから（16 世紀後半）浜松城の改修時には埋没していたものと推定される。また、SD01 からは近い時期の遺物が出土していることから、SD03 と有機的な関係が想定される。狭小な調査面積と攪乱範囲が多い調査であったが、27 次調査の追認と機能・廃絶期の一端を知り得た点で大きな成果を得たといえる。

また、調査区北壁で SX01 を検出した。SX01 は調査区外へ延びているため、平面プランは不明であるが、平瓦を中心として 2 段積まれていることを確認した。塀瓦が含まれていることから、18 世紀以降のものと考えられる。わずかではあるが、明確な近世の遺構が確認されたことは大きな成果といえる。

第4章　分　析

浜松城跡 27 次調査出土木製品の樹種調査結果

株式会社吉田生物研究所

（1）試料

試料は浜松市浜松城跡 27 次調査から出土した漆器 23 点である。

（2）観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。なお、No. 19 は遺物の形状から木口の切片が採取できなかった。

（3）結果

樹種同定結果（針葉樹 1 種、広葉樹 8 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

①マキ科マキ属イヌマキ（ Podocarpus macropyllus Sweet）

（遺物 No. 398, 340）（写真 No. 19, 22）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1 ～ 2 個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）をなして存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。イヌマキは本州（中・南部）、四国、九州、琉球に分布する。

②カバノキ科カバノキ属ミズメ（Betula grossa Sieb. et Zucc.）

（遺物 No. 47）（写真 No. 15）

散孔材である。木口ではやや大きい道管（～ 190μm）が単独ないし 2 ～ 4 個が放射方向に複合して分布している。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。柾目では道管は階段穿孔を有する。放射組織は平伏細胞からなる同性と直立、平伏細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は小型である。板目では放射組織は 1 ～ 4 細胞列、高さ～ 450μm であった。ミズメは本州、四国、九州に分布する。

③ブナ科クリ属クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）

（遺物 No. 140, 138, 139, 44, 54, 46, 141）（写真 No. 1 ～ 4, 10, 12, 16, 17）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～ 500μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは 2 ～ 3 個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方

向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

④ブナ科シイ属（Castanopsis sp.）

（遺物No.397,51,48,49）（写真No.7,13,14,18）

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管（～300μm）は単独でかつ大きいが接線方向には連続していない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低い為区別は難しい。シイ属は本州（福島、佐渡以南）、四国、九州、琉球に分布する。

⑤ニレ科ケヤキ属ケヤキ（Zelkova serrata Makino）

（遺物No.53）（写真No.20）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～270μm）が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を帯状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

⑥ニガキ科ニガキ属ニガキ（Picrasma quassioides Benn.）

（遺物No.43,431）（写真No.11,21）

環孔材である。木口では大道管（～250μm）が単独ないし多列で孔圏部を形成している。孔圏外では厚壁の小道管が単独ないし数個複合して散在する。軸方向柔細胞は顕著で、周囲状、翼状、連合翼状、帯状を呈する。柾目では大道管は単穿孔を有する。道管放射組織間壁孔は小型である。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。軸方向柔組織は細胞内に結晶を含み、階層状に配列している。板目では放射組織は1～5細胞列、高さ～500μmからなる。ニガキは北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。

⑦ユズリハ科ユズリハ属（Daphniphyllum sp.）

（遺物No.52）（写真No.8）

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50μm）が単独または2～4個が複合して多数分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏と方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～850μmからなる。ユズリハ属はユズリハ、ヒメユズリハがあり、本州（中南部）、四国、九州に分布する。

⑧ウコギ科ハリギリ属ハリギリ（Kalopanax septemlobus Koidz.）

（遺物No.50）（写真No.23）

環孔材である。木口ではほぼ単独の大道管（～350μm）が孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が集団状、波状、帯状に複合して分布している。柾目では道管は単穿孔を有し、内部には充填

物（チロース）がつまっている。放射組織は平伏細胞からなる同性と平伏、直立細胞からなる異性とがある。板目では放射組織は１～５細胞列、高さ～ 1.6㎜からなる。ハリギリは北海道、本州、四国、九州に分布する。

⑨ミズキ科ミズキ属（Cornus sp.）

（遺物 No. 55, 56, 49）（写真 No. 5, 6, 9）

散孔材である。木口では中庸の道管（～ 130μm）が単独あるいは２～４個放射方向に複合して分布する。道管の大きさは年輪中央部で大きくなる傾向がある。年輪界は波状である。柾目では道管は階段穿孔と側壁に多数の壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は１～４細胞列、高さ～１㎜である。ミズキ属はミズキ、ヤマボウシ等があり北海道，本州、四国、九州に分布する。

参考文献

林　昭三『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所（1991）
伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ』京都大学木質科学研究所（1999）
島地　謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田　源『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』保育社（1979）
奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所　史料第 27 冊　木器集成図録 近畿古代篇』（1985）
奈良国立文化財研究所　奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇』（1993）

使用顕微鏡

Nikon DS-Fi1

Tab. 2　出土漆器同定表

資料番号	遺物番号	出土遺構名	品名	樹種
1	140	SD02	漆　器	ブナ科クリ属クリ
2	138	SD02	漆　器	ブナ科クリ属クリ
3	139	SD02	漆　器	ブナ科クリ属クリ
4	－	SD02	漆　器	ブナ科クリ属クリ
5	55	SD01	漆　器	ミズキ科ミズキ属
6	56	SD01	漆　器	ミズキ科ミズキ属
7	397	SE02	漆　器	ブナ科シイ属
8	52	SD01	漆　器	ユズリハ科ユズリハ属
9	49	SD01	漆　器	ミズキ科ミズキ属
10	44	SD01	漆　器	ブナ科クリ属クリ
11	43	SD01	漆　器	ニガキ科ニガキ属ニガキ
12	54	SD01	漆　器	ブナ科クリ属クリ
13	51	SD01	漆　器	ブナ科シイ属
14	48	SD01	漆　器	ブナ科シイ属
15	47	SD01	漆　器	カバノキ科カバノキ属ミズメ
16	46	SD01	漆　器	ブナ科クリ属クリ
17	141	SD02	漆　器	ブナ科クリ属クリ
18	49	SD01	漆　器	ブナ科シイ属
19	398	SE02	漆　器	マキ科マキ属イヌマキ
20	53	SD01	漆　器	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
21	431	SE03	漆　器	ニガキ科ニガキ属ニガキ
22	340	SD04	漆　器	マキ科マキ属イヌマキ
23	50	SD01	漆　器	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ

木口

柾目

板目

No-1　ブナ科クリ属クリ

木口

柾目

板目

No-2　ブナ科クリ属クリ

木口

柾目

板目

No-3　ブナ科クリ属クリ

Fig.94　顕微鏡写真（1）

木口

柾目

板目

No-4　ブナ科クリ属クリ

木口

柾目

板目

No-5　ミズキ科ミズキ属

木口

柾目

板目

No-6　ミズキ科ミズキ属

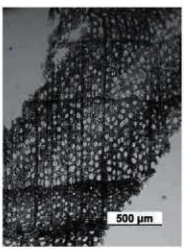
Fig.95　顕微鏡写真（2）

木口

柾目

板目

No-7　ブナ科シイ属



木口

柾目

板目

No-8　ユズリハ科ユズリハ属

木口

柾目

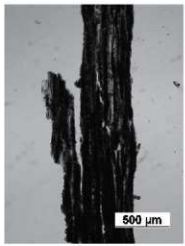
板目

No-9　ミズキ科ミズキ属

Fig.96　顕微鏡写真（3）

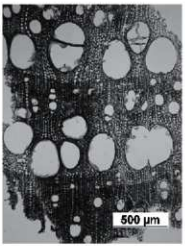
木口

柾目



板目

No-10　ブナ科クリ属クリ

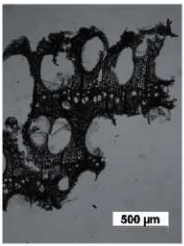


木口

柾目

板目

No-11　ニガキ科ニガキ属ニガキ



木口

柾目

板目

No-12　ブナ科クリ属クリ

Fig.97　顕微鏡写真（4）

木口

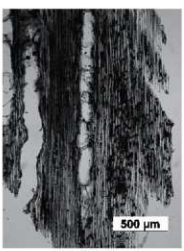
柾目

板目

No-13　ブナ科シイ属

木口

柾目



板目

No-14　ブナ科シイ属

木口

柾目

板目

No-15　カバノキ科カバノキ属ミズメ

Fig.98　顕微鏡写真（5）

木口

柾目

板目

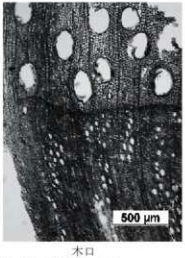
No-16　ブナ科クリ属クリ

木口

柾目

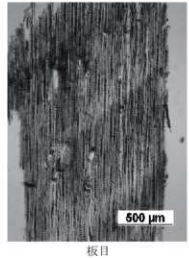
板目

No-17　ブナ科クリ属クリ



木口

柾目



板目

No-18　ブナ科シイ属

Fig.99　顕微鏡写真（6）

柾目

板目

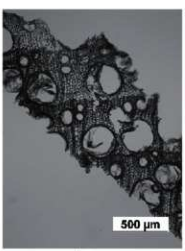
No-19　マキ科マキ属イヌマキ

木口

柾目

板目

No-20　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



木口

柾目

板目

No-21　ニガキ科ニガキ属ニガキ

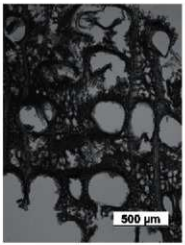
Fig.100　顕微鏡写真（7）

木口

柾目

板目

No-22　マキ科マキ属イヌマキ



木口

柾目

板目

No-23　ウコギ科ハリギリ属ハリギリ

Fig.101　顕微鏡写真（8）

第5章　総　括

今回行った27・39次発掘調査は、浜松城の三の丸の北西部において実施した調査である。本発掘調査の結果、古代から近世の遺構・遺物が確認された。今回の調査は三の丸において行われた初めての本格的な調査であり、中世後期を中心とした遺構・遺物が多数確認されたことは大きな成果といえる。最後に主な調査成果について時期ごとにまとめ、総括としたい。

古　代　7～8世紀代の遺構・遺物が確認された。明確な古代の遺構は、SD13・SD15・SD19の3条のみであるが、中世以降の遺構埋土からも古代の須恵器や土師器が少量ながら出土した。浜松城天守曲輪北西には横穴墓が確認されており、周辺で行われた発掘調査においても古代の遺物が出土している。今回の調査では古墳や建物跡等は確認されなかったが、当該地周辺に古代の遺跡が展開している可能性が高いと考えられる。

中世後期前葉　15世紀中葉～16世紀前葉の遺構・遺物が多数確認された。SD02は、古瀬戸後期Ⅳ段階（15世紀中葉～後葉頃）の堀であり、引間城に関連する遺構とみられる。これまでの発掘調査や絵図からは、当該地において堀の存在が認識されておらず、今回の発掘調査で初めて存在が明らかとなった。埋土に含まれる遺物は古瀬戸後期Ⅳ段階頃のものに限定されており、形成後早い段階で埋め戻されたとみられる。この堀は17世紀に描かれた絵図には見られないことから、遅くとも近世初頭までには埋め戻されたと考えられる。SD03およびSD04は障子堀状に掘削された溝である。出土遺物から15世紀中葉～16世紀前葉（古瀬戸後期Ⅳ段階～大窯1段階）の遺構とみられる。傾斜は北から南に向かって低くなっているが、障子部分の高まりが低い箇所もみられ、帯水機能を有していたとは考えにくい。一方、浅いところでは30cm程度であり、防御機能を高める目的であるとも考えにくい。過去の浜松城の発掘調査では同様の遺構は確認されておらず、今後周辺地域を含めた調査事例の蓄積を待って、機能について再検討を行う必要がある。

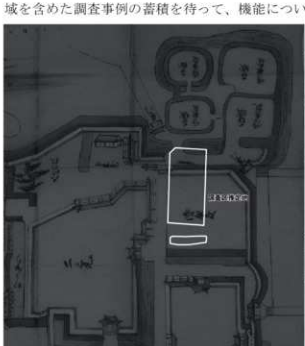


Fig. 102　遠州浜松城図

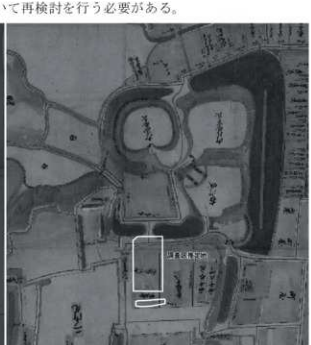


Fig. 103　青山家御家中配列図

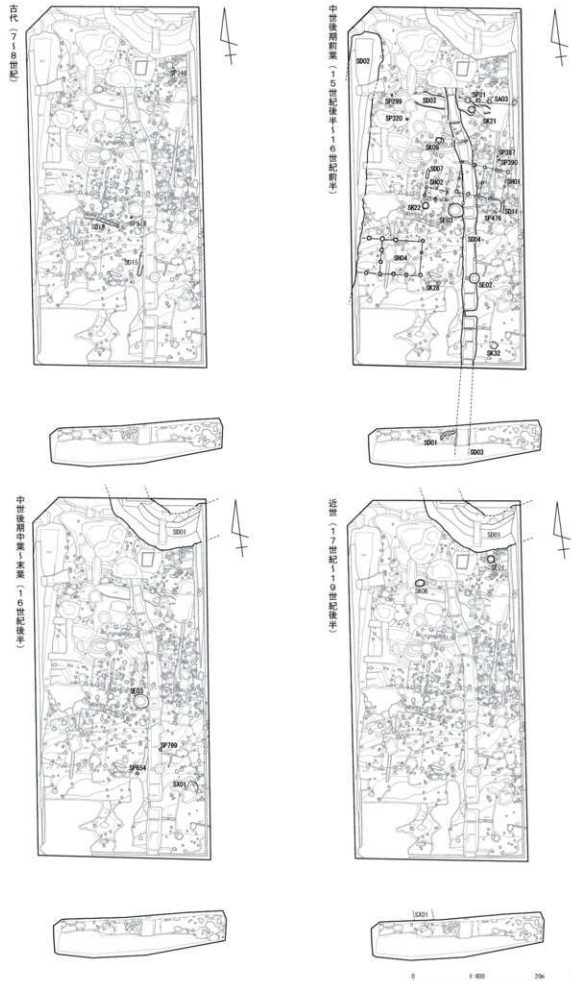


Fig. 104　浜松城跡 27・39 次調査区の変遷

調査区全体で内耳鍋等の煮沸具やかわらけを中心に、常滑産・瀬戸美濃産・志都呂産の陶器に加えて貿易陶磁器である青磁・白磁も一定量出土した。当該地の東側には引間宿が営まれていたと考えられており、出土した陶器からも盛んな流通が行われていたことがうかがえる。今回の調査では後世の遺構形成により建物プランが明確となったものは多くはなかったが、煮沸具が多く出土していることから屋敷地として利用されていたと考えられる。なお、少量ではあるが鉄滓も出土していることから鍛冶関連施設の存在も想定される。そのほかに注目すべき遺物として漆器の存在があげられる。浜松市南部地域における中世の漆器は、城山遺跡(南区東若林町)、梶子遺跡(中区南伊場町)および海東遺跡(南区恩地町)において確認されている。なかでも、城山遺跡で出土した漆器碗の中には扇等の類似した文様が描かれたものが含まれ、本遺跡出土例との関連性がうかがえる。

また、当該地は中世都市の「塩市口」に関連すると考えられる(内山 1789、鈴木 2014)。16 世紀前半頃、塩市口には町屋と松尾神社(もともと浜松神社といい、松尾神社を合祀し改称したとの伝承がある)があったとされるが、『遠江国風土記伝』によると天正 5 年(1577)には松尾神社が本魚町に移されたとされる。今回の調査では、塩市口や松尾神社の存在を直接的に示す遺構や遺物は確認されなかったが、建物跡や広域な流通をうかがわせる出土遺物がみられたことから、当該地を含む周辺に町屋等が展開していた可能性が考えられる。

中世後期中葉～末葉　調査区の北側で城の堀と考えられる SD01 を確認した。堀の埋土下層からは大窯 2 ～ 4 段階(16 世紀前葉～ 17 世紀初頭)とみられる瀬戸美濃産の陶器が出土しており、加えて口縁部が内湾するタイプの内耳鍋がみられることから 16 世紀後半に掘削されたと考えられる。浜松城は、元亀元年(1570)に入城した徳川家康により、引間城を取り込む形で城域が拡張されており、天正 18 年(1590)には堀尾吉晴により大規模な改修が行われている。出土遺物の年代に幅があるため性格な時期を断定することは困難であるが、堀尾吉晴の在城期には、城の中心は天守曲輪や本丸周辺に移っていたと考えられることから、SD01 は、徳川家康により引間城から浜松城に改修された際に掘削された堀である可能性が高いと考えられる。

また、SD01 は出土した遺物から、近世においても堀として存続していたとみられる。浜松城に関する絵図は近世以降のものが残っており、『青山家御家中配列図』(17 世紀後葉)には、引間城の南西側曲輪の南に 2 つの水堀が描かれている。今回の調査では調査区外へと堀が延びていたため全容が不明であったことから推測の域を出ないが、検出した位置と形状を考慮すると、SD01 は引間城南西側曲輪の 2 つの堀の内、東側の堀の西端部にあたる可能性が考えられる。ただし、絵図に描かれている引間城南側の通路(霜垂口に至る東西方向の道)は、現在 SD01 の南側ではなく、北側を通っている。当時の道が大きく南に振っていた可能性もあるが、今後検討を行う必要がある。

近　世　27 次調査において井戸(SE01)、39 次調査において瓦敷遺構(SX01)を確認した。瓦敷遺構は調査区外へと及んでいたため平面構造は不明であるが、整地層の上に瓦を 2 段積んだ構造であることを確認した。平瓦を中心に構成されているが、桟瓦も含まれることから 18 世紀以降に積まれたとみられる。当該地は 17 世紀に行われた浜松城の改修に伴い、三の丸として整備されたとされる。江戸時代に描かれた絵図に「侍屋敷」等の記載が見られ、家臣の屋敷地として利用されたと考えられることから、確認された瓦敷遺構は雨落ち溝や道路に敷かれたこと等が想定される。

今回の調査では、近世の三の丸利用の一端を確認できたものの、近世の遺構・遺物はごくわずかのみの確認となった。16 次調査の成果を踏まえると、基盤層直上の整地層には近世の遺構が数段階にわたり展開している可能性が高いが(鈴木 2017)、十分な調査を行うことができなかった。今後の調査事例の蓄積とともに調査技術の向上をはかり、近世遺構の調査精度を高める必要がある。

参考文献

内山真龍　1789『遠江国風土記伝』（加藤菅根・皆川剛六訳）世界聖典刊行協会　1980
太田好治　2001「浜松市域遠州灘沿岸部における地形変化と遺跡の分布」『浜松市博物館報』第14号
太田好治・鈴木一有　2001「浜松市の中世遺跡にかかわる基礎資料」『浜松市博物館報』第14号
鈴木正貴　1996「東海地方の内耳鍋・羽付釜・釜」『鍋と甕のデザイン』第4回東海考古学フォーラム
鈴木一有　2014「遠江における守護所と城下町の様相」『守護所シンポジウム2@清州 新・清州会議 資料集』
　　新・清州会議実行委員会
鈴木一有　2017「第2章 試掘・確認調査報告 33 浜松城跡16次」『平成27年度浜松市文化財調査報告』
藤澤良祐　2005「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』発表要旨・論考編
　　菊川シンポジウム実行委員会
（財）浜松市文化協会　1993『城山遺跡Ⅴ』
（財）浜松市文化協会　2010『梶子遺跡11次』
浜松市　1957『浜松市史』史料編　二
浜松市　1961『浜松市史』史料編　四
浜松市教育委員会　2001『海東遺跡／法ヶ崎遺跡』
浜松市教育委員会　2016『浜松における中世城館の調査』
浜松市教育委員会　2021『浜松城下町遺跡3』
浜松市市民部文化財課　2015『浜松城と城下をめぐる』
浜松市市民部文化財課編集　2015『増補浜松城と城下をめぐる』

※浜松城跡に関わる報告書は9ページを参照

Tab. 3　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（1）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調	備考
16	1	27次	SD01	中層	土師器	皿		11.2	3.0		90%	浅黄橙	手捏ね
16	2	27次	SD01	下層	土師器	皿		(13.8)	2.8	(11.0)	15%	にぶい黄橙	手捏ね
16	3	27次	SD01	上層	土師器	皿			(1.6)	(7.6)	25%	灰白	手捏ね
16	4	27次	SD01	14・15層	土師器	皿		11.2	3.6	5.7	ほぼ完形	にぶい橙	轆轤
16	5	27次	SD01	上層	土師器	皿		13.0	2.3	6.8	90%	橙	轆轤
16	6	27次	SD01	上層	土師質	皿		(11.2)	2.5	(6.6)	25%	橙	轆轤
16	7	27次	SD01	下層	土師器	皿		(16.6)	3.4	(9.1)	25%	明褐灰	轆轤
16	8	27次	SD01	中層	土師器	皿		(10.7)	4.1	(6.5)	30%	にぶい黄橙	轆轤
16	9	27次	SD01		土師器	皿		(12.8)	(2.2)	(5.8)	10%	橙	轆轤
16	10	27次	SD01	中層	土師器	皿		(9.1)	2.7	(6.2)	25%	にぶい橙	轆轤
16	11	27次	SD01	中層	土師器	皿			(2.0)	5.1	65%	浅黄橙	轆轤
16	12	27次	SD01	中層	土師器	皿			(2.1)		10%	灰白	墨書「長」
16	13	27次	SD01(D10)		瓦質土器	内耳鍋		(24.8)	(15.3)	(20.5)	60%	黒	口縁部が外反しないタイプ 煤付
16	14	27次	SD01	7.8層	土師器	内耳鍋		(24.8)	(12.5)	(20.3)	20%	にぶい黄橙	口縁部が外反しないタイプ
16	15	27次	SD01	14.15層	土師器	内耳鍋		(26.6)	(15.5)		30%	褐灰	口縁部が外反しないタイプ
16	16	27次	SD01	7.8層	土師器	内耳鍋		(23.0)	(11.4)		10%	灰黄	口縁部が外反しないタイプ
16	17	27次	SD01	中層	土師器	内耳鍋		(20.0)	(12.1)		20%	にぶい橙	口縁部が外反しないタイプ
16	18	27次	SD01		土師器	内耳鍋		30.4			10%	黄白	口縁部が外反しないタイプ
16	19	27次	SD01		土師器	内耳鍋		27.8			10%	灰白	口縁部が外反しないタイプ
16	20	27次	SD01	中層	土師器	鍋			6.9	(19.4)	底部25%	にぶい橙	内耳鍋の口縁部が外反しないタイプの底部か
17	21	27次	SD01	暗褐色粘質土	陶器	碗	瀬戸		(5.8)	(4.0)	底部50%	黒(釉) 浅黄	鉄釉 中3期
17	22	27次	SD01	中層	陶器	碗	瀬戸	(12.2)	(5.4)		25%	明赤褐(釉) 橙	鉄釉 大窯2
17	23	27次	SD01	下層	陶器	碗	瀬戸	(11.0)	(4.5)		10%	明赤褐(釉) 灰白	鉄釉 大窯4
17	24	27次	SD01	中層	陶器	皿	瀬戸		(1.2)	5.6	底部完形	灰白(釉) にぶい黄橙	灰釉 菊判印　大窯4
17	25	27次	SD01	中層	陶器	皿	瀬戸		(0.9)	(6.6)	底部50%	浅黄(釉) 灰白	灰釉 大窯3
17	26	27次	SD01	下層	陶器	皿	瀬戸		(1.6)	(6.3)	底部10%	浅黄(釉) 灰白	灰釉 大窯2
17	27	27次	SD01	下層	陶器	皿	志戸呂		(1.3)	(5.7)	底部30%	褐(釉) 灰白	鉄釉
17	28	27次	SD01	上層	陶器	皿	瀬戸	(9.8)	(2.5)		25%	明オリーブ灰(釉)　黄橙	灰釉 大窯3
17	29	27次	SD01	上層	陶器	皿	瀬戸	(15.0)	(2.7)		口縁部10%	浅黄(釉) 浅黄橙	灰釉 大窯1～大窯2
17	30	27次	SD01	上層	陶器	盤		(24.5)	(3.8)		30%	灰白(釉) 橙	長石釉
17	31	27次	SD01	中層	陶器	茶入?	瀬戸		(2.8)	(3.6)	30%	暗褐・黒(釉) 灰黄	鉄釉 大窯3～4
17	32	27次	SD01	上層	陶器	香?	瀬戸美濃		(2.8)	(11.2)	底部30%	灰白(釉) 浅黄橙	長石釉 17c～18c
17	33	27次	SD01	上層	陶器	徳利			(7.8)		体部25%	灰白(釉) にぶい黄橙	17c～18c
17	34	27次	SD01	9・10・13層	貿易陶磁器	白磁皿	輸入系	10.7	2.7	5.4	75%	灰白	
17	35	27次	SD01	上層	染付磁器	碗	輸入系		(1.7)		5%以下	明緑灰(釉) 灰白	
17	36	27次	SD01	上層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(3.2)	(4.8)	底部完形	明オリーブ灰(釉)　灰白	見込み、外底釉剥ぎ
17	37	27次	SD01	下層	陶器	擂鉢	瀬戸	(28.7)	11.9	(10.5)	30%	褐灰(釉) 浅黄橙	鉄釉 大窯2
17	38	27次	SD01	下層	陶器	擂鉢	志戸呂	(27.8)	(4.8)		口縁部10%	にぶい褐	
17	39	27次	SD01		陶器	甕	常滑	28.0			10%	灰	
17	40	27次	SD01	中層	須恵器	甕			(4.5)		5%以下	黄灰	
17	41	27次	SD01	中層	瓦	平瓦		長(9.5)	巾(6.0)	厚1.8		灰白	
17	42	27次	SD01	下層	獣骨	?		長(15.7)	巾(2.5)	厚0.1～0.4			25.5g
18	43	27次	SD01	中層	木製品	漆器碗		0.0	0.0	7.2	70%		内:赤黒　外:黒　模様:朱

Tab. 4　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（2）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	最高	底径	残存率	色調	備考
18	44	27次	SD01	中層	木製品	漆器椀		16.0	8.0		20%		内:赤黒 外:黒 模様:朱
18	45	27次	SD01	中層	木製品	漆器椀		(14.0)	(5.3)		25%		内:赤黒 外:黒 模様:朱
18	46	27次	SD01	下層	木製品	漆器椀		16.6	10.3	8.1	60%		内:赤黒 外:黒
18	47	27次	SD01	中層	木製品	漆器椀			(3.2)	7.4	20%		内:赤 外:黒
18	48	27次	SD01	下層	木製品	漆器椀			(5.0)	7.6	20%		内:黒 外:黒
18	49	27次	SD01	中層	木製品	漆器椀			(2.4)	7.2	30%		内:黒 外:黒
18	50	27次	SD01	中層	木製品	漆器椀			(2.0)	6.0	20%		内:赤 外:黒
18	51	27次	SD01	下層	木製品	漆器皿		14.4	3.2	7.0	30%		内:赤 外:黒 模様:朱
18	52	27次	SD01	中層	木製品	漆器皿			(2.1)	7.6	60%		内:赤 外:黒 模様:朱
18	53	27次	SD01	中層	木製品	漆器皿		14.0	(4.0)	6.8	30%		内:赤 外:黒
18	54	27次	SD01	下層	木製品	漆器皿		(9.8)	2.9	5.8	60%		内:赤 外:黒 模様:朱
18	55	27次	SD01	中層	木製品	不明			(2.5)		10%		内:赤 外:黒 模様:朱
18	56	27次	SD01	中層	木製品	不明					10%		内:赤 外:黒 模様:朱
19	57	27次	SD01	中層	木製品	下駄		長19.3cm	巾11cm	高8.9cm			
19	58	27次	SD01		木製品	下駄		長19.4cm	巾10.75cm	高3.75cm			
19	59	27次	SD01	中層	木製品	下駄		長17.05cm	巾7.6cm	高4.4cm			
19	60	27次	SD01	410	木製品	柄杓底板		長9.85cm	巾9.95cm	高3mm			
19	61	27次	SD01	下層	木製品	付木		長13.8cm	巾2.05cm	高0.9cm			
19	62	27次	SD01	中層	木製品	付木		長13.1cm	巾2.0cm	高1.5cm			
19	63	27次	SD01	中層	木製品	板状		長9.15cm	横上端5.1cm横下端4.75cm	厚9.5m			
19	64	27次	SD01	中層	木製品	木種鑑不明品		長14.85cm	巾4.35cm				
23	65	27次	SD02	下層	土師器	皿		10.9	2.1	(7.4)	40%	灰白	手捏ね
23	66	27次	SD02	下層	土師器	皿		(12.6)	(2.0)		25%	灰白	手捏ね
23	67	27次	SD02	下層	土師器	皿		(10.6)	2.2	5.6	40%	にぶい橙	手捏ね
23	68	27次	SD02	中層	土師器	皿		(10.7)	2.2	(5.6)	50%	にぶい橙	手捏ね
23	69	27次	SD02	上層	土師器	皿		(14.2)	(2.1)	9.0	10%	橙	手捏ね
23	70	27次	SD02	上層	土師器	皿		(12.4)	(2.9)		20%	浅黄橙	物幅
23	71	27次	SD02	下層	土師器	皿		(13.0)	(2.7)		10%	灰白	物幅
23	72	27次	SD02	中層・下層	土師器	皿		12.6	3.0	(7.0)	60%	灰白	物幅
23	73	27次	SD02	中層	土師器	皿		8.2	1.9	5.4	95%	灰白	物幅
23	74	27次	SD02	中層	土師器	皿		(9.8)	1.6	(5.4)	25%	灰白	物幅
23	75	27次	SD02	上層	土師器	皿		(13.6)	3.1	(6.3)	25%	浅黄橙	物幅
23	76	27次	SD02	上層	土師器	皿		(16.8)	(3.5)		20%	灰白	物幅
23	77	27次	SD02	中層	土師器	皿			(1.9)	(5.8)	35%	浅黄	物幅
23	78	27次	SD02	中層	土師器	皿			(1.8)	6.6	底部50%	浅黄橙	物幅
23	79	27次	SD02		土師器	内耳鍋		(19.6)	(11.0)		25%	灰白	口縁波状くの字に外反するタイプ
23	80	27次	SD02	下層	土師器	内耳鍋		(22.5)	(7.1)		10%	にぶい黄橙	口縁波状くの字に外反するタイプ
23	81	27次	SD02	下層	土師器	内耳鍋		(20.0)	(5.1)		10%	灰白	口縁波状くの字に外反するタイプ
23	82	27次	SD02	底下層	土師器	内耳鍋		(18.0)	(5.0)		15%	灰白	口縁波状くの字に外反するタイプ
23	83	27次	SD02		土師器	内耳鍋		(18.3)	(6.4)		25%	灰白	口縁波状くの字に外反するタイプ
23	84	27次	SD02	下層	土師器	内耳鍋		(22.6)	(4.4)		口縁波状30%	灰白	口縁波状くの字に外反するタイプ
23	85	27次	SD02	中層	土師器	内耳鍋		(22.4)	(11.1)		10%	灰黄	口縁波状くの字に外反するタイプ
23	86	27次	SD02	下層	土師器	内耳鍋		(25.0)	(12.1)		20%	灰白	口縁波状くの字に外反するタイプ

Tab. 5　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（3）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	口径	計測値(cm) 器高	底径	残存率	色調	備考
23	87	27次	SD02	中層	土師器	内耳鍋		(22.6)	(11.9)		20%	灰白	口縁部が くの字に外反するタイプ
23	88	27次	SD02	下層	土師器	内耳鍋		(21.5)	(11.8)		20%	灰黄	口縁部が くの字に外反するタイプ
23	89	27次	SD02	下層	土師器	内耳鍋		(21.1)	(7.8)		15%	灰白	口縁部が くの字に外反するタイプ
23	90	27次	SD02	下層	土師器	内耳鍋		(21.2)					口縁部が くの字に外反するタイプ
24	91	27次	SD02	上層	土師器	鍋	南伊勢	(27.7)	(7.4)		15%	明褐灰	15c～
24	92	27次	SD02	D9	土師器	内耳鍋		(23.6)					口縁部が くの字に外反するタイプ
24	93	27次	SD02	中層	土師器	内耳鍋		(22.1)	(7.1)		15%	灰白	口縁部が くの字に外反するタイプ
24	94	27次	SD02	上層	土師器	茶釜型鍋		(16.0)	(9.0)		口縁部30%	浅黄橙	
24	95	27次	SD02	中層	土師器	茶釜型鍋			(6.3)		5%	灰白	
24	96	27次	SD02	上層	土師器	茶釜型鍋							
24	97	27次	SD02	中層	土師器	茶釜型鍋			(6.8)		体部10%	にぶい黄橙	
24	98	27次	SD02		土師器	茶釜型鍋			(4.6)		体部25%	灰白	
24	99	27次	SD02	中層	土師器	茶釜型鍋		(14.0)	(16.3)		30%	灰白	外耳・脚なし
24	100	27次	SD02	最下層	瓦質土器	茶釜型鍋		13.5	17.7	17.0	口は完形	暗青灰	脚付
24	101	27次	SD02	下層	瓦質土器	内耳鍋		(26.0)	(7.3)		10%	灰白	口縁部が外反しないタイプ
24	102	27次	SD02	中層	瓦質土器	釜		(10.2)	(1.9)		25%	灰白	
24	103	27次	SD02	中層	瓦質土器	火鉢			(5.4)		10%	暗灰	
25	104	27次	SD02	下層	陶器	碗	瀬戸	16.2	6.2	5.6	口は完形	浅黄(橙) 灰白	灰釉 後4期
25	105	27次	SD02		陶器	碗	瀬戸	12.4			20%	灰白	灰釉 後4期
25	106	27次	SD02	上層	陶器	仏飯器	瀬戸		(3.9)	(4.3)	30%	黒褐(橙) 灰白	後4期
25	107	27次	SD02	中層	陶器	皿	瀬戸	(10.9)	2.3	6.5	60%	灰白(橙) 灰白	灰釉 後4期
25	108	27次	SD02	中層	陶器	皿	瀬戸	(10.1)	(3.6)		25%	灰オリーブ(橙) 灰白	
25	109	27次	SD02	中層	陶器	皿	瀬戸	(10.6)	3.5		25%	オリーブ黄(橙) 灰白	灰釉 後4期
25	110	27次	SD02	上層	陶器	皿	瀬戸		(1.7)	5.0	底部完形	灰白	口縁部に灰釉か 後4期
25	111	27次	SD02	中層	陶器	香炉	瀬戸		(3.7)	(17.2)	底部15%	灰オリーブ(橙) 灰白	灰釉 後4期
25	112	27次	SD02	下層	陶器	壺	志戸呂	(10.2)	4.1		口縁部20%	暗灰	鉄釉
25	113	27次	SD02	中層	陶器	壺	瀬戸		(4.9)	(9.6)	20%	灰オリーブ(橙) 灰白	灰釉 後4期
25	114	27次	SD02	上層	染付磁器	碗	関産	(10.0)	(3.0)		15%	灰白(橙) 灰白	19c～
25	115	27次	SD02		染付磁器	碗	関産		(2.9)	(4.9)	底部20%	灰白(橙) 灰白	19c～
25	116	27次	SD02	28層	京系陶磁器	青磁碗	龍泉窯系	(22.7)				明緑灰(緑) 灰白	連弁文
25	117	27次	SD02	中層	京系陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(4.8)		10%	オリーブ灰(緑) 灰白	雷文帯
25	118	27次	SD02	中層	京系陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(2.0)		底部10%	オリーブ灰(緑) 灰白	
25	119	27次	SD02	上層	陶器	擂鉢	志戸呂	(26.0)	(6.2)		15%	灰(緑) 明黄褐	鉄釉
25	120	27次	SD02		陶器	擂鉢	瀬戸	25.2	(4.1)		5%	浅黄橙	
25	121	27次	SD02	上層	陶器	鉢	常滑		(6.3)	(11.0)	30%	にぶい橙	赤物
25	122	27次	SD02	中層	陶器	鉢	志戸呂	(26.0)	(3.6)		口縁部5%	赤	
25	123	27次	SD02	下層	陶器	擂鉢	瀬戸		(4.5)	10.5	20%	浅黄橙	後4期
25	124	27次	SD02	下層	陶器	擂鉢	瀬戸		(3.1)	(11.0)	底部25%	にぶい黄橙	後4期
25	125	27次	SD02		陶器	甕	常滑	(29.6)	(12.0)		10%	明褐灰	
25	126	27次	SD02	中層	陶器	甕	常滑		(9.4)		10%	黄橙	
26	127	27次	SD02	26層	陶器	甕	常滑	(42.4)	(5.4)		口縁部10%	浅黄	
26	128	27次	SD02	下層	陶器	甕	常滑	(26.6)	(5.2)		口縁部10%	暗赤灰	
26	129	27次	SD02	26層	陶器	甕	常滑		(9.3)			橙色	外面は自然釉で黒色に変化

Tab. 6　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（4）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調	備考
26	130	27次	SD02	中層	陶器	壺	常滑	(10.7)	(9.6)		10%	暗赤褐	
26	131	27次	SD02	上層	陶器	甕	常滑		(6.0)		15%	橙	赤物
26	132	27次	SD02	中層	陶器	壺甕	常滑		(4.7)	(15.2)	底部20%	赤灰	
26	133	27次	SD02	中層	須恵器	壺			(2.3)	(8.3)	底部80%	灰白	
26	134	27次	SD02	上層	瓦	平瓦		長(7.9)	巾(12.6)	厚2.0	20%	灰	
26	135	27次	SD02		瓦	平瓦		長(13.3)	巾(14.3)	厚1.8		灰	
26	136	27次	SD02		鞴	羽口		長(9.0)	巾(7.8)	厚4.2	10%	明黄褐	
26	137	27次	SD02	下層	銭貨	—		2.4		厚0.2			治平元宝
27	138	27次	SD02	下層	木製品	漆器碗		16.8	5.6	7.4	70%		内:黒 外:黒 模様:朱
27	139	27次	SD02	下層	木製品	漆器碗		15.3	5.0	7.4	70%		内:黒 外:黒 模様:朱
27	140	27次	SD02	下層	木製品	漆器碗		(12.5)	4.5	6.4	40%		内:黒 外:黒 模様:朱
27	141	27次	SD02	13層	木製品	漆器皿		10.0	2.0	6.0	30%		内:赤 外:黒
27	142	27次	SD02	下層	木製品	柄杓底板		縦10.85cm 横5.7cm 厚5mm					
27	143	27次	SD02	下層	木製品	柄杓底板		縦10.95cm 横5.7cm 厚6mm					
27	144	27次	SD02	中層	木製品	台状不明品		径10.3cm 巾10.95cm 高6.9cm					
27	145	27次	SD02	下層		台？		長17.8cm 巾4.7cm 高1.1cm					
29	146	27次	SD03	B3	土師器	皿		(11.9)	2.6	7.7	60%	浅黄橙	手捏ね
29	147	27次	SD03		土師器	皿		(11.5)	2.4	(7.9)	40%	浅黄橙	手捏ね
29	148	27次	SD03		土師器	皿		10.6	3.0	6.0	50%	淡黄	手捏ね
29	149	27次	SD03		土師器	皿		(12.1)	2.7	(8.3)	40%	浅黄橙	手捏ね
29	150	27次	SD03		土師器	皿		(11.4)	2.2	(5.3)	30%	浅黄橙	轆轤
29	151	27次	SD03		土師器	皿		(11.9)	2.3	(7.1)	30%	灰白	轆轤
29	152	27次	SD03		土師器	皿			(1.9)	(9.6)	底部22%	灰白	轆轤
29	153	27次	SD03		土師器	皿			(1.8)	(5.6)	底部25%	淡黄	轆轤
29	154	27次	SD03		土師器	皿			(1.5)	(5.2)	底部40%	浅黄橙	轆轤
29	155	27次	SD03		土師器	皿			(1.7)	(5.5)	底部40%	にぶい橙	轆轤
29	156	27次	SD03		土師器	皿			(1.1)	5.6	底部75%	灰白	轆轤
29	157	27次	SD03		土師器	内耳鍋		(17.8)	(9.4)		20%	浅黄橙	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
29	158	27次	SD03		陶器	碗	瀬戸	(12.0)	(4.8)		20%	黒褐(釉) にぶい黄橙	鉄釉 後4期
29	159	27次	SD03	下層	陶器	碗	瀬戸	(11.3)	(5.3)		15%	黒褐(釉) 灰白	鉄釉 大窯3
29	160	27次	SD03		陶器	碗	瀬戸	(2.7)	(1.1)		30%	黒(釉) 灰黄	鉄釉 後4期
29	161	27次	SD03		染付磁器	皿	輸入系	(10.5)	3.0	(3.4)	25%	灰白	
29	162	27次	SD03		陶器	擂鉢	瀬戸		(8.9)	(10.8)	10%	浅黄橙	鉄釉 後4期
29	163	27次	SD03		陶器	擂鉢	瀬戸		(4.4)	(8.6)	底部20%	赤灰(釉) 淡黄	鉄釉 後4期
29	164	27次	SD03		陶器	甕	常滑		(8.8)		口縁部5%	赤褐	
29	165	27次	SD03		陶器	鉢	常滑		(4.9)	(13.7)	底部20%	灰	
29	166	27次	SD03		陶器	鉢	常滑		(4.2)	(11.0)	20%	暗灰黄	赤物
33	167	27次	SD04	中層	土師器	皿		(9.4)	1.9		口縁部20%	灰白	手捏ね
33	168	27次	SD04	D13	土師器	皿		10.8	2.3	5.6	60%	にぶい黄橙	手捏ね
33	169	27次	SD04	上層	土師器	皿		(10.2)	2.0	(6.1)	30%	浅黄橙	手捏ね
33	170	27次	SD04	下層	土師器	皿		(9.7)	2.4	(6.6)	50%	灰白	手捏ね
33	171	27次	SD04	下層	土師器	皿		9.5	2.1	5.8	60%	明褐灰	手捏ね
33	172	27次	SD04	D20	土師器	皿		9.1	2.1	7.1	完形	淡橙	手捏ね

Tab. 7　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（5）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	口径	法量(cm) 器高	底径	残存率	色調	備考
33	173	27次	SD04	D15	土師器	皿		8.3	2.0	5.5	完形	灰白	手捏ね
33	174	27次	SD04		土師器	皿		9.7	1.8	8.0	完形	淡橙	手捏ね
33	175	27次	SD04	下層	土師器	皿		8.2	1.5	4.5	90%	明黄灰	手捏ね
33	176	27次	SD04	下層	土師器	皿		(8.2)	(1.4)	(2.6)	30%	にぶい黄橙	手捏ね
33	177	27次	SD04	上層	土師器	皿		10.6	2.3	4.0	25%	灰白	手捏ね
33	178	27次	SD04	下層	土師器	皿		(9.4)	(2.0)	(3.0)	60%	灰白	手捏ね
33	179	27次	SD04	上層	土師器	皿		(9.7)	2.0	4.8	75%	灰白	手捏ね
33	180	27次	SD04		土師器	皿		(9.8)	(2.1)	(3.0)	30%	灰白	手捏ね
33	181	27次	SD04	下層	土師器	皿		(8.3)	(1.4)		30%	灰白	手捏ね
33	182	27次	SD04		土師器	皿		(10.6)	(1.7)	(4.2)	30%	灰白	手捏ね
33	183	27次	SD04	上層	陶器	皿		(10.2)	1.9		40%	にぶい橙	手捏ね
33	184	27次	SD04	中層・下層	土師器	皿		(15.5)	3.6	7.2	30%	淡橙	軸輪
33	185	27次	SD04		土師器	皿			(2.6)	(7.2)	25%	浅黄橙	軸輪
33	186	27次	SD04	D6	土師器	皿		14.5	2.6	6.9	95%	淡黄	軸輪
33	187	27次	SD04		土師器	皿			(2.3)	(6.3)	25%	浅黄橙	軸輪
33	188	27次	SD04	下層上	土師器	皿		12.7	2.7	6.6	90%	灰白	軸輪
33	189	27次	SD04	下層	土師器	皿		(16.2)	3.2	(7.0)	40%	灰白	軸輪
33	190	27次	SD04		土師器	皿		(12.4)	2.4	5.7	30%	灰白	軸輪
33	191	27次	SD04		土師器	皿		(13.0)	(2.2)		口縁部25%	灰白	軸輪
33	192	27次	SD04	下層	土師器	皿		(15.0)	(2.2)	(7.1)	30%	浅黄橙	軸輪
33	193	27次	SD04	下層中	土師器	皿		13.1	2.6	6.3	95%	灰白	軸輪
33	194	27次	SD04		土師器	皿		(12.9)	2.1	5.4	30%	灰白	軸輪
33	195	27次	SD04	下層	土師器	皿		12.5	2.5	5.7	95%	灰白	軸輪
33	196	27次	SD04		土師器	皿		(12.7)	(2.2)		15%	灰白	軸輪
33	197	27次	SD04	D15	土師器	皿		11.0	2.6	4.6	90%	にぶい橙	軸輪
33	198	27次	SD04		土師器	皿		(12.2)	(3.0)	(5.0)	25%	灰白	軸輪
33	199	27次	SD04	中層	土師器	皿		(14.2)	3.3	(6.4)	30%	灰白	軸輪
33	200	27次	SD04	下層	土師器	皿		(12.0)	2.4	6.2	40%	褐灰	軸輪
33	201	27次	SD04	上層	土師器	皿		(13.0)	2.8	(6.0)	30%	灰白	軸輪
33	202	27次	SD04		土師器	皿		(12.1)	2.8	(7.0)	30%	灰白	軸輪
33	203	27次	SD04	中層	土師器	皿			(1.9)	(7.1)	30%	灰白	軸輪
33	204	27次	SD04		土師器	皿		(13.6)	(2.3)		10%	灰白	軸輪
33	205	27次	SD04		土師器	皿		(12.6)	(1.8)		口縁部20%	灰黄	軸輪?
33	206	27次	SD04	中層	土師器	皿		(11.4)	2.2	(7.4)	40%	明黄灰	軸輪
33	207	27次	SD04	中層	土師器	皿		(10.8)	2.2	(6.3)	30%	灰白	軸輪
33	208	27次	SD04	中層	土師器	皿		(11.6)	2.1	(6.0)	30%	浅黄橙	軸輪
33	209	27次	SD04	下層	土師器	皿		(10.6)	2.1	(7.0)	50%	灰白	軸輪
33	210	27次	SD04	D7	土師器	皿		8.5	2.1	5.6	90%	灰白	軸輪
33	211	27次	SD04		土師器	皿		(7.8)	1.6	(4.7)	50%	灰白	軸輪
33	212	27次	SD04		土師器	皿		8.4	2.0	5.7	70%	灰白	軸輪
33	213	27次	SD04		土師器	皿		(9.6)	1.7	5.2	40%	灰白	軸輪
33	214	27次	SD04	D14	土師器	皿			(2.2)	(6.8)	底部50%	浅黄橙	軸輪
33	215	27次	SD04	上層	土師器	皿			(2.4)	(5.6)	底部30%	にぶい橙	軸輪

Tab. 8　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（6）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	口径	計測(cm) 器高	底径	残存率	色調	備考
33	**216**	27次	SD04		土師器	皿			0.85	(7.6)	20%	浅黄橙	物観
33	**217**	27次	SD04		土師器	皿			(1.1)	(5.5)	底部60%	灰白	物観
33	218	27次	SD04	下層	土師器	皿			(1.1)	(4.2)	底部25%	灰白	物観
33	**219**	27次	SD04		土師器	皿			0.40	(7.0)	底部50%	浅黄橙	物観
33	220	27次	SD04		土師器	皿			(1.1)	6.0	底部完形	灰白	物観
33	**221**	27次	SD04	下層	土師器	皿			0.80	3.5	底部完形	橙	物観
33	222	27次	SD04		土師器	皿			(1.1)	(7.6)	底部60%	灰白	物観
33	**223**	27次	SD04	中層・下層	土師器	皿			0.30	(7.4)	底部30%	浅黄橙	物観
34	224	27次	SD04	D17	土師器	内耳鍋		19.2	12.8	10.0	完形	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	**225**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		20.3	12.1	10.0	80%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	226	27次	SD04	中層	土師器	内耳鍋		21.0	12.7	14.4	70%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	**227**	27次	SD04	下層	土師器	内耳鍋		21.4	(11.1)		80%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	228	27次	SD04		土師器	内耳鍋		19.8	12.1		30%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	**229**	27次	SD04	下層	土師器	内耳鍋		(20.6)	0(4.0)		20%	にぶい黄橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	230	27次	SD04	下層	土師器	内耳鍋		20.8	10.7		30%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	**231**	27次	SD04	下層	土師器	内耳鍋		(23.2)	0(3.1)		30%	浅黄橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	232	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(19.6)	0(1.6)		15%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	**233**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(18.5)	(0.3)		10%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	234	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(22.1)	(6.6)		10%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	**235**	27次	SD04	下層	土師器	内耳鍋		(21.0)	(7.8)		15%	にぶい黄橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	236	27次	SD04	中層	土師器	内耳鍋		(21.8)	(6.4)		口縁部15%	浅黄橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
34	**237**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(18.4)	(6.4)		25%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	238	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(20.6)	(7.2)		10%	にぶい橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	**239**	27次	SD04	下層	土師器	内耳鍋		(18.6)	(6.7)		20%	にぶい黄橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	240	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(20.6)	(6.7)		口縁部15%	黄灰	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	**241**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(20.7)	(4.0)		口縁部10%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	242	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(18.0)	(5.6)		口縁部30%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	**243**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(21.2)	(6.1)		口縁部10%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	244	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(24.6)	(10.5)		15%	浅黄橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	**245**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(18.2)	(7.1)		口縁部15%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	246	27次	SD04	中層	土師器	内耳鍋		(21.5)	5.3		25%	灰黄褐	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	**247**	27次	SD04	下層	土師器	内耳鍋		(20.3)	(5.3)		口縁部10%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	248	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(21.3)	(9.0)		25%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	**249**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(20.6)	(7.9)		口縁部10%	浅黄橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	250	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(22.0)	(10.3)		15%	橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	**251**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(20.0)	(6.3)		口縁部10%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	252	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(17.8)	(6.8)		口縁部10%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	**253**	27次	SD04	D31	土師器	内耳鍋		(21.8)	(12.0)		10%	浅黄橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	254	27次	SD04	D18	土師器	内耳鍋		(23.3)	(10.0)		20%	灰黄	口縁部が「の字に外反するタイプ
35	**255**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(23.0)	(7.4)		口縁部10%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
36	256	27次	SD04	中層	土師器	内耳鍋		(17.0)	(5.2)		口縁部15%	にぶい黄橙	口縁部が「の字に外反するタイプ
36	**257**	27次	SD04		土師器	内耳鍋		(22.0)	(6.3)		口縁部25%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ
36	258	27次	SD04	下層	土師器	内耳鍋		(22.2)	(5.8)		口縁部25%	灰白	口縁部が「の字に外反するタイプ

Tab. 9　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（7）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調	備考
36	259	27次	SD04	下層	土師器	茶釜型鍋		(13.4)	(16.1)	15.8	60%	浅黄橙	
36	260	27次	SD04		土師器	茶釜型鍋		(11.4)	(10.5)		50%	にぶい黄橙	
36	261	27次	SD04		土師器	茶釜型鍋			(10.6)		体部25%	灰白	
36	262	27次	SD04	下層	土師器	茶釜型鍋			(7.9)		体部30%	灰白	
36	263	27次	SD04	下層	土師器	茶釜型鍋			(6.5)		体部10%	灰白	
36	264	27次	SD04		土師器	茶釜型鍋			(3.8)		5%	灰白	
36	265	27次	SD04	中層	土師器	茶釜型鍋		(14.6)	14.2		30%	灰白	
36	266	27次	SD04	下層	土師器	茶釜型鍋		(12.8)	(5.6)		20%	灰白	
36	267	27次	SD04		土師器	茶釜型鍋		(13.1)	(7.5)		20%	灰白	
36	268	27次	SD04		土師器	茶釜型鍋			(7.8)		20%	灰白	
36	269	27次	SD04		土師器	茶釜型鍋			(5.9)		体部15%	灰白	
36	270	27次	SD04	下層	土師器	茶釜型鍋			(5.0)		体部10%	にぶい黄橙	
36	271	27次	SD04		土師器	茶釜型鍋			(11.5)		体部10%	灰白	穿孔がない・外耳が上に向く
36	272	27次	SD04	下層	土師器	皿？		(12.0)	2.0	(15.6)	25%	灰白	
37	273	27次	SD04	下層	施釉陶器	碗	瀬戸	(14.4)	(4.1)		口縁部10%	灰オリーブ(釉) 黄灰	灰釉 後4期
37	274	27次	SD04		陶器	碗	瀬戸	(13.8)	(5.9)		15%	灰白(釉) 灰白	灰釉 中4期～後1期
37	275	27次	SD04	下層	陶器	碗	瀬戸	(15.6)	(4.5)		30%	灰オリーブ(釉) 灰白	灰釉 後4期
37	276	27次	SD04	下層	陶器	碗	瀬戸	(14.2)	(4.7)		20%	明オリーブ灰(釉)　灰白	灰釉 後4期
37	277	27次	SD04	下層	陶器	碗	瀬戸		(1.4)	(4.6)	高台完形	明黄褐(釉) 灰白	灰釉 後4期
37	278	27次	SD04	下層	陶器	碗	瀬戸	(11.0)	(4.0)		10%	極暗褐(釉) 灰褐	鉄釉 大窯1
37	279	27次	SD04	下層	陶器	碗	瀬戸		(4.2)	3.7	40%	灰白(釉) 灰白	灰釉 後4期
37	280	27次	SD04	下層	陶器	碗	瀬戸美濃	(8.3)	(4.2)		30%	灰白(釉) 灰白	19c～
37	281	27次	SD04	中層	陶器	皿	志戸呂	(10.6)	1.9	(5.5)	口縁部20%	黒褐(釉) 褐灰	鉄釉 菊皿
37	282	27次	SD04	中層	陶器	皿	志戸呂		(2.7)	5.3	底部30%	にぶい赤褐(釉) にぶい褐	鉄釉
37	283	27次	SD04	D27	陶器	皿	瀬戸	10.7	2.7	5.4	口縁部50%	オリーブ黄(釉) 灰白	灰釉 後3期～後4期
37	284	27次	SD04	下層	陶器	皿	瀬戸	11.8	2.5	5.0	70%	オリーブ黄(釉) 灰白	灰釉 後3期～後4期
37	285	27次	SD04		陶器	皿	瀬戸	(11.6)	(2.3)	(5.0)	5%	灰オリーブ(釉) 灰白	灰釉 後4期
37	286	27次	SD04	D14	陶器	皿	瀬戸	(12.1)	(2.2)		20%	オリーブ黄(釉) 灰白	後4期
37	287	27次	SD04	中層	陶器	皿	瀬戸	(11.0)	(1.9)		口縁部10%	灰白(釉) 灰白	灰釉 後4期
37	288	27次	SD04		陶器	皿	瀬戸		(4.4)	(1.4)	20%	灰白	後4期
37	289	27次	SD04		陶器	皿	瀬戸		(1.5)	(4.2)	底部50%	灰白	外底に重焼痕（灰釉が付着） 後4期
37	290	27次	SD04	下層	陶器	壺	志戸呂	9.8	(9.6)		口縁～胴部ほぼ完形	黒褐(釉) にぶい黄	鉄釉
37	291	27次	SD04		陶器	燭台？	瀬戸		(4.1)			暗褐(釉) 浅黄橙	鉄釉 大窯1
37	292	27次	SD04	中層	染付磁器	碗	輸入系		(2.5)		5%	明緑灰(釉) 灰白	
37	293	27次	SD04		染付磁器	碗	輸入系	(13.2)	(1.6)		10%	明青灰(釉) 灰白	
37	294	27次	SD04		染付磁器	碗	国産		(4.3)	(4.3)	15%	明緑灰(釉) 灰白	
37	295	27次	SD04	下層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(15.5)	(4.2)	5%以下	明緑灰(釉) 灰白	蓮弁文
37	296	27次	SD04	上層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(9.7)	(2.7)	5%以下	明オリーブ灰(釉)　灰白	雷文帯
37	297	27次	SD04	上層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(3.3)	(4.2)	高台完形	明オリーブ灰(釉)　灰白	細描蓮弁文 外底面の目釉剥ぎ
37	298	27次	SD04	下層	中世陶器	山茶碗			(2.2)	7.2	底部60%	灰白(釉) 灰白	自然釉
37	299	27次	SD04	中層	中世陶器	山茶碗			(1.6)	(6.8)	底部30%	灰白	
37	300	27次	SD04		陶器	擂鉢	瀬戸	29.6			10%	灰白	鉄釉 後4期

Tab. 10　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（８）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調	備考
37	301	27次	SD04		陶器	擂鉢	瀬戸	28.0			10%	灰白	鉄釉 後4期～大窯1
37	302	27次	SD04		陶器	擂鉢	不明	35.0			10%	灰白	鉄釉
37	303	27次	SD04	下層	陶器	擂鉢	瀬戸		(4.8)	(8.4)	底部30%	褐灰(釉) にぶい黄橙	鉄釉 後4期～大窯1
37	304	27次	SD04	D32	陶器	擂鉢	瀬戸		(8.8)	(3.3)	底部70%	灰赤(釉) 灰白	鉄釉 後4期～大窯1
37	305	27次	SD04		陶器	擂鉢	瀬戸		(3.1)	(6.0)	底部25%	暗赤褐(釉) 灰白	鉄釉 後4期～大窯1
37	306	27次	SD04	中層	陶器	擂鉢	志戸呂	(26.0)	9.8	(10.0)	30%	明赤褐	
38	307	27次	SD04	上層	陶器	擂鉢？	常滑		(7.3)	(14.6)	25%	赤	
38	308	27次	SD04	下層	陶器	擂鉢	志戸呂		(5.1)	(10.6)	底部25%	橙	
38	309	27次	SD04	中層	陶器	擂鉢	志戸呂		(4.2)	(12.9)	底部20%	橙	
38	310	27次	SD04	下層	陶器	甕	常滑	(34.2)	(10.5)		口縁部20%	赤	
38	311	27次	SD04		陶器	甕	常滑	35.0			10%	褐灰	
38	312	27次	SD04		陶器	甕	常滑	40.4			10%	灰	
38	313	27次	SD04		陶器	甕	常滑	40.6			10%	暗褐	
38	314	27次	SD04		陶器	甕	常滑	41.4			10%	黒褐	
39	315	27次	SD04	中層	陶器	甕	常滑		(12.4)		10%	灰黄	
39	316	27次	SD04		陶器	甕	常滑		32.4			赤	
39	317	27次	SD04		陶器	甕	常滑	18.6			10%	灰	
39	318	27次	SD04	中層	陶器	壺	瀬戸	(10.7)	(5.1)		10%	にぶい橙(釉) 橙	後4期～大窯1
39	319	27次	SD04	下層	陶器	壺	常滑	(13.0)	(5.0)		10%	褐灰	
39	320	27次	SD04		陶器	甕	常滑		(9.9)		体部10%	灰	
39	321	27次	SD04	下層	陶器	壺甕	常滑		(3.4)	19.2	底部60%	にぶい黄橙	
39	322	27次	SD04	中層	陶器	鉢	常滑		(3.7)	(13.0)	底部20%	赤	赤物
39	323	27次	SD04	上層	須恵器	坏		(13.6)	(4.0)	(9.0)	15%	灰	古代
39	324	27次	SD04		須恵器	坏			(2.0)	(10.2)		灰白	古代
39	325	27次	SD04	下層	須恵器	坏蓋		(15.6)	(2.1)		10%	灰白	古代
39	326	27次	SD04	中層	須恵器	坏蓋		(16.7)	(3.0)		小片	灰白	古代
39	327	27次	SD04	中層	須恵器	壺			(7.2)		胴部10%	灰	古代
39	328	27次	SD04		須恵器	壺？			(6.6)	14.2	10%	灰	古代
39	329	27次	SD04		須恵器	壺			(2.5)	(6.8)	底部75%	灰白	古代
39	330	27次	SD04		須恵器	甕		(22.3)	(6.5)		口縁～胴部10%	灰	古代
39	331	27次	SD04		須恵器	甕			(10.6)		5%以下	灰白	古代
39	332	27次	SD04	中層	瓦	丸瓦		長(8.9)	巾(7.6)	厚2.6	10%	灰	布目 コビキ不明
39	333	27次	SD04	中層	瓦	平瓦		長(12.8)	巾(7.4)	厚1.8		灰白	
39	334	27次	SD04		瓦	塼瓦		長(12.7)	巾(7.7)	厚3.9	20%	灰	
39	335	27次	SD04	下層	石製品	石臼		(36.3)	(8.4)		20%	褐灰	
39	336	27次	SD04	下層	銭貨	—		2.5		厚0.1			元祐通宝または，元符通宝
39	337	27次	SD04	下層	銭貨	—		(2.4)		厚0.1			おそらく永楽通宝
39	338	27次	SD04	D25	金属製品	？		長7.15	巾0.9	厚0.05			穿孔5 2.35g
39	339	27次	SD04	上層	金属製品	？		長3.6	巾1.0	厚0.25			穿孔1 1.22g
40	340	27次	SD04	下層	木製品	漆器椀		18.2	(5.0)		10%		内:黒　外:黒
40	341	27次	SD04		木製品	樋側板		長17.8cm　巾4.7cm　高1.1cm					
40	342	27次	SD04		木製品	円板状木製品		長24.9cm　巾9.3cm　高1.3cm					

Tab. 11　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（9）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調	備考
40	343	27次	SD04		木製品	下駄		長1.1cm, 幅3.6cm, 厚さ3.7cm					
40	344	27次	SD04		木製品	不明部材		長15.0cm, 幅7.7×6.2cm					
40	345	27次	SD04		木製品	棒状木製品		長13.1cm 巾4.7cm 高1.2cm					
40	346	27次	SD04		木製品	不明部材		長17.5cm 巾0.7cm~4.7cm 厚1cm~2cm					
45	347	27次	SD19南		土師器	甕			(3.4)		5%以下	浅黄	古代
45	348	27次	SD19東		須恵器	坏		(15.8)	(3.4)		10%	灰	古代
45	349	27次	SD19西		須恵器	坏		14.9	(2.2)		5%	褐灰	古代
45	350	27次	SD23		土製品	土錘		長(4.6)	巾(2.0)	厚0.8	95%	灰白	
47	351	27次	SF01	中層	陶器	碗	美濃	(12.8)	(5.2)		25%	黒(釉) 浅黄	鉄釉 美濃2
47	352	27次	SF01	中層	染付磁器	碗	肥前	(10.4)	(5.3)	(4.2)	25%	灰白(釉) 灰白	外底部に渦福 17c~
47	353	27次	SF01	中層	貿易陶磁器	白磁碗			(2.0)	(6.8)	底部15%	明緑灰(釉) 灰白	
47	354	27次	SF01	中層	貿易陶磁器	白磁杯			(2.4)	(4.2)	底部25%	明褐灰(釉) 灰白	
47	355	27次	SF01		陶器	擂鉢	瀬戸	29.4				暗赤褐(釉) 灰白	鉄釉 瀬戸3小期
47	356	27次	SF01		陶器	擂鉢	瀬戸	39.0				暗赤褐(釉) 浅黄	鉄釉 瀬戸6小期
47	357	27次	SF01	中層	陶器	擂鉢	瀬戸		(4.8)	(10.0)	20%	暗赤褐(釉) 灰白	鉄釉 大窯2~
47	358	27次	SF01	中層	瓦	軒瓦		長(13.3)	巾(7.5)	厚2.2	70%	灰	瓦当欠損
47	359	27次	SF01	下層	瓦	丸瓦		長(16.4)	巾(13.5)	厚2.0	70%	黒褐	布目 コビキB
47	360	27次	SF01	下層	瓦	丸瓦		長(14.6)	巾(11.9)	厚2.4	50%	暗褐	布目 コビキB
47	361	27次	SF01	下層	瓦	平瓦		長(8.5)	巾(8.8)	厚2.0	10%	灰	
47	362	27次	SF01	下層	木製品	板		長34.25cm 巾9.4cm 高2.3cm					
49	363	27次	SF02	中層	土師器	皿		(9.8)	1.9	6.4	50%	浅橙	手捏ね
49	364	27次	SF02	下層	土師器	皿		(12.8)	2.0	(7.4)	底部20%	浅黄橙	轆轤
49	365	27次	SF02	中層	土師器	皿			(2.7)	(6.4)	底部25%	灰白	轆轤
49	366	27次	SF02	下層	土師器	内耳鍋		(18.6)	(12.6)		10%	灰白	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
49	367	27次	SF02	下層	土師器	内耳鍋		(21.1)	(7.2)		10%	浅黄橙	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
49	368	27次	SF02	中層	土師器	内耳鍋		19.6	12.2	(15.4)	70%	暗灰	口縁部が外反しないタイプ
49	369	27次	SF02	下層	土師器	高坏			(5.1)		50%	橙	古墳時代
49	370	27次	SF02	下層	陶器	碗	瀬戸	(15.1)	4.9	5.0	20%	灰白(釉) 灰白	後4期
49	371	27次	SF02	下層	陶器	皿	瀬戸	(10.6)	(3.7)		20%	灰白(釉) 灰白	後4期
49	372	27次	SF02	中層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(4.0)	5.2	30%	オリーブ灰(釉) 灰白	見込み牡丹刻印 外底部釉剥ぎ
49	373	27次	SF02	中層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(3.7)	5.3	30%	オリーブ灰(釉) 灰白	見込み牡丹刻印 外底部釉剥ぎ
49	374	27次	SF02	中層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(3.6)		口縁部10%	オリーブ灰(釉) 灰白	蓮弁文
49	375	27次	SF02	中層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(1.9)	(5.0)	底部60%	灰白(釉) 灰白	見込み刻印(花?)
49	376	27次	SF02	下層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(4.8)	(6.6)	底部20%	オリーブ灰(釉) 灰白	草花文
49	377	27次	SF02	中層	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系	(14.4)	(4.1)		10%	オリーブ灰(釉) 灰白	雷文帯
49	378	27次	SF02	中層・下層	陶器	擂鉢	志戸呂	(34.2)	(10.1)		口縁部10%	浅黄(釉)	鉄釉
49	379	27次	SF02		陶器	擂鉢?	瀬戸	29.4				灰黄	鉄釉 大窯1
49	380	27次	SF02		陶器	擂鉢?	瀬戸	26.6			10%	浅黄	鉄釉 後4期
49	381	27次	SF02		陶器	甕	常滑	40.0			10%	灰	
49	382	27次	SF02	下層	陶器	甕	常滑		(12.3)		10%	暗褐	
49	383	27次	SF02		陶器	甕	常滑	24.0			10%	褐灰	
50	384	27次	SF02		陶器	甕	常滑	37.6			10%	にぶい橙	

Tab. 12　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（10）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調	備考
50	385	27次	SE02		陶器	甕	常滑	(30.0)			10%	オリーブ黒(釉) 灰	
50	386	27次	SE02	中層	陶器	壺	常滑	(12.0)	(9.2)		10%	灰黄褐	
50	387	27次	SE02	下層	陶器	甕	常滑		(4.9)	(10.0)	底部30%	灰	
50	388	27次	SE02	下層	須恵器	甕		(15.6)	(13.5)		15%	褐灰	
50	389	27次	SE02	下層	須恵器	壺			(4.3)		肩部20%	緑灰	
50	390	27次	SE02	下層	須恵器	瓶				6.1	45%	明褐灰	古墳
50	391	27次	SE02	下層	須恵器	鉢?			(2.1)	(7.3)	高台完形	にぶい黄橙	
50	392	27次	SE02	下層	須恵器	鉢			(2.8)	(9.2)	底部20%	灰	
50	393	27次	SE02	下層	石製品	石鍋			(4.9)		15%		420g
50	394	27次	SE02	中層	石	温石?		長(11.8)	巾(8.0)	厚1.9			250g
50	395	27次	SE02	最下層	石製品	石鍋?		長(7.7)	巾(8.9)	厚(2.0)	5%以下		96g
50	396	27次	SE02	下層	石	?		長(13.6)	巾(7.5)	厚(4.6)			
51	397	27次	SE02	下層	木製品	漆器皿		(1.2)		7.0	20%		内:黒 外:黒 模様:朱
51	398	27次	SE02	下層	木製品	漆器皿		11.8	2.8	8.0	30%		内地:黒 内:赤 外:赤 外高台:黒
51	399	27次	SE02	下層	木製品	桶側板		長10.6cm 巾4.8cm 厚1.6cm					
51	400	27次	SE02	下層	木製品	桶底板		縦14.6cm 横3.8cm 厚9.5mm					
51	401	27次	SE02	下層	木製品	部材残片		長18.9cm 径2.5cm 2.6cm					
51	402	27次	SE02	下層	木製品	部材残片		長13.0cm 巾3.0cm 厚1.25cm					
54	403	27次	SE03	4層 D34	土師器	皿		12.0	2.8	6.6	ほぼ完形	灰白	轆轤
54	404	27次	SE03	上層	土師器	皿		(11.8)	2.6	(6.8)	15%	灰白	轆轤
54	405	27次	SE03	上層	土師器	皿		(11.8)	2.7	(6.5)	30%	浅黄橙	轆轤
54	406	27次	SE03	中層	土師器	皿		(12.8)	2.8	(6.6)	20%	灰白	轆轤
54	407	27次	SE03	上層	土師器	皿		(13.6)	3.0	(7.4)	10%	淡黄	轆轤
54	408	27次	SE03	中層	土師器	皿		(12.3)	2.8	7.1	10%	灰白	轆轤
54	409	27次	SE03	上層	土師器	皿		(12.1)	3.0	(7.6)	30%	浅黄橙	轆轤
54	410	27次	SE03	中層	土師器	皿			(2.3)	(7.8)	底部20%	灰白	轆轤
54	411	27次	SE03	中層	土師器	皿			(2.0)	(7.2)	底部30%	浅黄橙	轆轤
54	412	27次	SE03	中層	土師器	皿		(11.8)	2.2	(8.4)	10%	灰白	轆轤
54	413	27次	SE03	中層	土師器	皿		(10.1)	1.9	(6.6)	20%	灰白	轆轤
54	414	27次	SE03	上層	土師器	皿		(11.6)	2.4	(6.2)	5%	灰白	轆轤
54	415	27次	SE03	中層	土師器	皿		(10.2)	2.7	6.2	60%	灰白	轆轤
54	416	27次	SE03	中層	土師器	皿		10.5	2.4	6.5	ほぼ完形	灰白	轆轤
54	417	27次	SE03	下層	土師器	皿		(10.5)	2.4	(5.9)	30%	灰白	轆轤
54	418	27次	SE03	上層	土師器	内耳鍋		(21.9)	(5.1)		口縁部10%	灰白	口縁部が外反しないタイプ
54	419	27次	SE03	下層	陶器	碗	瀬戸	(11.3)	6.6	3.6	30%	赤黒(釉) 灰白	鉄釉 大窯2
54	420	27次	SE03	下層	陶器	碗	志戸呂	(7.8)	3.7	(2.5)	60%	オリーブ黒(釉) 灰	鉄釉
54	421	27次	SE03	中層	陶器	皿	瀬戸		(1.5)	(6.0)	底部35%	黒褐(釉) 灰白	鉄釉 内外に重焼痕 大窯2
54	422	27次	SE03	中層	陶器	碗	瀬戸		(1.7)	(4.3)	底部50%	暗オリーブ(釉) 灰白	灰釉 大窯2
54	423	27次	SE03	下層	青磁	碗	龍泉窯系		(5.3)		10%	明褐灰(釉) 灰白	
54	424	27次	SE03	上層	青磁	皿	龍泉窯系		(1.2)		5%以下	オリーブ灰(釉) 褐灰	輪花・草花文
54	425	27次	SE03		陶器	擂鉢	瀬戸	31.0			10%	灰黄	鉄釉 大窯2
54	426	27次	SE03	中層	陶器	鉢	志戸呂		(2.2)	(14.1)	底部20%	にぶい黄褐	

Tab. 13　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（11）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調	備考
54	427	27次	SF03	上層	瓦質土器	火鉢			(5.7)	4.9		暗緑灰	
54	428	27次	SF03	中層	瓦	丸瓦		長(11.9)	巾(10.2)	厚2.4	20%	暗灰	
54	429	27次	SF03	中層	瓦	丸瓦		長(12.7)	巾(9.8)	厚2.0	10%	灰	
54	430	27次	SF03	上層	金属製品	釘		長(9.5)	巾(2.5)	厚2.0			44.85g
54	431	27次	SF03	下層	木製品	漆器皿		26.8	1.5		10%		内:赤 外:赤
57	432	27次	SK06		染付磁器	碗	国産	(8.3)	(2.8)		口縁部20%	明緑灰(釉) 灰白	
57	433	27次	SK06		陶器	擂鉢	瀬戸	(38.5)	(13.6)		10%	赤褐(釉) 浅黄	19c～
57	434	27次	SK06		陶器	擂鉢	瀬戸		(6.0)	(10.0)	底部20%	赤灰(釉) 浅黄橙	鉄釉 大窯1～2
57	435	27次	SK06		瓦	丸瓦		長(20.1)	巾(5.6)	厚2.1	40%	灰	
57	436	27次	SK06		瓦	丸瓦		長(10.8)	巾(8.8)	厚2.3	20%	灰黄	
57	437	27次	SK06		瓦	平瓦		長(10.0)	巾(7.5)	厚2.6	25%	灰	
57	438	27次	SK06		瓦	平瓦		長(11.7)	巾(12.5)	厚2.3	20%	灰	
60	439	27次	SK09		土師器	皿		14.2	(3.0)		50%	灰白	手捏ね
60	440	27次	SK09		陶器	碗	瀬戸		(6.3)		15%	黒褐(釉) 浅黄橙	鉄釉 後4期
60	441	27次	SK09		土師器	茶釜型鍋			(5.7)		体部10%	灰白	
60	442	27次	SK21		土師器	内耳鍋		(19.3)	(11.1)		17%	灰白	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
60	443	27次	SK21		土師器	内耳鍋		(18.2)	(8.0)		25%	にぶい橙	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
60	444	27次	SK21		陶器	甕	常滑	27.0				暗灰黄	
60	445	27次	SK22		土師器	皿		(9.2)	(1.9)	(2.6)	30%	にぶい橙	手捏ね
60	446	27次	SK22		土師器	皿		14.4	(2.7)		20%	にぶい橙	轆轤
60	447	27次	SK22		土師器	内耳鍋		(20.4)	(8.0)		20%	灰白	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
60	448	27次	SK22		土師器	内耳鍋		(20.7)	(6.8)		15%	灰白	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
60	449	27次	SK22		土師器	内耳鍋		(22.1)	(7.2)		20%	にぶい黄橙	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
60	450	27次	SK22		陶器	皿	瀬戸	(9.5)	(2.0)		50%	オリーブ(釉) 灰白	灰釉 後4期
60	451	27次	SK22		陶器	片口鉢	瀬戸	(28.6)	(4.8)		20%	暗オリーブ灰(釉) 灰	鉄釉 大窯4
60	452	27次	SK22		中世陶器	山茶碗			(3.0)	(8.2)	底部ほぼ完形	灰白	東濃型 高台八の字
60	453	27次	SK25		土師器	皿		(8.2)	1.6	(6.1)	25%	浅黄橙	轆轤
60	454	27次	SK28		土師器	内耳鍋		(19.1)	(7.9)		15%	灰白	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
69	455	27次	SP161 (SH01)		土師器	皿		(11.9)	(1.6)	(8.1)	10%	灰白	轆轤
69	456	27次	SP380 (SH01)		陶器	擂鉢	志戸呂		(2.6)		口縁部5%	にぶい赤褐	
69	457	27次	SP195 (SH02)		土師器	皿			(1.2)	(5.4)	底部50%	灰白	轆轤
69	458	27次	SP195 (SH02)		土師器	皿		(12.9)	(2.0)	(6.8)	底部20%	灰白	轆轤
69	459	27次	SP763 (SH04)		土師器	皿		(11.9)	(2.1)		10%	灰白	内外摩滅
69	460	27次	SP752 (SH04)		土師器	皿			(1.8)	(6.0)	底部25%	灰白	轆轤
69	461	27次	SP635 (SH01)		陶器	皿	瀬戸		(1.3)	(6.1)	底部15%	オリーブ黄(釉) 灰白	灰釉 後4期
69	462	27次	SP102 (SA01)		土師器	皿			(1.6)	(4.8)	底部70%	灰白	轆轤
69	463	27次	SP100 (SA01)		銭貨	—		(2.4)		厚0.1			皇□通□
69	464	27次	SP257 (SA02)		土師器	皿			(0.9)	(5.4)	底部50%	浅黄橙	轆轤
69	465	27次	SP257 (SA02)		土師器	皿			(0.8)	(5.2)	底部85%	浅黄橙	轆轤
69	466	27次	SP257 (SA02)		土師器	皿			(0.9)	(5.4)	底部75%	橙	轆轤
69	467	27次	SP399 (SA03)		土師器	茶釜型鍋			(7.7)		体部15%	浅黄橙	
69	468	27次	SP560 (SA07)		瓦	平瓦		長(13.0)	巾(10.5)	厚1.9	20%	灰	

Tab. 14　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（12）

Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調	備考
69	**469**	27次	SP613 (SA07)		瓦	平瓦		長(13.4)	巾(10.2)	厚2.2	20%	灰	
71	**470**	27次	SX01西		土師器	茶釜型鍋			(12.5)		20%	灰白	
71	**471**	27次	SX01		土師器	茶釜型鍋		14.6			口縁～体部 上部ほぼ完形	灰白	609と同一個体か
71	**472**	27次	SX01		土師器	茶釜型鍋				7.6	口縁～下部 底部ほぼ完形	灰白	608と同一個体か
71	**473**	27次	SX01西		土師器	茶釜型鍋			(6.5)		10%	にぶい黄橙	
71	**474**	27次	SX02		土師器	皿			(0.9)	(5.6)	底部80%	灰白	轆轤
71	**475**	27次	SX02		土師器	皿		(12.4)	2.9	(5.7)	50%	灰白	轆轤
71	**476**	27次	SX02		土師器	皿		(11.6)	(2.5)	(5.8)	30%	灰白	轆轤
81	**477**	27次	SP299		土師器	皿		(8.2)	(1.5)	(1.4)	口縁部30%	灰白	手捏ね
81	**478**	27次	SP518		土師器	皿		(13.0)	(2.6)	(7.2)	10%	浅黄橙	手捏ね
81	**479**	27次	SP071		土師器	皿			(1.3)	4.5	底部完形	灰白	轆轤
81	**480**	27次	SP547		土師器	皿			(1.1)	(6.5)	底部75%	灰白	轆轤
81	**481**	27次	SP791		土師器	皿			(1.7)	(5.8)	底部30%	浅黄橙	轆轤
81	**482**	27次	SP516		土師器	皿			(1.0)	(6.3)	底部50%	灰白	轆轤
81	**483**	27次	SP760		土師器	皿		(9.8)	(3.2)		10%	灰白	内外摩滅
81	**484**	27次	SP390	D4	土師器	内耳鍋		(21.1)	(10.9)		20%	浅黄橙	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
81	**485**	27次	SP346		土師器	甕		(17.6)	(2.0)		10%	にぶい橙	古代？
81	**486**	27次	SP476		陶器	皿	瀬戸		(2.6)			オリーブ灰(釉) 灰白	灰釉 後4期
81	**487**	27次	SP799		陶器	皿	瀬戸	(10.0)	(1.9)		口縁部10%	灰白(釉) 灰白	灰釉(発色悪い) 大窯1
81	**488**	27次	SP299		陶器	皿	瀬戸	(13.0)	(2.5)		口縁部10%	灰白(釉) 灰白	灰釉 後4期
81	**489**	27次	SP626		陶器	皿	志戸呂	(9.6)	(1.7)		口縁部10%	灰白(釉) 灰白	長石釉
81	**490**	27次	SP387		陶器	碗	瀬戸	(12.0)	(4.8)		15%	明赤褐(釉) 灰白	鉄釉 後4期～大窯1
81	**491**	27次	SP654		陶器	碗	瀬戸	(9.7)	(4.1)		10%	黒褐(釉) 浅黄橙	鉄釉 大窯1
81	**492**	27次	SP722		貿易 陶磁器	青磁碗	龍泉窯系		(11.1)	(2.9)	10%	オリーブ灰(釉) 灰白	雷文帯
81	**493**	27次	SP601		須恵器	鉢		(11.3)	(4.1)		5%以下	灰白	
81	**494**	27次	SP753		須恵器	坏			(1.2)	(10.0)	底部15%	灰白	古代
81	**495**	27次	SP518		須恵器	坏			(1.0)	(10.0)	底部12%	灰	古代
81	**496**	27次	SP391		木製品	桶側板		縦25.9cm　横上端3.75cm横下端1.8cm　厚1.1cm					
81	**497**	27次	SP391		木製品	桶側板		縦25.8cm　横上端3.9cm横下端2.9cm　厚0.85mm					
85	**498**	39次	SD01	D1	土師器	内耳鍋		20.5	(11.8)		60%	浅黄橙	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
85	**499**	39次	SD01	D7	土師器	内耳鍋		(21.1)	(11.4)		25%	灰白	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
85	**500**	39次	SD01	D8	土師器	内耳鍋		(19.0)	(5.1)		10%	にぶい黄橙	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
85	**501**	39次	SD01	D9	鉄製品	鉄滓		長(6.25)	巾(5.6)	厚3.55			103.2g
85	**502**	39次	SD02	D3	鉄製品	鉄滓		長(8.5)	巾(7.2)	厚4.95			238g
87	**503**	39次	SD03	D14	陶器	擂鉢	志戸呂		(12.3)	6.8	30%	淡橙	
87	**504**	39次	SD03	20層+D14	陶器	擂鉢	志戸呂		(11.5)	(3.7)	20%	浅黄橙	
87	**505**	39次	SD03	堰土内	土師器	皿		(9.6)	1.9	(1.6)	35%	灰黄褐	手捏ね
87	**506**	39次	SD03	D9	土師器	内耳鍋		(20.6)	11.5		50%	浅黄橙	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
87	**507**	39次	SD03	D10	土師器	内耳鍋		19.4	(11.9)		50%	にぶい黄橙	口縁部が「く」の字に外反するタイプ
87	**508**	39次	SD03	D11	土師器	茶釜型鍋		(10.5)	(9.6)		35%	にぶい黄橙	
87	**509**	39次	SD03	D2	土師器	茶釜型鍋			(11.0)	16.2	40%	にぶい黄褐	
87	**510**	39次	SD03	堰土内	木製品	容器？		長さ7.6cm　幅4.3cm　高さ3.5cm					

Tab. 15　浜松城跡 27-39 次調査出土遺物観察表（13）

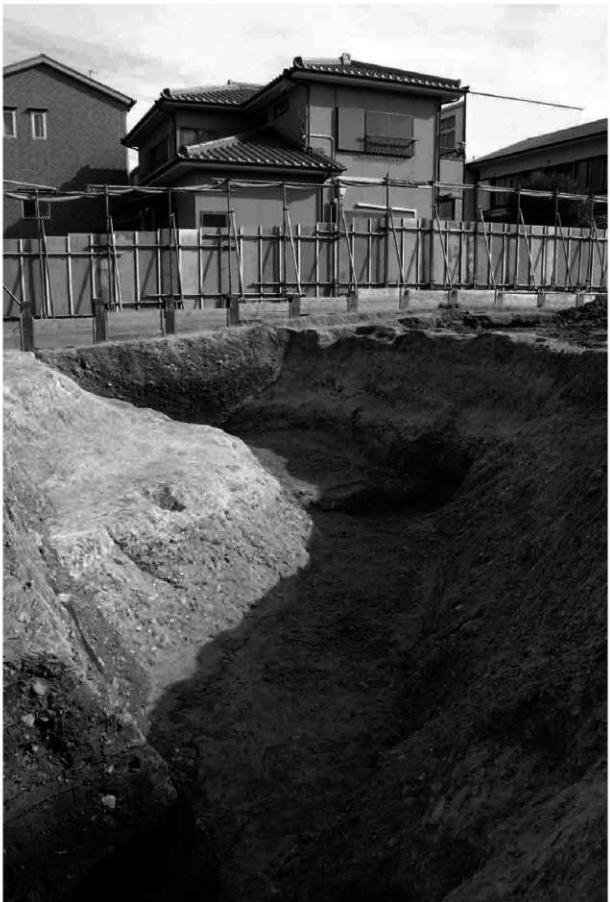
Fig	遺物番号	調査区	遺構	層位・ドット番号	種別	器種	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調	備考
87	511	39次	SD03	埋土内	木製品	杭		長さ14.7cm 径5.75×4.3cm					
87	512	39次	SD03	埋土内	木製品	杭		長さ17.3cm 径4.05×4.05cm					
87	513	39次	SD03	D15	木製品	丸棒		長さ13.8cm 径2.8×2.85cm					
87	514	39次	SD03	D16	木製品	丸棒		長さ24cm 幅3.05cm 厚さ1.4cm					
89	515	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	軒平		長(4.7)	巾(11.9)	厚1.8	瓦当10%	灰白	唐草文
89	516	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	桟瓦		長(8.5)	巾(7.2)	厚4.95	15%	灰	
89	517	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	丸瓦		長(20.7)	巾(9.1)	厚1.7	20%	灰白	布目 コビキB
89	518	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	丸瓦		長(10.7)	巾(6.5)	厚2.1	5%以下	灰白	布目 コビキB
89	519	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(15.4)	巾(17.3)	厚2.1	35%	灰白	
89	520	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(16.8)	巾(14.6)	厚2.1	35%	灰白	
90	521	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(19.1)	巾(11.5)	厚2.0	35%	灰白	
90	522	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(17.2)	巾(14.0)	厚1.9	25%	灰白	
90	523	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(12.1)	巾(14.0)	厚2.0	20%	灰白	
90	524	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(13.3)	巾(10.0)	厚1.6	15%	灰白	
90	525	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(13.3)	巾(13.6)	厚2.0	20%	灰	
90	526	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(13.0)	巾(9.6)	厚2.0	10%	灰白	
91	527	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(14.6)	巾(13.5)	厚2.1	20%	灰白	
91	528	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	丸瓦		長(8.6)	巾(8.2)	厚1.8	5%以下	暗灰黄	布目
91	529	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(18.8)	巾20.5	厚2.0	50%	灰	
91	530	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(13.8)	巾(18.2)	厚1.9	20%	灰白	
91	531	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(15.1)	巾(11.2)	厚2.0	20%	灰白	
91	532	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(13.7)	巾(13.5)	厚2.3	15%	灰白	
92	533	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(14.7)	巾(10.5)	厚2.1	15%	灰白	
92	534	39次	SX01 (瓦敷遺構)		瓦	平瓦		長(21.5)	巾(11.8)	厚1.5	25%	灰	
92	535	39次		6層	瓦	平瓦		長(9.8)	巾(7.6)	厚2.1	5%以下	灰	
92	536	39次	表土掘削		陶器	擂鉢	瀬戸		(4.9)	(14.5)	10%	にぶい黄褐(釉) 灰白	鉄釉 19c末以降
92	537	39次	機械掘削	東側	染付磁器	皿	国産		(2.7)	(9.8)	20%	灰白	プリント 19c末以降
92	538	39次	機械掘削	東側003	貿易陶磁器	青磁碗	龍泉窯系	(12.4)	(5.7)		30%	灰オリーブ(釉) 灰白	鎬蓮弁文(剣先文) 15c～16c
92	539	39次	攪乱内	東側006	染付磁器	碗	国産		(2.5)	3.0	20%	灰白(釉) 灰白	プリント 19c末以降
92	540	39次	表土掘削	西半	土師器	皿			(1.2)	(5.7)	30%	灰白	轆轤
92	541	39次	機械掘削	東側003	陶器	壺			(5.1)	(12.1)	10%	淡黄	長石釉
92	542	39次	機械掘削	東側003	土師器	鍋釜			(4.1)		5%	にぶい橙	
93	543	39次	表土掘削	西半	須恵器	甕				(3.0)	5%以下	灰白	
93	544	39次	表土掘削		土師器	皿		(12.1)	(6.2)	2.7	30%	灰白	轆轤
93	545	39次	表土掘削	西半	陶器	皿	瀬戸		(6.6)	(1.6)	5%	灰褐(釉) 灰白	鉄釉 大窯4
93	546	39次	機械掘削	東側	陶器	碗			(11.4)	(3.4)	10%	灰オリーブ(釉) にぶい褐	
93	547	39次	攪乱内	東側	瓦	丸瓦		長(5.0)	巾(8.7)	厚2.0	10%	灰白	布目
93	548	39次	精査(中央)溝		土師器	甕			(2.8)		5%以下	にぶい黄橙	古墳～古代？
93	549	39次	機械掘削 (東側)		陶器	壺		(6.9)	(3.6)		10%	灰オリーブ(釉) 灰白	鉄釉
93	550	39次	精査(中央)溝		染付磁器	碗		(11.8)	(2.5)		5%	灰白	プリント 19c末以降
93	551	39次	攪乱内東側		陶器	仏具			(9.4)	(4.3)	75%	灰オリーブ(釉) 灰白	鉄釉 19c末以降
93	552	39次	北壁西半		瓦	軒丸		長(5.3)	巾(5.2)	厚1.6	瓦当5%	灰	隅丸目結紋

図　版
PLATE

1　27 次調査区（A区）　全景　（真俯瞰北上）

2　27 次調査区（A区）　完掘状況　（南東から）

PL. 2



SD01　完掘状況　（北西から）

1　SD01　掘削状況　（廃絶時 北東から）

2　SD01　完掘状況　（東から）

PL. 4

1　SD01　断面　（西から）

2　SD01　作業状況　（東から）

SD02　完掘状況　（南東から）

PL. 6

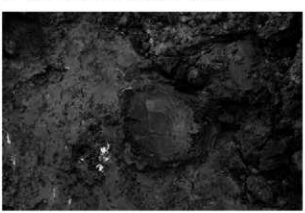
1　SD02　掘削状況　（廃絶時 北東から）

2　SD02　完掘状況　（北東から）

1　SD02　断面　（南から）

2　SD02　作業状況　（南から）

3　SD02　遺物（104）出土状況　（西から）



4　SD02　遺物（140）出土状況　（西から）

PL. 8

1　SD04　完掘状況　（南西から）

2　SD04　遺物（186）出土状況　（北西から）

3　SD04　遺物（225）出土状況　（南西から）

4　SE01　断割断面　（南から）

5　SE01　断面上層　（南から）

6　SE01　井筒出土状況　（南から）

1　SK02　礫出土状況　（南から）

2　SK02　断面　（南から）

3　SK06　断面　（東から）

4　SK20　断面　（南東から）

5　SK21　断面　（南から）

1　SH01　完掘状況　（南から）

2　SP68（SH01）　断面　（南から）

3　SP76（SH01）　断面　（西から）

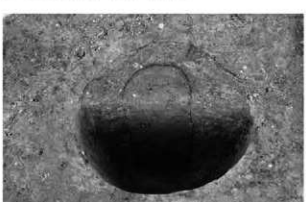
4　SP167（SH01）　礫出土状況　（南から）

5　SP420（SH01）　断面　（北から）

1　SH02　完掘状況　（南から）

2　SP184（SH02）　断面　（北から）

3　SP242（SH02）　断面　（北から）



4　SP497（SH02）　断面　（南から）

5　SP500（SH02）　断面　（南東から）

1　SA02　完掘状況　（南から）

2　SP234（SA02）　断面　（東から）

3　SP248（SA02）　断面　（東から）

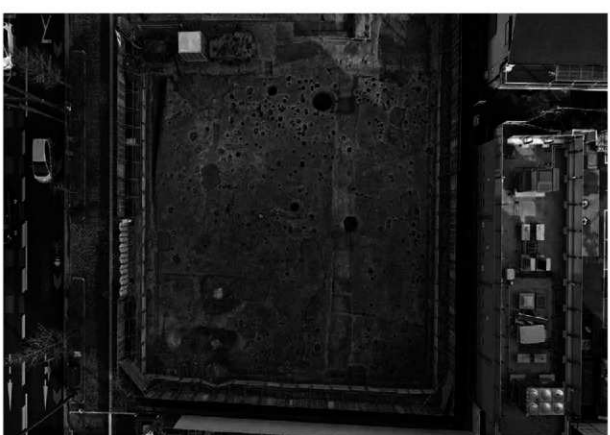
4　SP71, SP72　断面　（南東から）

5　SP94　断面　（東から）

6　SP150　礫出土状況　（南から）

7　SP407（SA01）　断面　（南から）

1　27 次調査区（B 区）と元城町東照宮（引間城推定地）　遠景　（南西から）



2　27 次調査区（B 区）　全景　（真俯瞰北上）

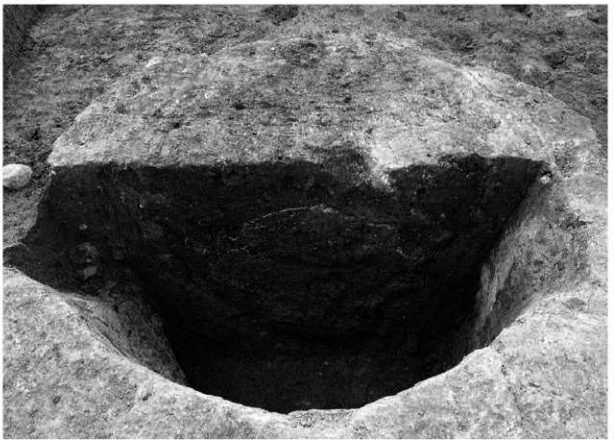
SD04　完掘状況　（南東から）

1　SD04　完掘状況　（北から）

2　SD04　遺物（283）出土状況　（西から）

3　SD04　遺物（254）出土状況　（西から）

4　SD04　断面　（南から）



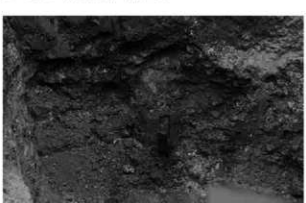
1　SE02　断面上層　（南から）

2　SE02　断面中層　（東から）

1　SE03　断割断面　（南から）

2　SE03　断面上層　（南から）

3　SE03　断面中層　（南から）



4　SE03　井筒出土状況　（南から）

5　SE03　遺物（364）出土状況　（南から）

1　SK22　断面　（南から）

2　SK22　完掘状況　（東から）

3　SK25　断面　（南から）

4　SK25　完掘状況　（南から）

5　SK26　断面　（南から）

6　SK28　遺物（454）・礫出土状況　（南から）

7　SK33　断面　（南西から）

8　SK33　完掘状況　（西から）

1　SH04　完掘状況　（南東から）

2　SP638（SH04）　断面　（南から）

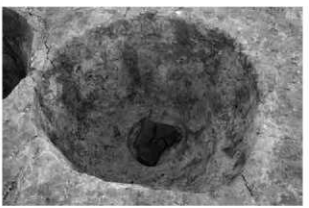
3　SP641（SH04）　礫出土状況　（南から）

4　SP742（SH04）　断面　（南から）

5　SP746（SH04）　断面　（南から）

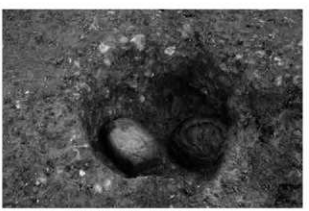
1　SA07　完掘状況　（東から）

2　SP554（SA07）　断面　（南から）

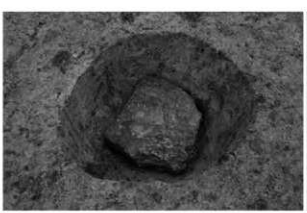


3　SP560（SA07）　遺物出土状況　（東から）

4　SP428　断面　（南東から）



5　SP717　遺物出土状況　（南東から）



6　SP797（SA04）　礫出土状況　（南から）

7　SP801　礫出土状況　（北から）

39 次調査区　全景　（南東から）

PL. 22

1　SD01　遺物出土状況　（南西から）

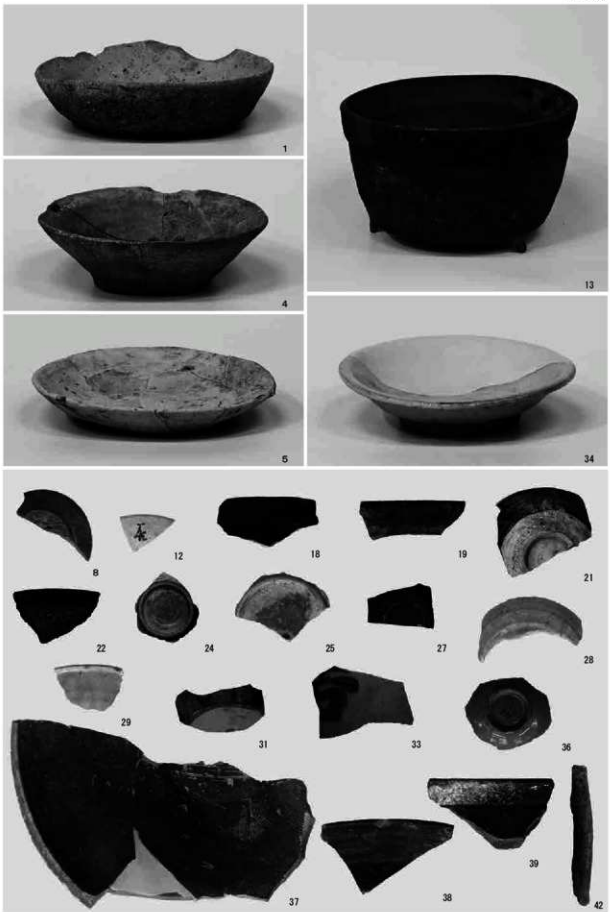
2　SD01　完掘状況　（南西から）

1　SD03　遺物出土状況　（南西から）

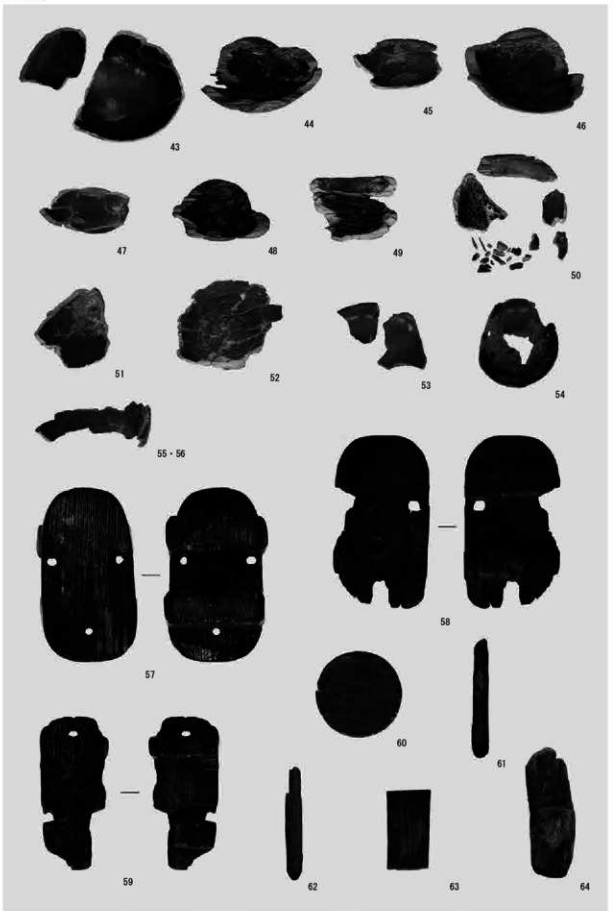
2　SD03　完掘状況　（南西から）

1　小穴群　完掘状況　（南東から）

2　39 次調査区北壁　断面　（南から）



SD01　出土遺物（1）



SD01　出土遺物（2）

68

72

88

94

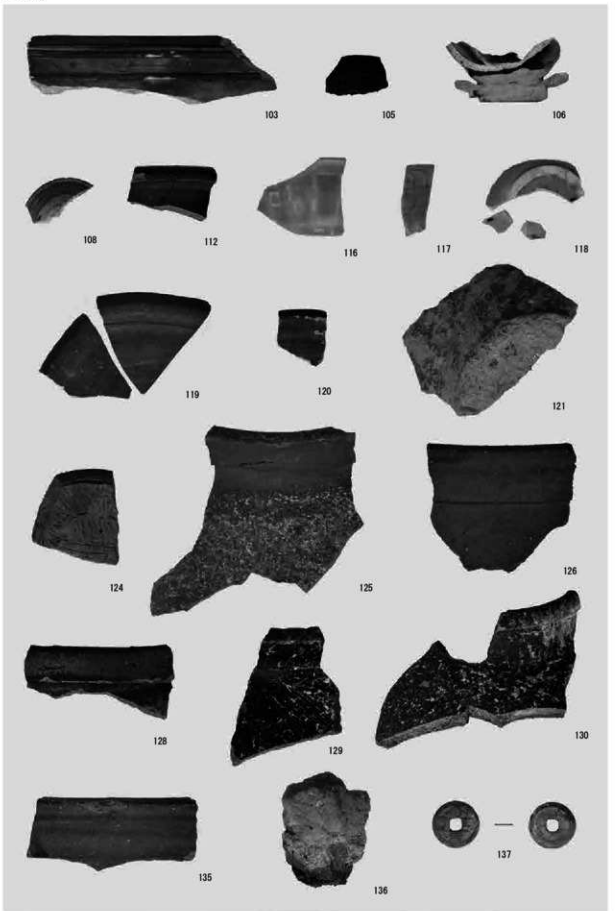
99

100

104

107

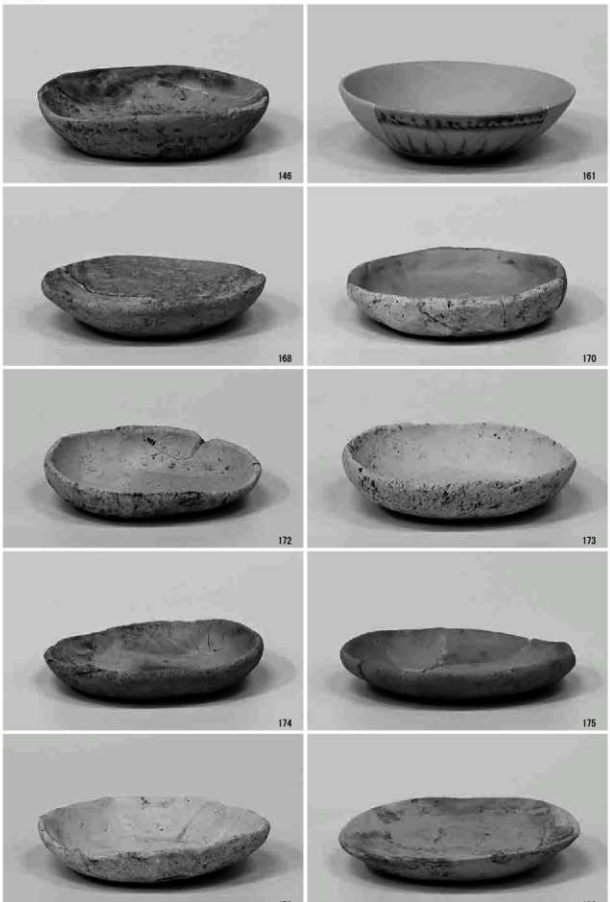
SD02　出土遺物（1）


103
105
106
108
112
116
117
118
119
120
121
124
125
126
128
129
130
135
136
137

SD02　出土遺物（2）

SD02　出土遺物（3）

PL. 30



SD03, SD04　出土遺物（1）（SD03:146, 161　SD04:168 ～ 186）

SD04　出土遺物（2）

PL. 32

224

225

226

227

228

230

SD04　出土遺物（3）

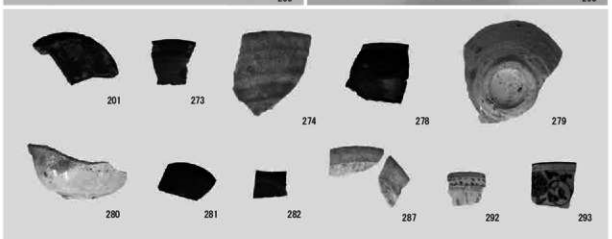
259

265

283

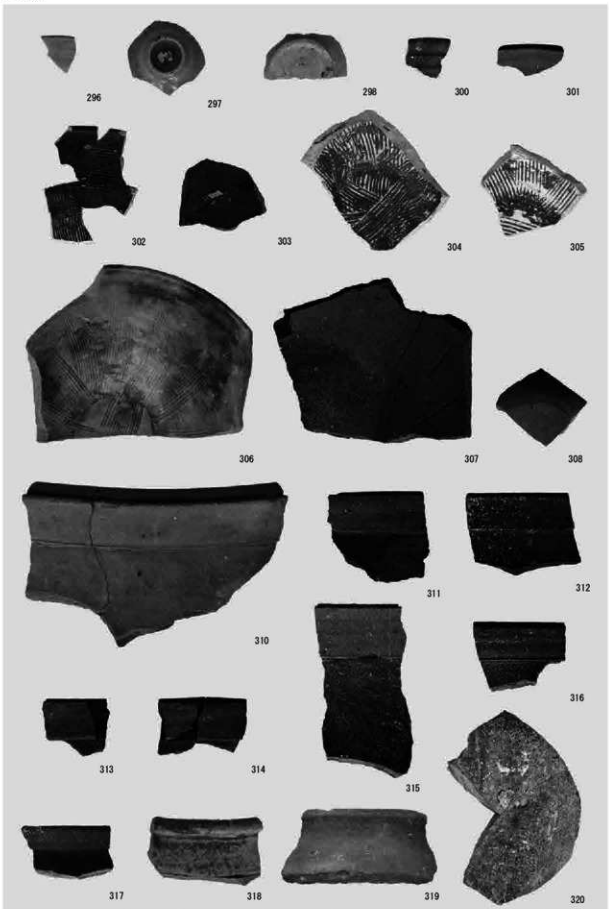
260

290

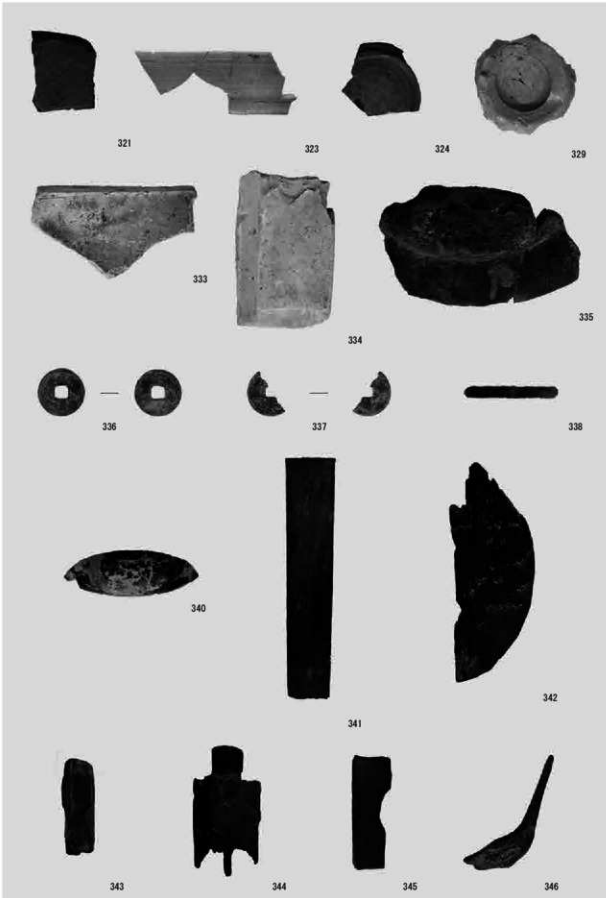

201 273 274 278 279

280 281 282 287 292 293

SD04　出土遺物（4）

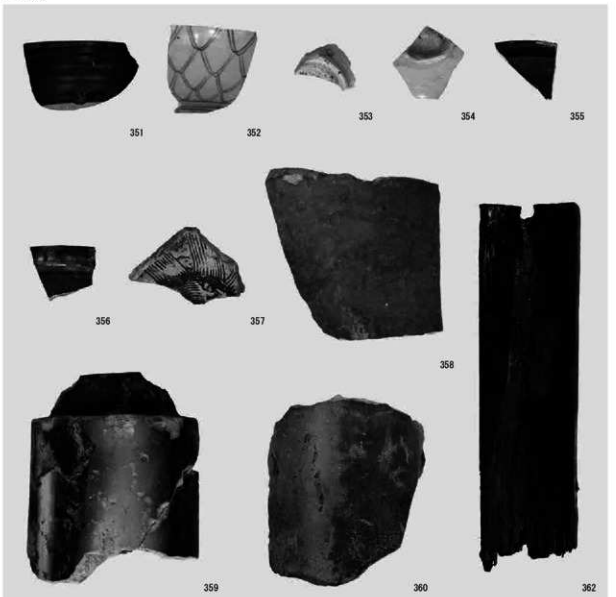

296
297
298
300
301
302
303
304
305
306
307
308
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320

SD04　出土遺物（5）


321
323
324
329
333
334
335
336
337
338
340
341
342
343
344
345
346

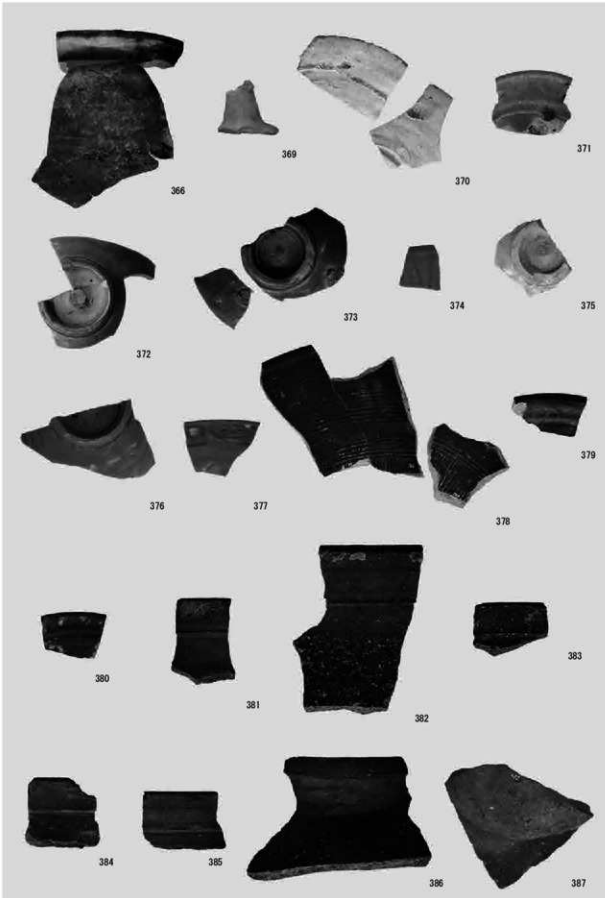
SD04　出土遺物（6）

PL. 36

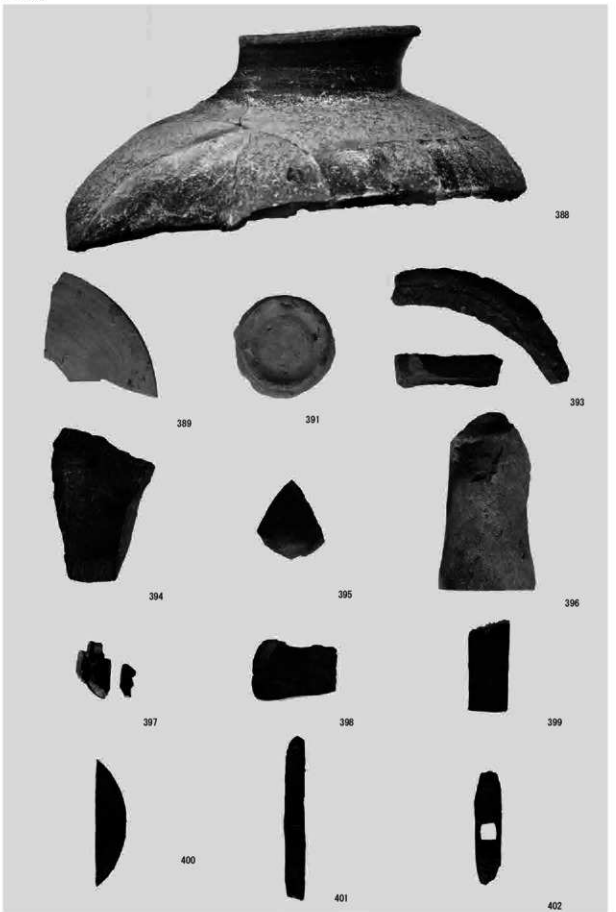


1　SE01　出土遺物

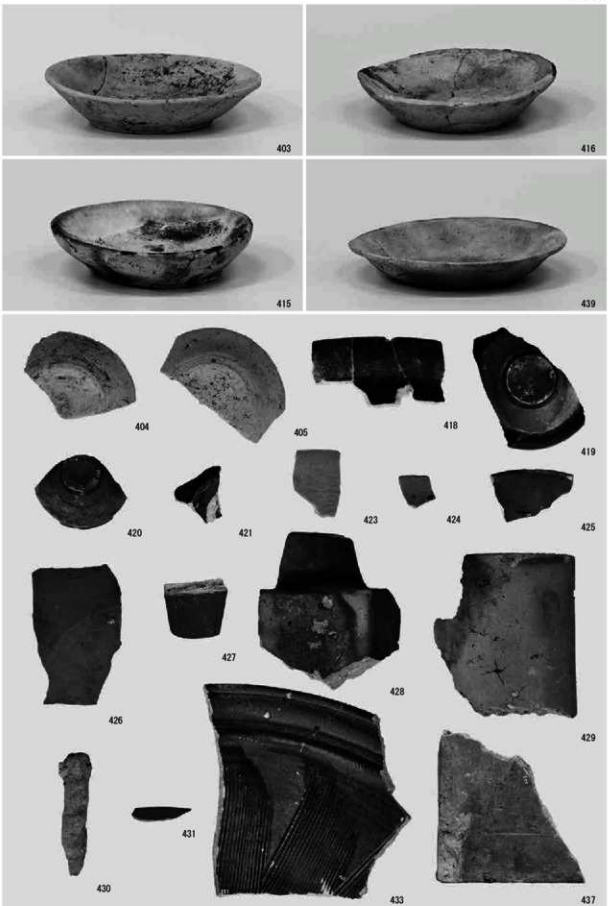
2　SE02　出土遺物（1）


366
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387

SE02　出土遺物（2）

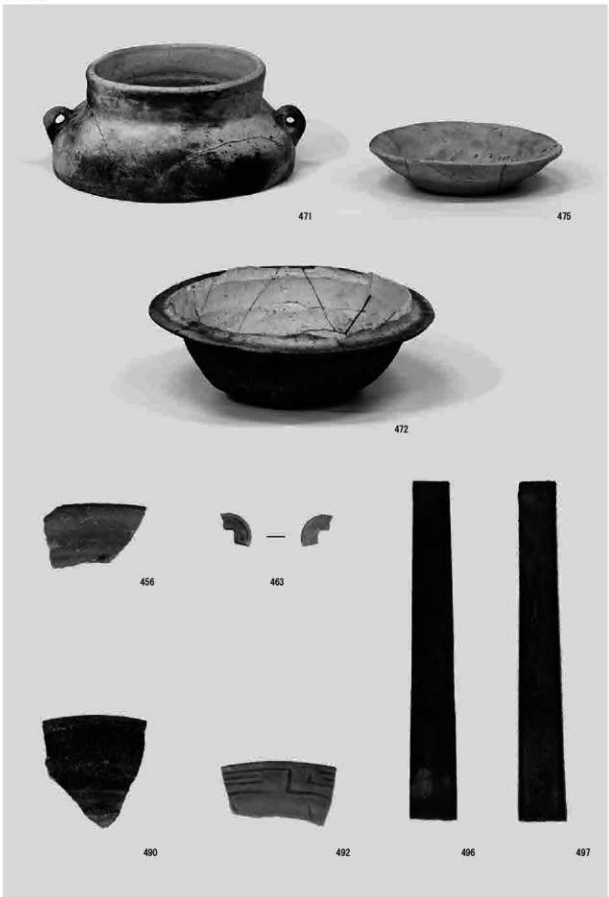


SE02　出土遺物（3）



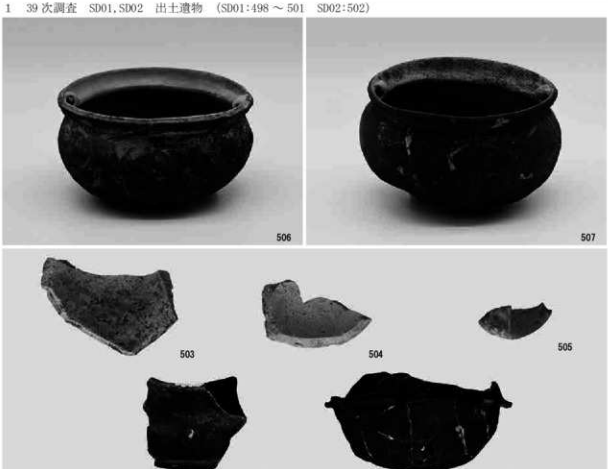
SE03, SK06, SK09　出土遺物　(SE03:403 ～ 431　SK06:432 ～ 438　SK09:439 ～ 441)

PL. 40



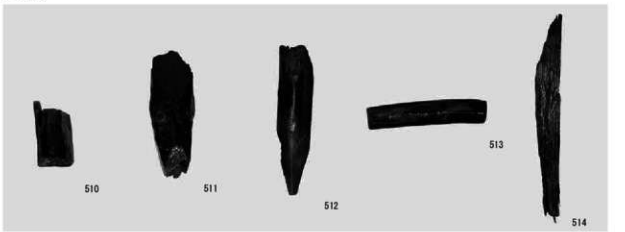
SP, SX　出土遺物　(SX01：471, 472　SX02:475　SP380(SH01):456　SP:100　SP387:490　SP722:492　SP391:496～497)

1　39 次調査　SD01,SD02　出土遺物　(SD01:498 ～ 501　SD02:502)

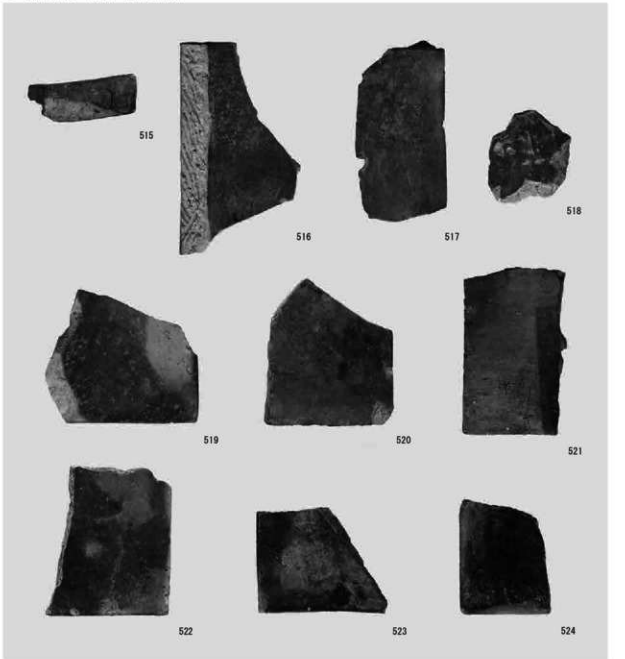


2　39 次調査　SD03　出土遺物

PL. 42



1　39次調査　SD03　出土木製品



2　39次調査　SX01　出土遺物（1）

525

526

527

528

529

530

531

532

533

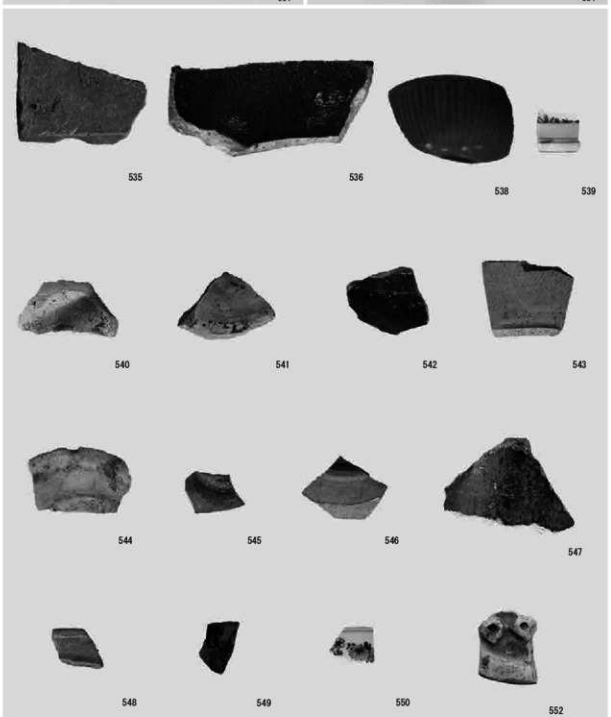
534

39 次調査　SX01　出土遺物（２）

PL. 44

537

551


535
536
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
552

39 次調査　遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

書名（ふりがな）	浜松城跡15（はままつじょうあと15）
編著者名	川西啓喜（編）、野津旭、西森忠幸、高見澤太基、田中利沙、井上亮一
編集機関	浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652　浜松市中区元城町103-2 TEL（053）457-2466　　FAX（050）3730-1391
発行機関	浜松市教育委員会
発行年月日	2022年1月31日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城跡（はままつじょうあと）	静岡県 浜松市 中区 元城町	22131	01-04-14	34度 42分 42秒	137度 43分 40秒	（27次調査） 2019年7月22日 ～ 2020年2月29日	1700㎡	店舗建設
						（39次調査） 2020年11月24日 ～ 2020年12月4日	110㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜松城跡	城跡	戦国時代	堀 井戸 掘立柱建物 柱穴列 土坑 溝	須恵器 土師器 瓦 陶磁器 漆器 木製品	三の丸北西部で堀や掘立柱建物・井戸・土坑・溝を確認した。

要約

浜松城跡は、浜松市中区元城町にある天守台や石垣を有する平山城である。今まで工事立会や不時発見等を含め50回以上の調査が行われている。

今回の調査は、27次調査・39次調査とも浜松城跡三の丸北西部で行われた。両調査では中世後期～近世の堀・掘立柱建物・井戸・土坑・溝を確認した。27次調査で見つかった北側の堀（SD01）と西側の堀（SD02）は、出土した遺物の年代から引間城の堀にあたる可能性がある。北側の堀（SD01）は、出土遺物から江戸時代をとおして堀として維持されていたと考えられ、17世紀の絵図に描かれた引間城の南西の曲輪に伴う堀の可能性があり、西側の堀（SD02）は、絵図に描かれていないことから、遅くとも江戸時代の早い段階で埋め立てられた可能性がある。

浜松城跡 15

2022 年 1 月 31 日

発　行　浜松市教育委員会

編集　浜松市市民部文化財課
（教育委員会の補助執行機関）
〒430-8652　浜松市中区元城町103-2

印　刷　株式会社近畿印刷センター

Hamamatsu Castle

The 27th and 39th excavation report

A Report of Archaeological Investigation
on 16th-19th Century Castle in Western Shizuoka,Japan

January,2022

Hamamatsu Municipal Board of Education